法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡

2022年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

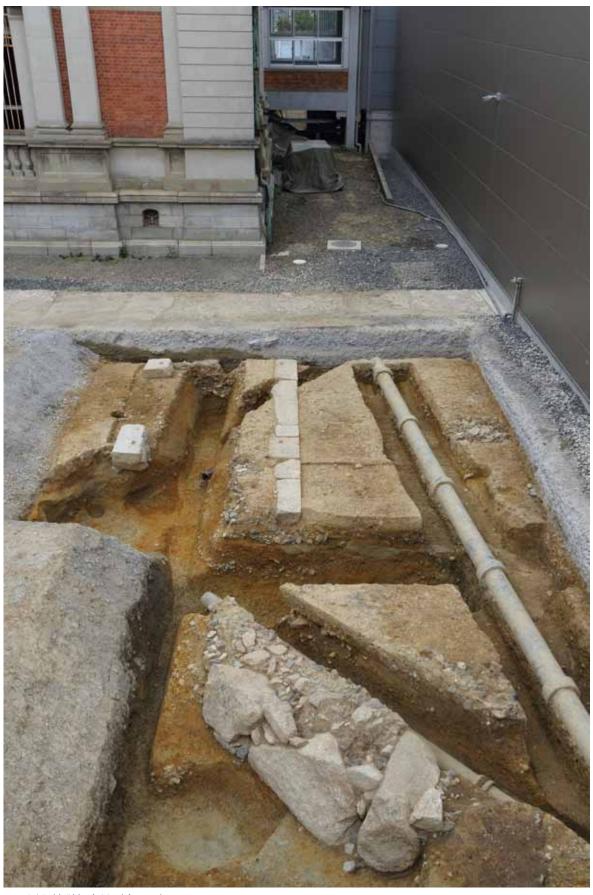
法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡

2022年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



5区北半全景 (東から)



5 区北拡張部全景 (東から)



1 6区北半溝7検出状況(西から)



2 方広寺南西隅石塁の巨石ホゾ穴(東から)



1 6区溝7瓦出土オルソ画像(上が北)



2 7区溝7瓦出土オルソ画像(上が北)



3 8区溝7瓦出土オルソ画像(上が北)

序文

京都市内には、いにしえの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地(遺跡)が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財(遺跡)は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう 努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市 考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極 的に進めているところです。

このたび、京都国立博物館本館の免震改修工事に伴う法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広 寺跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づき のことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました関係各位 に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

令和4年8月

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 所 長 井 上 満 郎

例 言

1 遺跡名 法住寺殿跡·六波羅政庁跡·方広寺跡 (京都市番号 18 S 429)

2 調査所在地 京都市東山区茶屋町 527番地

3 委 託 者 独立行政法人 国立文化財機構 京都国立博物館

分任契約担当役 副館長 栗原祐司

4 調 査 期 間 14次調査: 2018年10月22日~2019年3月22日

15次調査: 2020年9月28日~2021年5月27日

16次調査: 2022年1月14日~2022年2月28日

5 調査面積 848㎡ (14次調査: 225㎡、15次調査: 533㎡、16次調査: 90㎡)

6 調査担当者 小檜山一良

7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図 (縮尺1:2,500) 「五条大橋」を参考にし、

作成した。

8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系 VI (ただし、単位 (m) を省略した)

9 使用標高 T.P.: 東京湾平均海面高度

10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。

11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。

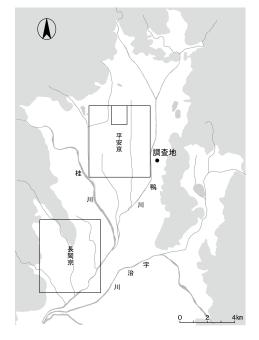
12 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。

13 本書作成 小檜山一良

付章:橋本清一(元京都府立山城郷土資料館)・関 晃史(当研究所)

14 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業

務職員があたった。



(調査地点図)

目 次

1.	調査経過	1
	(1)調査に至る経緯	1
	(2) 調査の経過	2
2.	位置と環境	6
	(1) 地理的環境	6
	(2) 歷史的環境	6
	(3) 周辺の調査	9
3.	遺 構	14
	(1) 基本層序	14
	(2) 遺構の概要	15
	(3) 1区の遺構	16
	(4) 2区の遺構	17
	(5) 3区の遺構	17
	(6) 4区の遺構	18
	(7) 5区の遺構	19
	(8) 6~13区の遺構	23
4.	遺 物	27
	(1) 遺物の概要	27
	(2) 土器類	28
	(3) 土製品	29
	(4) 瓦類	30
	(5) 煉瓦	34
	(6) 石製品	35
	(7) 金属製品	36
	(8) 木製品	37
5.	まとめ	38
	(1) 平安時代後期	38
	(2) 安土桃山時代から江戸時代中期	38
	(3) 江戸時代後期	40
	(4) 明治時代以降	41
	(5) 発見した礎石と方広寺大仏殿院について	42

図 版 目 次

巻頭図版1 遺構 5区北半全景(東から)

巻頭図版2 遺構 5区北拡張部全景(東から)

巻頭図版3 遺構 1 6区北半溝7検出状況(西から)

2 方広寺南西隅石塁の巨石ホゾ穴(東から)

巻頭図版4 遺構 1 6区溝7瓦出土オルソ画像(上が北)

2 7区溝7瓦出土オルソ画像(上が北)

3 8区溝7瓦出土オルソ画像(上が北)

図版1 遺構 1区平面図(1:150)

図版2 遺構 1区北壁・西壁断面図(1:80)

図版3 遺構 2区実測図 (1:80)、集水桝3・溝84立面図 (1:50)、4区実測図 (1:80)

図版4 遺構 3区実測図(1:80)

図版5 遺構 3区土坑18・土坑9・集水桝8実測図(1:50)

図版6 遺構 5区平面図(1:150)

図版7 遺構 5区北壁・東壁断面図(1:80)

図版8 遺構 5区西端断面図、5区西拡張区北壁・西壁断面図(1:50)

図版9 遺構 5区築地3地業東西断面図、再建期整地層東西断面図(1:50)

図版10 遺構 5区築地3地業南北断面図、土坑6他南北断面図、柱列2実測図(1:60)

図版11 遺構 5区柱列141 · 石組140 実測図(1:60)

図版12 遺構 6~13区平面図1 (1:100)

図版13 遺構 6~13区平面図2(1:100)

図版14 遺構 6 · 7区断面図(1:80)

図版15 遺構 8~10区断面図(1:80)

図版16 遺構 11~13区断面図(1:80)

図版17 遺構 11区土坑60断面図 (1:50)、8区柱列77実測図 (1:80)

図版18 遺構 11区柱列53、10・13区柱列133実測図(1:80)

図版19 遺構 7区柱列121・土坑76実測図(1:50)

図版20 遺構 7区溝49実測図(1:50)

図版21 遺物 土器類実測図(1:4)

図版22 遺物 瓦類拓影及び実測図1(1:4)

図版23 遺物 瓦類拓影及び実測図2(1:4)

図版24 遺物 瓦類拓影及び実測図3(1:4)

```
図版25 遺物 瓦類拓影及び実測図4(1:4)
```

- 図版30 遺物 瓦類実測図9(1:4)
- 図版31 遺物 瓦類実測図10(1:8)
- 図版32 遺物 瓦類拓影及び実測図11(1:4)
- 図版33 遺物 瓦類拓影及び実測図12(1:4、瓦50のみ1:6)
- 図版34 遺物 刻印瓦·線刻瓦拓影1(1:2)
- 図版35 遺物 刻印瓦・線刻瓦拓影2(1:2)
- 図版36 遺物 刻印瓦·線刻瓦拓影3(1:2)
- 図版37 遺物 煉瓦実測図(1:4)、刻印拓影(1:2)
- 図版38 遺物 石製品実測図1(1:8、石1のみ1:4)
- 図版39 遺物 石製品実測図2(1:4)
- 図版40 遺物 石製品実測図3(1:4、石18のみ1:6)
- 図版41 遺構 1 1区西半全景(北東から)
 - 2 1区東半全景(東から)
 - 3 1区井戸65 (北から)
- 図版42 遺構 1 2区全景(西から)
 - 2 3区北半全景(東から)
- 図版43 遺構 1 3区南半全景(北東から)
 - 2 4区全景(北から)
 - 3 5区南半全景(東から)
- 図版44 遺構 1 5区北拡張部全景(東南東から)
 - 2 5区築地3 礎石列4・石列139 (西から)
- 図版45 遺構 1 5区築地3地業断面(東から)
 - 2 5区礎石列4 石8 (南から)
 - 3 5区礎石列4 石9 (南から)
 - 4 5区礎石列4 石8ホゾ穴(北から)
 - 5 5区礎石列4 石9ホゾ穴(北から)
- 図版46 遺構 1 5区石列139 石7 (北から)
 - 2 5区石列139 石6 (北から)
 - 3 5区石列139 石5 (北から)
 - 4 5区石列139 石4(北から)

- 5 5区石列139 石3 (北から)
- 6 5区石列139 石2(北から)
- 7 5区石列139 石1 (北から)
- 8 5区礎石列4 石9矢穴痕(北から)
- 図版47 遺構 1 5区石組140(北東から)
 - 2 5区礎石据付穴141 (南東から)
 - 3 5区溝7断面(東から)
 - 4 5区溝24土師器皿出土状況(西から)
 - 5 5区土坑6土師器皿出土状況(西から)
- 図版48 遺構 1 6区北半溝7検出状況(東から)
 - 2 6区北半溝7完掘状況(東から)
 - 3 6区南半溝24 (西から)
- 図版49 遺構 1 7区南東部溝24(西から)
 - 2 7区南西部溝24・柱列121 (東から)
 - 3 7区北東部溝7検出状況(東から)
- 図版50 遺構 1 7区北西部溝7検出状況(東から)
 - 2 7区溝7瓦出土状況(西から)
 - 3 7区北東部溝7完掘状況(西から)
 - 4 7区北西部溝7完掘状況(東から)
- 図版51 遺構 1 7区溝49 (南東から)
 - 2 7区土坑76 (東から)
 - 3 8区南半全景(北から)
- 図版52 遺構 1 8区溝7検出状況(東から)
 - 2 8区溝7瓦出土状況(西から)
 - 3 8区溝7完掘状況(東から)
 - 4 8区柱列77 (南東から)
- 図版53 遺構 1 9区全景(北西から)
 - 2 10区全景(東から)
- 図版54 遺構 1 11区全景(西から)
 - 2 11区柱列53 (西から)
 - 3 11区土坑60断面(南から)
- 図版55 遺構 1 12区全景(西から)
 - 2 13区全景(東から)
- 図版56 遺物 土器類
- 図版57 遺物 瓦類1

図版58 遺物 瓦類2 図版59 遺物 瓦類3 図版60 遺物 1 焼け瓦 2 鬼瓦 図版61 遺物 瓦類刻印 図版62 遺物 煉瓦・石製品

挿 図 目 次

図 1	調査位置図(1:5,000)	1
図2	調査区配置図(1:600)	2
図3	5 区調査前全景(北東から)	4
図 4	5区作業状況(東から)	4
図5	7 区作業状況 1 (西から)	4
図6	7区作業状況 2 (西から)	4
図7	11区作業状況(西から)	4
図8	博物館職員説明会風景(南東から)	4
図 9	報道発表風景 (東から)	4
図10	築地基礎養生埋戻し状況(西から)	4
図11	京都国立博物館構内調査位置図(1:1,500)	10
図12	基本層序柱状図(1:40)	14
図13	1 区井戸65 実測図(1:50)	16
図14	土管刻印	18
図15	5 区築地 3 (礎石列 4 ・石列 139) 実測図(1:60)	20
図16	5 区築地 3 礎石・地覆石 ホゾ穴・刻印拓影 (1:10)	21
図17	5 区築地 3 礎石·地覆石 矢穴痕拓影 (1:8) ······	21
図18	9 区溝 102・柱列 104 実測図(1:50)	24
図19	12区旧本館煉瓦積み基礎(北東から)	25
図20	土製品実測図(1:3、土4のみ1:4)	29
図21	瓦11カキヤブリ	31
図22	銭貨拓影 (1:1)	36
図23	金属製品実測図(1:4)	36

図24	木製品実測図(1:4)	36
図25	遺構概要図(1:500)	39
図26	方広寺南西隅石塁実測図(1:80)	42
図27	方広寺南築地復元図(1:600、1:200)	43
図28	礫の寸法測定法	45
図29	礫の円磨度の段階表	45
図30	築地3·石組140調査石材(1:50) ······	46
	表目次	
表1	京都国立博物館構内調査一覧表	11
表2	遺構概要表	15
表3	遺物概要表	27
表4	肉眼観察による岩石の風化度の区分表	45
表5	石材観察結果一覧表	47
	付表目次	
付表 1	土器類観察表	49
付表 2		49
付表3		50
11 20	VALLED WAY SERBICK IN	50

法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡

1. 調査経過

(1)調査に至る経緯

調査地は、京都市東山区茶屋町527番地の京都国立博物館敷地内に所在しており、法住寺殿跡・ 六波羅政庁跡・方広寺跡にあたっている。重要文化財である明治古都館(以下「旧本館」という) の免震改修工事が計画され、2010・2015年度に発掘調査を実施し、遺構が良好な状態で検出され ていた。このことから京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課(以下「文化財保護課」 という)は、さらに発掘調査が必要と判断した。調査は、独立行政法人国立文化財機構京都国立博 物館(以下「博物館」という)から委託された公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が行うことに なった。

調査の目的は、既往の調査成果から、法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡及び恭明宮に関連した遺構の確認と当地の歴史的変遷を明らかにすることである。

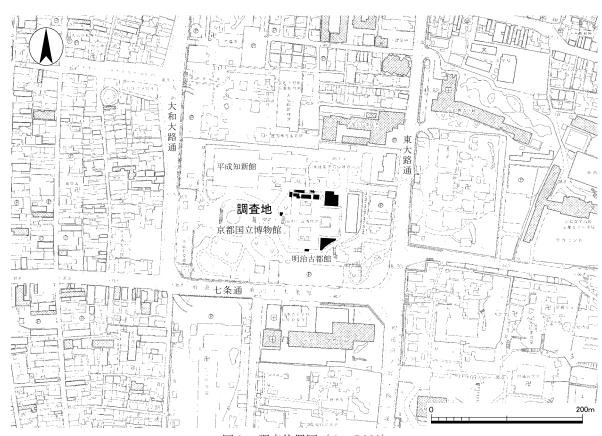


図1 調査位置図(1:5,000)

(2)調査の経過(図1~10)

今回の調査は、2018年度から2021年度にかけて実施した。調査区は、旧本館建物の周辺とその内部の13箇所である。

14次調査 初年度の2018年度は14次調査として、1・2・4・9・10・12区の6箇所の調査を実施した。調査区の位置は、1区が旧本館の南東部、2区は旧本館の南側、4・9区は旧本館の西側、10・12区が旧本館の北側に位置する。調査面積は計225㎡である。

1区では残土仮置き場確保のため、東西に2分割して調査を実施した。2018年10月22日から重

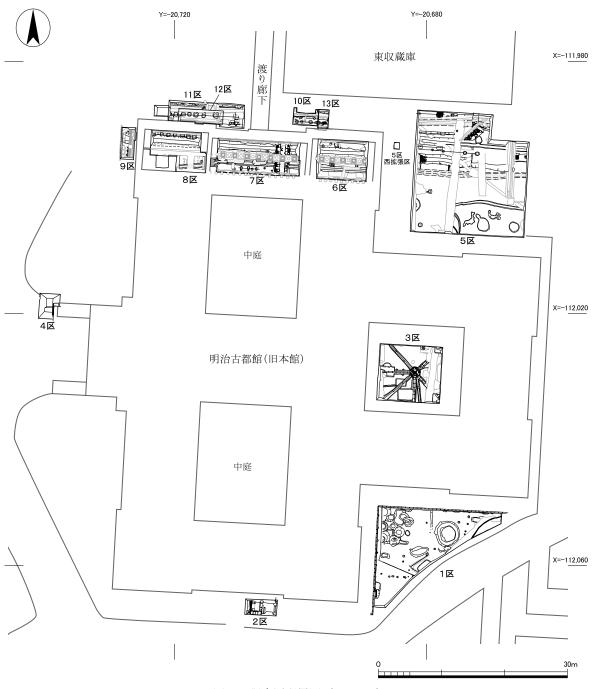


図2 調査区配置図(1:600)

機で1区西半の現代盛土を掘削し、以降、人力で調査を行った。地表下0.5 m (標高41.6 m) の地山 面で平安時代後期の井戸や近代以降の井戸や土坑を検出した。1区西半の調査終了後に埋め戻し、 次いで1区東半の調査を開始した。以降、2・4・9・12区の順に調査を進め、12区は12月28日 に終了した。調査と並行して行われていた周辺工事のため調査を一時中断し、10区は2019年3月 12日から開始し、22日に終了した。なお、10区では遺構の規模を確認するため、博物館の了承を得 て、文化財保護課の指導により北側に2箇所計0.7 mを拡張した。

調査中の排土は敷地内にフレコンバックに詰めて仮置きし、調査終了後に埋め戻した。遺構の記録は、実測図やオルソ測量図を作成し、写真撮影を行った。

調査の結果、平安時代後期の木枠組井戸、安土桃山時代から江戸時代中期の溝、明治時代初期の 石組溝などを検出した。

調査中は適時、文化財保護課の臨検・指導を受けた。12月12日には文化庁の視察を受けた。

15次調査 2020年度は15次調査として、 $5\sim8\cdot11\cdot13$ 区の6箇所の調査を実施した。5区は旧本館の北東部、 $6\sim8$ 区は旧本館の床下部分、 $11\cdot13$ 区は旧本館の北側に位置する。調査中に博物館と文化財保護課との協議により、さらに5箇所の拡張区が追加された(5区北拡張・西拡張、 $6\sim8$ 区南拡張)。調査面積は計533㎡である。

5区は残土仮置き場確保のため、南北に2分割して調査を実施した。2020年9月28日から重機で5区北半の現代盛土を掘削し、以降、人力で調査を行った。地表下約0.4 m (標高約41.8 m)で安土桃山時代の築地塀礎石・溝・整地層、江戸時代の溝・土坑を検出した。次いで11・13区も同様に調査を行った。旧本館床下の6~8区の調査は、表土掘削を含めてすべて人力で行った。以降、5区南半、6~8区南拡張、5区北拡張の順で調査を進め、最終となる5区北拡張区は2021年5月27日に終了した。

調査の結果、安土桃山時代から江戸時代中期の礎石据付け穴・築地塀礎石列・石組・柱列・溝・ 土坑・整地層、明治時代初期の石組溝・漆喰土坑などを検出した。

調査中は適時、文化財保護課の臨検・指導を受けた。また、11月26日には文化庁山下主任調査官の視察を受けた。

博物館職員を対象とした遺跡説明会を2020年11月6日、2021年4月23日の2回実施した。

また、豊臣秀吉創建期方広寺跡の築地塀の遺構を初めて検出したことから、報道発表を2021年2月10日に実施し、発掘調査の成果を発表した。

博物館と文化財保護課の協議により、5区の築地塀礎石列周辺は、現地保存されることとなり、 調査終了時に土嚢と保護砂により養生して遺構を埋め戻した。なお、整理対象外となった出土瓦小 片は、5区北部に養生したのちに埋め戻して現地保存した。

16次調査 2021年度は16次調査として、3区の調査を実施した。旧本館の東中庭部にあたるため、すべて人力で掘削及び反転埋戻しを行った。調査面積は90㎡である。

2022年1月14日から準備工を開始した。残土仮置き場確保のため、南北に2分割して調査を実施した。1月17日から南半の現代盛土を掘削し、調査を行った。南半部の調査終了後に埋戻しを行



図3 5区調査前全景(北東から)



図4 5区作業状況 (東から)



図5 7区作業状況1 (西から)



図6 7区作業状況2 (西から)



図7 11区作業状況(西から)



図8 博物館職員説明会風景 (南東から)



図9 報道発表風景(東から)



図10 築地基礎養生埋戻し状況(西から)

い、次いで北半も掘削し、同様に調査を行った。2022年2月28日にすべての調査を終了し、撤収 した。

調査の結果、旧本館に伴う雨水排水施設・土坑、江戸時代の溝・土坑・柱穴などを検出した。 調査中は適時、文化財保護課の臨検・指導を受けた。

3 次にわたる調査の面積は、14次調査が225 m、15次調査が533 m、16次調査が90 mであり、計848 mとなった。

調査及び報告書作成にあたり、以下の方々からご教示を得た。記して感謝いたします。

浅田昌久(浅田製瓦工場)、網 伸也(近畿大学)、市川 創(大阪府教育庁)、一瀬和夫(京都橘大学)、馬瀬智光(京都市文化財保護課)、大西征爾(京都国立博物館)、尾野善裕(京都国立博物館)、尾下成敏(京都橘大学)、河内将芳(奈良大学)、北垣聰一郎(石川県金沢城調査研究所)、鋤柄俊夫(同志社大学)、鈴木久男(京都産業大学)、鈴木久史(京都市文化財保護課)、高田 徹(城郭史料研究会)、谷 徹也(立命館大学)、塚原十三雄(京都伝統建築技術協会)、登谷伸宏(京都工芸繊維大学)、中井 均(滋賀県立大学)、中島 正(花園大学)、中村武生(京都女子大学)、長宗繁一(元京都市生涯学習総合センター)、西山良平(京都大学)、橋本清一(元京都府立山城郷土資料館)、福島克彦(大山崎町歴史資料館)、前田義明(元京都市考古資料館)、三瓶裕司(かながわ考古学財団)、水ノ江和同(同志社大学)、三好孝一(大阪府立弥生文化博物館)、森岡秀人(関西大学)、森島康雄(京都府立丹後郷土資料館)、山下信一郎(文化庁)、山田邦和(同志社女子大学)、横田冬彦(京都大学)

(敬称略、五十音順、肩書は調査時)

2. 位置と環境

(1) 地理的環境

立地 調査地の属する東山区一帯は、東辺に東山連峰、西辺に扇状地、両者の間に丘陵、段丘が 占めている。標高は東が高く西が低く、各々の地形は南北に帯状に細長い構成となっている。

また、地質構成では、東山連峰はチャートおよび泥岩を主とする中世層からなる。中央部の丘陵・段丘面は、大阪層群すなわち前期更新世(洪積世)の砂泥互層および礫質堆積物の分布域である。西部の扇状地面は、後期更新世から完新世(沖積世)の堆積層から成る。

調査地東側の東山連峰は、標高200~250 mで、数本の谷筋によって将軍塚山(216.2 m)、清水山(242.5 m)、阿弥陀ヶ峰(196.4 m)、泉山(192.0 m)の山体に区切られる。谷筋の方向は、ほぼ南東から北西方向を指している。

調査地の自然地形も東山連峰の阿弥陀ヶ峰・泉山方向から鴨川に向けて南東から北西方向に緩 やかに広がる扇状地形を呈し、調査地点はその先端に近い箇所に相当する。

調査地の京都国立博物館は、東側を東大路通、南側を七条通、西側を大和大路通に囲まれ、北側は豊国神社に接する。京都国立博物館本館西の標高は約42.2 mで、大和大路沿いの博物館西正門前で約37.7 m、大和大路七条の交差点で約35.8 mとなり、およそ北東から南西に向かってゆるやかに傾斜する。本館付近と北側の豊国神社付近の標高は、いずれも約42.8 mで平坦である。また、博物館東門付近の標高は約49.7 mで、本館西の標高と比較すると約7.5 m高く、東大路通と本館の間には急傾斜が認められる。このような様相から、調査地一帯の旧地形は、時期は断定できないものの大規模な改変を受けていることがうかがえる。

位置 調査地西側の大和大路通・本町通(伏見街道)は、京都と奈良を結ぶ主要街路である。調査地南側の七条通は、平安京七条大路の東延長(七条大路末)にあたり、さら東へは渋谷越(汁谷越・久々目路)・醍醐路(滑石越)によって山科を経て東海道・東山道へと繋がる。このように調査地は、平安時代以降交通の要所であったと捉えられる。

(2) 歷史的環境

1) 中世以前

奈良時代以前 調査地の周辺では、弥生時代・古墳時代の遺構が確認されている。博物館南側で 実施された発掘調査では住居跡などを検出しており、当地域が京都盆地の中でも早い時期から開 発されたことがわかる。

平安時代前期から中期 永延2年 (988) に、当地に藤原為光によって法住寺が造営されるが、 正確な位置は不明である。発掘調査では平安時代前期から後期前半の顕著な遺構は検出されてい ないが、遺物は出土しており、生活が営まれたと推定できる。

平安時代後期(法住寺殿期) 平安時代後期には、後白河上皇によって法住寺殿が造営され、こ

れ以降大きく開発が進む。法住寺殿の範囲やその様子は、発掘調査及び試掘・立会調査や文献史料などから、ある程度推測できる。北は左女牛小路末(現渋谷道付近)、南は法住寺池(大谷中高等学校敷地・東山泉小学校グランド)・最勝光院(東山泉小学校校舎)の南側に位置する針小路末(現泉涌寺道)付近。西は法性寺路(現本町通)、東は現在の東大路通で、これより東側は傾斜地となる。『山槐記』に、「今日院有御移徒于法住寺殿、彼是曰、件殿四郭被籠十余町、其内堂舎大小八十余宇被壊棄、衆人有怨云々、」とあり、法住寺殿内には造営以前、堂舎が多数存在したことが知られる。殿域内の配置は、北側に法住寺北殿、中央部に法住寺南殿、南殿に付属して蓮華王院、南側に法住寺池に接して最勝光院が想定できる。現博物館敷地は、法住寺殿北殿の東部及び新御所付近に相当すると考えられる。

鎌倉時代(再建法住寺殿期) 鎌倉時代の遺構や遺物は、当地域全体としては少なくなるが、博物館敷地付近の調査では当該期の遺構・遺物を検出している。特に博物館南側の発掘調査では多量の瓦が出土した。

建久2年(1191)には、源頼朝によって法住寺殿が再建される。再建された法住寺殿の範囲は、 文献では不明である。当該期の遺構・遺物については、これまで六波羅探題に関連したものと考え られていたが、その実態は不明な部分が多い。

その後、建長元年(1249)3月23日に、蓮華王院の御堂(三十三間堂)・塔・不動堂などが焼亡。 。) し、三十三間堂は文永3年(1266)4月27日に再建、供養された。その後、当地域の史料は少な くなり、鎌倉時代後期から室町時代の状況は不明な点が多いが、当地の東側には妙法院が造られ、 中世以降盛行し蓮華王院などもこの境内に含まれる。

2) 安土桃山時代から江戸時代前半(方広寺期)

創建期方広寺 豊臣秀吉は、天正13年(1585)頃、方広寺の造営を計画し、天正14年(1586) 4月1日には大仏及び大仏殿の建立場所を当初東福寺近傍とするが、さらに同年5月12日には造 営予定地を現在位置に改める。天正16年(1588)5月15日に大仏殿居礎の儀が行われ、方広寺大 仏殿造営工事が開始された〔『御湯殿上日記』〕。この様子は、「京ニハ大仏建立トテ、石壇ヲツミ土 ヲ上テ、其上ニテ洛中上下ノ衆ニ餅酒シテオトラセル、事々敷フシン也云々。西国ヨリ柱モ少々出 云々、富社大鳥居ノ木大坂迄来ル處、杉ニテ用ニ不立、又檜木可上ト下知也云々」とあり、当時の 地業の様子を伝える〔『多聞院日記』〕。

秀吉が建立した大仏殿は、上重の屋根が下重の裳階屋根より大きい形式となる「雪打造」と呼ばれる構造であった。天正19年(1591)5月20日には、「大佛のはしら立也、一本立、事外大儀なる音也、見物共有レ之也」とあり、立柱・上棟が行われた〔『晴豊記』・『鹿苑日記』〕。大仏は、工期短縮のために金銅仏から漆喰仏に変更させた。文禄5年(1596)2月25日には、中門が立柱する。同年閏7月13日に「慶長伏見地震」が発生した。その時の様子は「大佛事、堂無為、奇妙々々、本尊大破、左御手崩落了、御胸崩、其外所々響在之、後光聊モ不損、中門無為、但四方角柱、少々サクル、其外無巳大儀、三方ノ築地悉崩、或倒壊」とある。このことから、創建期方広寺には大仏殿・三方築地・中門が存在したことがわかるが、それ以外の施設は不明である。創建期寺域の詳細は不

明であるが、現方広寺寺域の北側・西側・南側一部に石塁が現存し、南側石塁は発掘調査の結果、 創建期のものであることがわかっている。

再建期方広寺 地震後、豊臣秀頼によって方広寺の再建が計画される。慶長4年(1599)5月7日には、大仏殿再建の為の用材を求めている〔『薩藩旧記』〕。しかし、慶長7年(1602)12月4日に大仏殿内で鋳造中の大仏から出火、大仏は大仏殿と共に焼亡する〔『義演准后日記』〕。火災から7年後、慶長14年(1609)春には秀頼によって大仏殿復興が着手され、慶長16年(1611)4月27日立柱、翌年4・5月に完成した〔『当代記』〕。再建期方広寺の伽藍配置は、「大佛に七層塔及び講堂廻廊(ママ)以下縄張」と記される。既存の発掘調査では、大仏殿南側の回廊跡を検出し、この史料を裏付けた。

再建期寺域は、北辺と東辺は先述した創建期方広寺の段階と変わっていないと考えられる。西辺については、「今度大佛の築地を三十三間の西方に築かる、大佛と一所になる」とあり、三十三間堂の西側に築地を築いたことがわかる。この築地は、現存する太閤塀と考えられる。太閤塀の北側には東寺南大門として移築される明治28年(1895)まで西門(崩門)が存在した。この西門には、「慶長六年辛丑再興(中略)大仏三十三間堂西之御門」の棟札写しがあり、慶長6年(1601)に築造されたことがわかる。西門と現蓮華王院南大門と様式が類似することから、同時期の築造と推定される。これらのことから、寺域南辺は現塩小路、西辺は大和大路と推定できる。

近世の方広寺 豊臣家滅亡後、方広寺は江戸幕府によって妙法院の管理下に置かれたため、大仏殿等は存在していた。その威容は、各種の『洛中洛外図』に描かれる。寛文元年(1661)8月から、方広寺諸堂舎などの修復が行われるが、寛文2年(1662)に地震を受け、大仏は倒壊し銅銭に鋳潰された〔『続史愚抄』〕。地震後の、寛文7年(1667)に修復は完了する。この寛文年間の修復記録によれば、大仏殿本堂・回廊・二王門・南之門・鐘楼堂などが存在していたことがわかる。その後、寛政10年(1798)7月1日に方広寺大仏殿は落雷を受ける。これによる火災で大仏殿・楼門・回廊などが焼亡したが、その他の施設への被害は不明である。

3) 明治時代以降

明治4年以降(恭明宮期) 明治時代には、当地に恭明宮が造営された。恭明宮は、神仏分離令により、禁裏内の仏像や天皇・皇后位牌の安置、及び宮中女官の住居として造営された施設である。恭明宮は、明治2年(1869)正月20日に、「大佛」に「薙髪並隠居」として計画され、方広寺跡が建設予定地となっている。翌3年3月18日に地鎮祭を行い、翌4年5月に竣工した〔『中御門経緯日記』〕。その後、恭明宮は次第に荒廃し、明治6年(1873)3月14日に機能を停止した。その後、建物用材は豊国神社建設に再利用され、残余は府下小学校などに利用された。

明治25年以降(帝国京都博物館期) 帝国京都博物館は、明治22年(1889) 5月の官制公布により設置が正式決定する。「博物館の位置は、愈大仏境内恭明宮跡に設置することに其筋の達しありたるよし、(後略)」とある。同年7月6日には建設予定地が決定し、北が豊国神社境内、西が大和大路、東が現妙法院境内、南が七条通までである。敷地は、おおむね西半が旧恭明宮敷地(宮内省管轄地)、東半が民有地にあたっていた。明治25年(1892) 3月から旧本館工事が始まり、4月

に「地均工事」が行われる。地均工事の範囲は不明である。その後、明治28年(1895)10月に旧本 館竣工、2年後に開館した。

昭和44年(1969)には旧帝国京都博物館陳列館として国の重要文化財に指定され、特別展の展示館として使用されていた。その後、免震改修工事が計画され、旧本館は2015年から長期休館中である。

(3) 周辺の調査(図11、表1)

本調査地の周辺では平安時代後期の法住寺殿および六波羅政庁、桃山時代の方広寺跡などの遺跡が知られている。調査地周辺では、これまで多くの発掘調査や試掘・立会調査が実施され、各時代の多岐にわたる遺構を検出している。当調査区の周辺調査については、これまでの調査報告書等でまとめられている。そのため、今回は京都国立博物館敷地内で行われた発掘調査・立会調査を集成し、主要な調査成果について、別表にまとめるにとどめた。図中の調査番号は本文中の番号と一致する。

註

- 1) 小檜山一良·津々池惣一·上村和直『法住寺殿跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2012-10 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2013年
- 2) 『日本紀略』永延2年(988) 3月26日条
- 3) 杉山信三「法住寺殿とその御堂」『藤原氏の氏寺とその院家 院家建築の研究 』奈良国立文化財研究所学報第19冊 同研究所 1968年〔『院家建築の研究』吉川弘文館 1981年に再録〕、上村和直「法住寺殿の成立と展開」『研究紀要』第9号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2004年
- 4) 『山槐記』永暦2年(1161) 4月13日条
- 5) 杉山信三『院御所とその御堂 院家建築の研究 』 奈良国立文化財研究所学報第11冊 同研究所 1962年〔『院家建築の研究』吉川弘文館 1981年に再録〕、川本重雄「法住寺殿の研究」『建築史論叢』 稲垣栄三先生還暦記念論集 中央公論美術出版 1988年、上村和直「法住寺殿の成立と展開」『研究 紀要』第9号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2004年
- 6) 『法住寺殿跡』平安京跡研究調査報告第13輯 古代學協會 1984年
- 7) 『吾妻鏡』建久2年(1191)2月21日条
- 8) 『百練抄』建長元年(1249) 3月23日条
- 9) 『一代要記』文永3年(1266)4月27日条
- 10) 『愚子見記』「雨ノ大仏殿、日ノ講堂ト申スハ南都大佛殿之雨垂ハ無キ 世ニ類ヒ」、「京東ノ大佛殿、慶長三戌年、造リハ古奈良ノ造也」、「此造様、外側ノ柱ヲ立登セ腰蓋有リ上ノ雨落腰蓋ノ外へ落ル」とある。
- 11) 『義演准后日記』 文禄 5 年 (1596) 閏 7 月 13 日条
- 12) 『史跡方広寺石塁修復工事報告』京都国立博物館 1987年
- 13) 『義演准后日記』慶長5年(1600) 3月18日条
- 14) 『義演准后日記』慶長5年(1600) 5月12日条

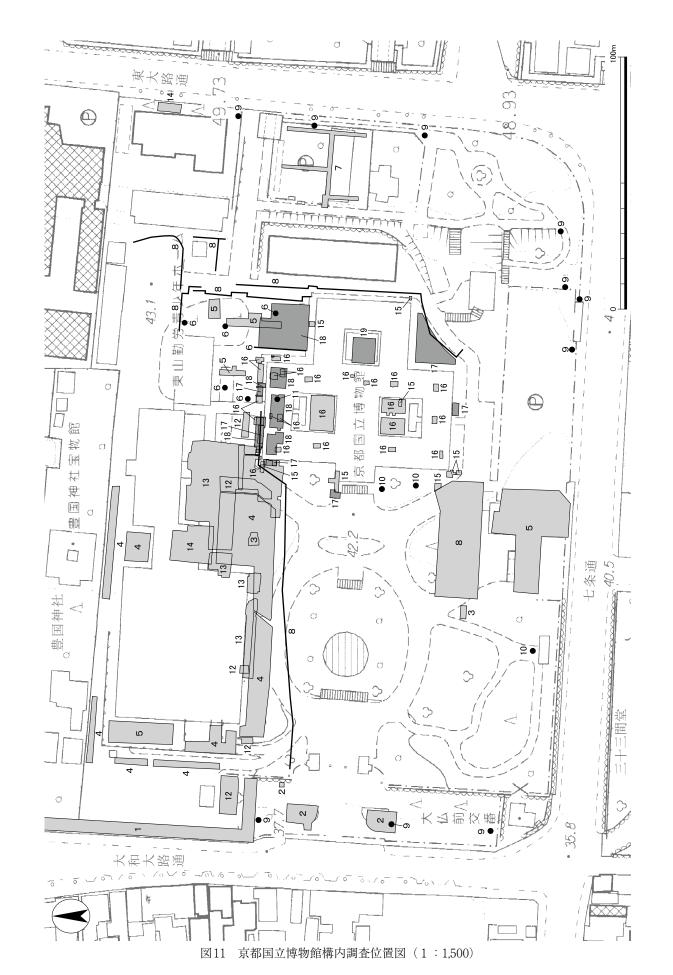


表 1 京都国立博物館構内調査一覧表

No.	遺跡名	調査 方法	調査期間	調査機関	検出遺構	出土遺物	文献	備考
1	方広寺	発掘	1978.03.22 ~03.31, 1982, 1983, 1984	京都国立博物館	安土桃山の方広寺大仏殿西 面石垣・築地跡。	安土桃山の土器類・石仏など。	1	
2	六波羅政庁	発掘	1994.02.24 ~04.29	京都市埋蔵文化財研究所	平安後期の井戸・柱穴・土 坑など、鎌倉〜室町の溝・ 柱穴・土坑、安土桃山〜江 戸の柵・柱穴・築地・土坑 など。	平安後期の土器類・瓦類、 鎌倉の土器類。	2	京博
3	六波羅政庁	立会	1997.03.24 ~03.26	京都市埋蔵文化財研究所	平安末期〜鎌倉のピット・ 土坑など、中世〜近世初頭 の遺物包含層、近世〜近代 初頭の畑の畝。	平安末期〜鎌倉の土師器、 鎌倉後半期の土師器・瓦器 ・焼締陶器など、近世初頭 の土師器・瓦。	3	京博 2次
4	六波羅政庁	発掘	1998.06.01 ∼1999.03.31	京都市埋蔵文化財研究所	南側調査区(1・2区)で安 土桃山の方広寺大仏殿南門 (3×2間)・回廊・石垣・ 梵鐘鋳造遺構。 北側調査区(4・7区)で平 安後期の南北溝2条・石敷 遺構、鎌倉〜室町の溝・柱 穴・土坑・井戸・石敷遺構 など。 西側調査区(8区)で平安前 期の埋納遺構・土坑、鎌倉 〜室町の南北道路・側溝・ 池状遺構など。	平安後期の土器類・瓦類、 鎌倉〜室町の土器類・瓦類、 安土桃山の土器類・瓦類・ 鋳造関係遺物。	4	京博 3次
5	六波羅政庁	発掘	1999.07.01 ~2000.03.21	京都市埋蔵文化財研究所	南側調査区(10区)で平安前 期の土坑、後期の東西溝、 鎌倉の東西溝・南北溝・井 戸・土坑・柱穴など、室町 の堀状遺構・溝・土坑・柱 穴など、安土桃山〜江戸の 南北道路と両側溝(2時期)。 北側調査区(9区)で鎌倉の 南北溝、鎌倉〜室町の建物 ・溝・柱穴・土坑など。	平安後期の土器類・瓦類が 少量(大半は後世遺構に混 入)、鎌倉の土器類、室町 〜江戸の土器類・瓦類。	5	京博 4次
6	方広寺	市域立会	2001.03.27 ~11.01	京都市埋蔵文 化財研究所	江戸末期の南北石垣。		6	
7	六波羅政庁	発掘	2000.09.11 ~10.13	京都市埋蔵文化財研究所	全域で平安〜鎌倉の柱穴・ 土坑などを少数、室町の遺 物包含層・溝・土坑・柱穴、 江戸の井戸・土坑・柱穴な ど。	平安〜鎌倉の土器類が少量、 鎌倉〜江戸の土器類・瓦類 が少量。	7	京博 5次
8	六波羅政庁	立会	2001.12.17 ~2002.03.12	京都市埋蔵文化財研究所	安土桃山~江戸の瓦溜め土 坑。	土師器、大型瓦。	8	京博
9	六波羅政庁	立会	2003.09.18 ~09.24	京都市埋蔵文化財研究所	中世の遺物包含層、方広寺 の整地層。	平安後期の土師器、鎌倉後期の須恵器、室町後半の焼締陶器、安土桃山の瓦類、明治の白磁・瓦器・ガラス瓶・瓦。	9	京博7次
10	六波羅政庁	立会	2003.11.27 ~12.15	京都市埋蔵文化財研究所	京都国立博物館建設に伴う 整地層。	中世の土師器、近世の瓦・施釉陶器など。	10	京博
11	方広寺	市域立会	2007.08.27 ~08.28	京都市埋蔵文 化財研究所	江戸末期の南北石垣。	江戸末期の白磁・菊丸瓦・ 土製品人形。	11	

No.	遺跡名	調査 方法	調査期間	調査機関	検出遺構	出土遺物	文献	備考
12	法住寺殿 · 六波羅政庁 · 方広寺	発掘	2008.02.12 ~03.25	京都市埋蔵文 化財研究所	室町の井戸、安土桃山〜江 戸初めの方広寺大仏殿南回 廊基壇・礎石根固め石跡・ 南雨落溝・石塁及び裏込地 業・東西柱穴列・地業。	室町の土師器・輸入陶器・ 瓦質土器・焼締陶器・瓦な ど、安土桃山〜江戸初頭の 大型巴文軒丸瓦・大仏瓦・ 桐文軒平瓦・羽口・石仏。	12	京博 9次
13	法住寺殿 · 六波羅政庁 · 方広寺	発掘	2008.12.08 ~2009.03.31	京都市埋蔵文化財研究所	室町の井戸・土坑、安土桃 山〜江戸初めの南門礎石根 石群・南門基壇北端地業・ 南回廊基礎根石群・南石塁 裏込地業・水切溝・盛土整 地層。	室町の土師器・輸入陶器・ 瓦質土器・焼締陶器・木製 品・砥石・瓦など、安土桃 山の土師器・施釉陶器・瓦 質土器・瓦・鋳型・炉壁・ 銅銭など。	13	京博 10次
14	法住寺殿 · 六波羅政庁 ·方広寺	発掘	2009.09.07 ~11.13	京都市埋蔵文化財研究所	平安後期の門・路面・道路 側溝、鎌倉〜室町の門・柱 列・路面・溝・埋納遺構・ 土坑・堀、安土桃山の石敷 路面・整地層・土坑。	平安の土師器・須恵器・輸入陶磁器・瓦など、須恵器・須恵門中期の土師器・須恵質土器・輸入陶磁器・製品・短路・焼締陶器・転品・変出・が、室町・輸入陶器・大瓦が、空町・輸入、工工を、上桃山の土師器・焼締、江戸資出など、工・戦治の染付・近世陶磁器・瓦など。	13	京博 11次
15	法住寺殿・ 六波羅政庁 ・方広寺	発掘	2010.08.16 ~09.10	京都市埋蔵文化財研究所	幕末〜明治初頭の整地層、 近代の本館基礎・整地層。	幕末〜明治の初頭の土師器 ・陶磁器・染付・桟瓦など。	14	京博 12次
16	法住寺殿 · 六波羅政庁 · 方広寺	発掘	2015.07.01 ~2016.03.29	京都市埋蔵文化財研究所	鎌倉〜室町の土坑・溝、安 土桃山〜江戸中期の回廊・ 溝・土坑・柱穴、江戸後期 〜明治の溝・築地・柱列。	鎌倉〜室町の土器類・瓦類、 安土桃山〜江戸中期の土師 器・瓦器・陶器・磁器・瓦 類・石製品、江戸後期〜明 治の土師器・陶器・磁器・ 瓦類・石製品・ガラス製品。	15	京博 13次
17	法住寺殿・ 六波羅政庁 ・方広寺	発掘	2018.10.22 ~2019.03.22	化財研究所 山	究所 山~江戸中期の溝・布掘り ・築地(礎石列・石列)・柱	平安の土師器・輸入陶磁器 ・木製品、室町の土師器、 安土桃山〜江戸中期の土器	本報告	京博 14次
18		発掘	$2020.09.28$ $\sim 2021.05.27$		列・石組・土坑、江戸後期 の井戸・柱列・柱穴・土坑 ・溝、明治以降の柱列・土 坑・溝・埋設管・集水桝・	類・土製品・瓦類・石製品 ・金属製品、江戸後期の土 器類・土製品・瓦類、明治 以降の土器類・瓦類・土製		京博 15次
19		発掘	2022.01.14 ~2022.02.28		旧本館建物基礎。	品・煉瓦・石製品・金属製品。		京博 16次

- 15) 『東寺の建築物 古建築からのメッセージ 』東寺宝物館 1995年
- 16) 『甲子夜話』 寛政10年(1798) 7月2日条
- 17) 木下知威『恭明宮に関する研究 建築計画および建築史、神仏分離の視点から 』2010 (平成22) 年度 歴史学建築助成 福武学術文化振興財団 2011年
- 18) 明治22年(1889)6月4日付け『大阪朝日新聞』

【調査関連文献】(表1 京都国立博物館構内調査一覧表の文献番号に対応する)

- 1 『史跡方広寺石塁修復工事報告』 京都国立博物館 1987年
- 2 鈴木廣司·山本雅和「六波羅政庁跡」『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵 文化財研究所 1996年
- 3 小森俊寬「六波羅政庁跡」『平成8年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究 所 1998年
- 4 田中利津子·近藤知子·大立目 一「六波羅政庁跡」『平成10年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団 法人京都市埋蔵文化財研究所 2000年
- 5 田中利津子·近藤知子·大立目一「六波羅政庁跡」『平成11年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団 法人京都市埋蔵文化財研究所 2002年
- 6 菅田 薫·吉本健吾「法住寺殿·六波羅政庁跡(00RT391)」『京都市内遺跡立会調査概報 平成13年度』 京都市文化市民局 2002年
- 7 田中利津子「六波羅政庁跡」『平成12年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財 研究所 2003年
- 8 田中利津子「六波羅政庁跡」『平成13年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財 研究所 2004年
- 9 田中利津子·西村洋子「六波羅政庁跡 1」『平成 15 年度 財団法人京都市埋蔵文化財研究所年報』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2005 年
- 10 田中利津子·西村洋子·清藤玲子「六波羅政庁跡 2」『平成15年度 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 年報』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2005年
- 11 吉本健吾「法住寺殿·六波羅政庁跡·方広寺跡 (07RT214)」『京都市内遺跡立会調査報告 平成19年 度』 京都市文化市民局 2008年
- 12 山本雅和·網 伸也·田中利津子『京都国立博物館構內発掘調査報告書-法住寺殿跡·六波羅政庁跡· 方広寺跡-』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第23冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2009年
- 13 網 伸也・加納敬二・田中利津子ほか『法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡』京都市埋蔵文化財研究 所発掘調査報告 2009 - 8 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2010年
- 14 高橋 潔『法住寺殿跡·六波羅政庁跡·方広寺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2010 10 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2010年
- 15 上村和直·山下大輝『法住寺殿跡·六波羅政庁跡·方広寺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2015-14 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2016年

3. 潰 構

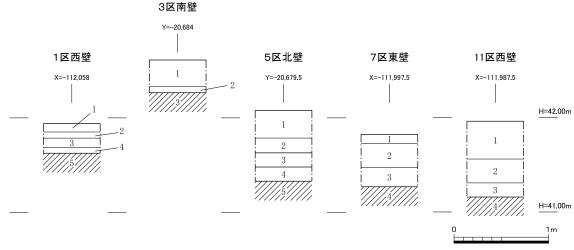
(1) 基本層序(図12)

基本層序を旧本館南側の1区、旧本館中庭の3区、旧本館北東部の5区、旧本館床下の7区、旧 本館北側の11区に分けて記述する。地表面の標高は1区が約41.95m、3区が42.6m、5区が約 42.1 m、7区は約41.8 m、11区は約42.0 mである。

1区西壁では、厚さ約0.1mの砕石の下に厚さ約0.15mの旧本館建設時の整地層(以下「旧本館 整地層 | とする)、その下に厚さ約0.05mの土壌化層があり、さらにその下が褐色泥混じり砂礫の 地山となる。調査は地山上面で行った。

3区南壁では、厚さ約0.3mの現代盛土層の下に厚さ約0.05mの旧本館整地層があり、その下が 浅黄色粘土の地山となる。調査は地山上面で行った。

5区北壁では、厚さ約0.3mの現代盛土層の下に厚さ約0.15mの旧本館整地層、その下に厚さ約 0.15mの黄褐色砂泥の方広寺再建期の整地層(以下「再建期整地層」とする)、さらにその下に厚 さ約0.15mの褐色砂泥の方広寺創建期の整地層(以下「創建期整地層」とする)、その下がにぶい



1区西壁

- 1 砕石
- 2 10YR7/4にぶい黄橙色泥土 礫 o 10cm以下少量混 固く締まる(旧本館整地層)
- 3 10YR3/3暗褐色砂泥 10YR5/6黄褐色泥土 礫φ3cm以下少量混 固<締まる(旧本館整地層) 4 10YR3/3暗褐色砂泥 土壌化層
- 5 10YR4/6褐色泥混じり砂礫 礫φ3cm以下少量混 固く締まる(地山)

3区南壁

- 1 現代成十
- 2 10YR6/4にぶい黄褐色粘土 礫・粗砂混(旧本館整地層)
- 3 2.5Y7/4浅黄色粘土(地山)

5区北壁

- 1 現代盛土
- 2 10YR7/8黄橙色粘土 礫φ4~8cm混(旧本館整地層)
- 3 10YR5/6黄褐色砂泥(再建期整地層)
- 4 10YR4/4褐色砂泥(創建期整地層)
- 5 2.5YR6/4にぶい黄色微砂(地山)

7区東壁

- 1 現代盛土
- 2 10YR3/3暗褐色砂泥 瓦・レンガ片・φ 0.5~3cm礫混 (旧本館整地層)
- 3 10YR3/2黒褐色砂泥 粗砂混じる(近代整地層)
- 4 7.5YR5/6明褐色粘土 粗砂混じる(地山)

11区西壁

- 1 現代盛土
- 2 10YR7/6明黄褐色粘土 2.5Y7/3浅黄色粘土ブロック・ φ1~5cm礫混(旧本館整地層)
- 3 10YR4/3にぶい黄褐色シルト 細砂混(近世後半整地層)
- 4 10YR7/8黄橙色粘土(地山)

図12 基本層序柱状図(1:40)

黄色微砂の地山となる。調査は再建期整地層上面と創建期整地層上面で行い、遺構保存のため一部 のみ地山上面での調査も行った。

7区東壁では、厚さ約0.1mの現代盛土層の下に厚さ約0.25mの旧本館整地層、その下に厚さ約0.2mの近代整地層、その下が明褐色粘土粗砂混じりの地山となる。調査は地山上面で行った。

11区西壁では、厚さ約0.4mの現代盛土層の下に厚さ約0.25mの旧本館整地層、その下に厚さ約0.15mの近世後半の整地層、その下が黄橙色粘土の地山となる。調査は地山上面で行った。

(2) 遺構の概要(表2)

今回の調査では、旧本館建物の周辺とその内部に1区から13区までの13箇所の調査区を設定した。調査次数ごとの調査の概要は以下の通りである。

14次調査(2018年度)では、1・2・4・9・10・12区の調査を実施し、検出した主な遺構は104基である。時期別には、平安時代、安土桃山時代から江戸時代、明治時代以降に分かれ、安土桃山時代から江戸時代の遺構が多い。

15次調査(2020年度)では、5~8・11・13区の調査を実施し、検出した主な遺構は151基である。時期別には、平安時代、安土桃山時代から江戸時代、明治時代以降に分かれ、安土桃山時代から江戸時代の遺構が多い。

16次調査(2021年度)では、3区の調査を実施し、検出した主な遺構は19基である。時期別には、江戸時代、明治時代以降に分かれ、明治時代の遺構が多い。

以下、調査区の位置関係から、 $1 \sim 5$ 区は調査区ごとに、 $6 \sim 13$ 区はまとめて報告する。

なお、各遺構および出土遺物の時期は、〔平尾政幸「土師器再考」『洛史 研究紀要 第12号』 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2019年〕によった。

遺 構 時 代 $1 \sim 4 \boxtimes$ 5~13区 平安時代 井戸65、土坑38 土坑60 溝7・24・40・102、布掘り145、 安土桃山時代 築地3(礎石列4·石列139)、 ~江戸時代中期 柱列2・53・77・133・141、 石組140、土坑6 井戸8·17、柱穴15~17、 柱列121、土坑39・46 江戸時代後期 土坑18・74、溝19 柱列42・44、土坑9~14・29、溝84、 柱列104、溝1·49、 明治時代以降 埋設管 $1 \sim 7$ 、集水桝 $3 \cdot 8$ 、 土坑76・88・89・119、

表 2 遺構概要表

旧本館建物基礎

旧本館建物基礎

(3) 1区の遺構(図版1・2・41、図13)

全て地山上面で検出した。平安時代後期、江戸 時代後期、明治時代の遺構に分けられる。

平安時代後期の遺構

井戸65 (図13、図版41) 南西部で検出した。 掘形は南北約1.6 m、東西0.7 m以上、深さ約2.1 m。西半は調査区外となる。平面形が方形を呈する縦板横桟組の井戸である。中段に一辺約1.0 mに組んだ横桟と4枚の縦板が遺存する。埋土は、にぶい黄褐色粘土・灰オリーブ色粘質シルトなどを主体とする。12世紀末の土師器が少量出土する。井戸枠に使用された木材の樹種同定の結果、隅柱や横桟などの角材はすべてスギ、縦板材はヒノキ科が多く、マツ属も含まれる。

土坑38 南西部で検出した。南北1.1 m以上、 東西0.9 m以上、深さ約0.3 m。南半を井戸65 に 壊される。西半は調査区外となる。埋土は、にぶ い黄色泥土を主体とする。

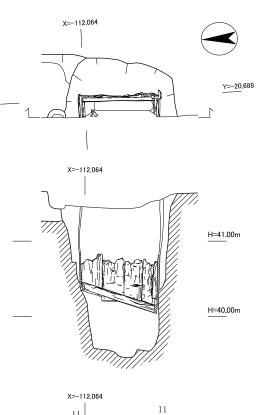
江戸時代後期の遺構

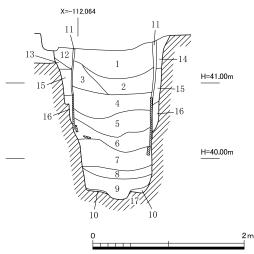
井戸8 北西部で検出した。掘形は径約1.6 m、深さ約2.1 m。埋土は、暗褐色砂泥を主体とする。素掘りである。

井戸17 北西部で検出した。掘形は南北約1.6 m、東西1.0 m以上、深さ1.4 m以上。西半は調査区外となる。中央部には、径約1.3 m、高さ1.4 m以上、厚さ約0.3 mの漆喰製の井筒がある。埋土は、にぶい黄褐色砂泥・灰黄褐色泥土などを主体とする。底部は検出できなかった。

明治時代の遺構

柱列42 西部で検出した南北方向の柱列である。柱穴36・37・39~43の7基からなる。柱穴は径約0.15 m、深さ約0.15 m。柱間は約1.9 m等間である。柱列44とともに旧本館建設時の足場柱穴とみられる。





- 1 7.5Y4/4褐色粘質砂泥 礫φ0.5cm以下混
- 2 10YR5/3にぶい黄褐色粘土
- 3 10YR5/3にぶい黄褐色粘質砂泥 土器片混
- 4 7.5Y4/3褐色粘質シルト 礫 φ 5cm以下微量混
- 5 10YR4/1褐灰色粘質シルト 礫φ5cm以下微量混 木片混
- 7 5Y5/2灰オリーブ色粘質シルト 礫 φ 4cm以下少量混
- 8 5Y4/2灰オリーブ色粘質シルト 礫 φ 1 cm以下微量混
- 9 5Y5/3灰オリーブ色粘質シルト 礫 φ 2cm以下少量混
- 10 7.5Y5/6明褐色粘土
- 11 10YR4/4褐色泥土 粘質強い 下部木質遺存 縦板の痕跡
- 12 10YR3/3暗褐色粘質泥土 10YR5/6黄褐色砂泥ブロック混 炭混
- 13 10YR4/6褐色泥土 礫φ2cm以下少量混
- 14 7.5Y4/4褐色泥土
- 15 10YR4/3にぶい黄褐色粘質砂泥 炭・焼土少量混
- 16 10YR3/2黒褐色粘土 礫 ϕ 1cm以下·炭少量混
- 17 7.5Y3/2黒褐色砂礫(地山)

図13 1区井戸65実測図(1:50)

柱列44 北部で検出した東西方向の柱列である。柱穴44・45・56・63の4基からなる。柱穴は 径約0.15 m、深さ約0.15 m。柱間は約1.9 m等間である。柱列42と同規格であり、旧本館建設時の 足場柱穴とみられる。

土坑29 東部で検出した土坑である。平面形はドーナツ状を呈する。外径約3.8 m、深さ約0.8 m。埋土は暗オリーブ褐色砂泥を主体とする。樹木移植跡とみられる。

(4) 2区の遺構(図版3・42)

現地表面の標高は約42.0 mである。攪乱と厚さ0.2~1.0 mの旧本館整地層と基礎の下が黄褐色シルトの地山となる。遺構は全て地山上面で検出した。江戸時代後期と明治時代の遺構がある。

江戸時代後期の遺構

土坑74 南東部で検出した。東西約1.4m、南北1.4m以上、深さ約1m。北部を旧本館の基礎 掘形に壊され、南は調査区外に延びる。東西両壁は垂直方向に下がり、底部は平坦である。埋土は 明黄褐色砂泥を主体とする。南北方向の堀状の遺構の可能性もある。

明治時代の遺構

講84 西部で検出した南北方向の石組溝である。溝の石組内幅0.8~0.9 m、深さ約0.9 m。掘形は幅約2.2 m、深さ約0.9 m。石組は東側2段、西側1段が遺存する。石材は花崗岩で、大きさは径0.5~0.8 m。掘形内に径0.05~0.1 m大の裏込め石を入れる。多量の瓦が出土した。この溝の北延長部は、7区(溝49)、13次調査13・17区でも検出している。石組の形状や多量の瓦が出土する状況も同様である。恭明宮敷地の東限の溝である。

土管・集水桝3 南北方向の土管が南側の煉瓦製集水桝3に接続する。土管の径は約0.3m。集水桝は東西約1.9m、南北0.5m以上、高さ約0.9mある。煉瓦を12段積んで構築する。上面に石材を4石並べ、目地はモルタルを塗り込める。溝84を壊して成立する。旧本館の雨水排水施設である。

(5) 3区の遺構(図版4・5・42・43、図14)

現地表面の標高は約42.6 mである。約0.3 mの現代盛土の下が厚さ約0.1 mの旧本館整地層で、その下が浅黄色粘土の地山となる。遺構は全て地山上面で検出した。江戸時代後期と明治時代の遺構がある。

江戸時代後期の遺構

柱穴15~17 中央西寄りで検出した。直径約 $0.3\,\mathrm{m}$ 、深さ $0.1\sim0.2\,\mathrm{m}$ の小規模な柱穴である。埋土はオリーブ褐色砂泥を主体とする。明治時代の埋設管により壊される。建物の復元はできなかった。

土坑18(図版5) 西部で検出した。南半部を土坑10により失い、平面形は半円形を呈する。直径は約1.3mとみられる。掘形は垂直に下がり、深さ約1.2mまで掘削したが、底部に達しなかった。埋土は黄褐色粘土や明黄褐色粘土を主体とする。掘形の形状から井戸の可能性がある。

溝19 南西部で検出した。幅約0.25 m、深さ約0.1 mの小規模な東西方向の溝である。断面形は皿形を呈する。方位は東で北に5度傾く。埋土はオリーブ褐色砂泥で炭を含む。東西両側を攪乱や明治時代の遺構により失う。大仏瓦が出土した。旧本館整地層の下で検出した。

明治時代以後の遺構

埋設管 1~7 幅 0.4~ 0.8 m、深さ 0.2~ 0.3 mの 溝に据え付けられた埋設管である。旧本館の雨桶と



図14 土管刻印

集水桝 8 をつなぐ排水管である。埋設管 $4 \sim 6$ の土管は径 0.2 m、埋設管 7 の土管は径 0.15 mを測る。のちに、埋設管 $1 \cdot 3 \cdot 4$ の土管はヒューム管に付け替えられる。埋設管 6 の土管は集水桝 8 に集まった雨水を南側に排水する。埋設管 6 の東に埋設管 2 のヒューム管が新たに増設される。土管には「AICHI NIHONTOKAN CO.」の刻印が押捺される(図 14)。

集水桝8(図版5) 中央部で検出した。平面形は円形を呈し、掘形は直径約1.9 m、深さ約0.7 m。煉瓦積みの円形集水桝である。周囲から土管が接続する。集水桝に流れ込んだ雨水は埋設管6の土管で南側に排水する。のちに、4箇所にヒューム管が付け替えや増設がなされ、上半部が改修される。

土坑10~12 西側で検出した。平面形は長方形を呈し、深さ0.2~1.1 m以上。埋土は、黒褐色砂泥や灰褐色砂泥を主体とする。旧本館建設に伴う建材である花崗岩・凝灰岩・粘板岩・煉瓦片を廃棄した土坑である。

土坑9・13・14(図版5) 北東部と南東部で検出した。避雷針銅板を設置した土坑である。土坑14は東西約1.4m、南北約1.2m。土坑内の炭層に銅板(タテ約0.85m、ヨコ約1.0m、厚さ約1mm)が垂直に設置されている。掘形は垂直に下がり、深さ約2.6mまで掘削したが、底部に達しなかった。土坑13は銅板を検出できなかったが炭層があり、土坑14と同様の形状をしている。土坑9は掘形及び設置された銅板も小型で、炭層は存在しない。これらの中で、最も新しい時期のものとみられる。

(6) 4区の遺構(図版3・43)

現地表面の標高は約42.0 mである。調査区全体が旧本館建物基礎の掘形内で、掘形の深さは約2.2 mまでおよぶ。その下がにぶい黄褐色砂泥の地山となる。

明治時代の遺構

旧本館建物基礎 地山を掘り込み、約0.8mの厚さのコンクリート基礎を打つ。その上に煉瓦を13段積み上げる。煉瓦の積み方は1段ごとに長辺を主体にする段と短辺を主体にする段を交互に配する「イギリス積み」である。

(7) 5区の遺構 (巻頭図版1・2、図版6~11・43~47、図15~17)

現地表面の標高は約42.1 mである。溝7以北の調査区北半では、約0.3 mの現代盛土の下が厚さ約0.1 mの旧本館整地層で、その下に厚さ約0.1 mの再建期整地層、さらに厚さ約0.1 mの創建期整地層があり、その下がにぶい黄色微砂の地山となる。調査区南半では、旧本館整地層の下に約0.05~0.1 mの再建期整地層があり、その下が地山となる。遺構は、再建期整地層上面、創建期整地層上面、地山上面で検出した。調査区北半の遺構は地中保存することとなったため、全体的な整地層の掘り下げは行わず、部分的な掘り下げに留めた。また、攪乱断面などでのみ確認できた遺構がある。遺構の時期は安土桃山時代から江戸時代中期と明治時代の遺構に分けられる。

安土桃山時代から江戸時代中期の遺構

方広寺大仏殿院の創建期と再建期とみられる2時期の遺構を検出した。

創建期の遺構には、溝24・40、布掘145、築地3(礎石列4・石列139)、柱列2などがある。地 山面および創建期整地層上面で検出した。

再建期の遺構には、柱列141 (回廊礎石据付け穴)、石組140、土坑6、溝7などがある。再建期整地層上面で検出した。

溝24 (図版47) 調査区中央で地山および創建期整地層上面で検出した東西方向の溝である。東西ともに調査区へ延びる。幅0.8~1.1 m、深さ0.2~0.3 m、約17 mを検出した。溝の断面形状は緩やかなV字形を呈する。溝底の標高は東端で41.40 m、西端で41.04 mであり、東から西へと低くなる。埋土は褐色砂泥や黄褐色砂泥を主体とし、底部には粗砂が堆積する。16世紀末から17世紀初頭の土師器皿、瓦片が少量出土した。排水溝として掘削されたとみられる。この溝の延長部は、6~8区、13次調査15区でも検出している。

溝40 北部で検出した。7箇所の断面で確認した東西方向の溝である。創建期整地層上面で成立する。東西ともに調査区外へ延びる。再建期整地層に覆われているため平面では確認できていない。幅0.7m以上、深さ約0.3m、東西約10.8mを断面などで検出した。溝の断面形状はやや浅いU字形を呈する。溝底の標高は東端で41.20m、西端で41.20mであり、ほぼ平坦である。埋土は暗褐色砂泥や褐色砂泥を主体とし、瓦片を含む。西側の11・13区の溝40、13次調査15区の溝29の東延長線上に位置する。遺構保護のため掘り下げは行わずに攪乱断面での観察とした。

布掘り145 北東部で検出した。3箇所の断面で確認した南北方向の布掘り溝である。調査区外の北に延びる。幅約1.2 m、深さ約0.4 m、南北約2.3 mを検出した。溝の断面形状はU字形を呈する。埋土は褐色粘土やにぶい黄褐色粘土を主体とする。溝再建期整地層に覆われているため平面では確認できていない。また、遺構の重なりから溝40よりは新しいことがわかる。大仏殿院東側の区画施設に関連する地業の可能性がある。遺構保護のため掘り下げは行わずに攪乱断面での観察とした。

築地3(**礎石列4・石列139**)(図版9・10・44~46、図15~17) 北部で検出した東西方向の 築地跡である。創建期整地層上面で成立する。幅約3.3 m、深さ0.3~0.5 m、東西7 m以上の布掘

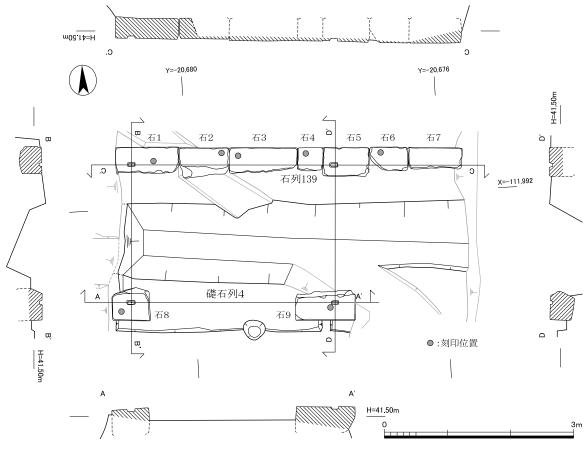


図15 5区築地3 (礎石列4・石列139) 実測図(1:60)

り溝内に礎石列4と石列139が東西方向に並行して据え付けられる。西側は現代攪乱、東側は石組140や現代攪乱により失う。礎石列4と石列139の下の部分は、他所より布掘り溝を深く掘り下げ、石を据え付けるために多量の礫を入れる。南北石列の間は、粘土層と礫層を交互に5層積み重ねた地業が確認できる。埋土は褐色砂泥や黄褐色砂泥を主体とする。礫層は径5~10cm大の礫が主体である。

礎石列4・石列139は、石上面の高さが41.66 m前後にそろえて据え付けられる。北側の石列139は、地覆石7基(石1~7)からなる。石材の大きさは0.4~ $1.1\,\mathrm{m}$ 、厚さ約 $0.4\,\mathrm{m}$ である。上面にホゾ穴が施される石材が2基あり(石 $1\cdot5$)、ホゾ穴の大きさは約 $12\times7\,\mathrm{cm}$ 、深さ約 $5\,\mathrm{cm}$ ある。ホゾ穴の間隔は約 $3.3\,\mathrm{m}$ である。南側の礎石列4は礎石2基(石 $8\cdot9$)からなる。石材の大きさは0.6~ $0.9\,\mathrm{m}$ 、厚さ約 $0.4\,\mathrm{m}$ 。それぞれ上面にホゾ穴が施され、北側と同様にその間隔は約 $3.3\,\mathrm{m}$ である。北側と南側の石材のホゾ穴の間隔は約 $2.2\,\mathrm{m}$ である。ホゾ穴の施される石は築地塀の寄柱礎石と考えられる。礎石列4の2基の礎石間には礎石を抜き取った痕跡はないことから、北側と南側では塀の構造が異なるとみられる。

礎石・地覆石 9 石のうち 7 石に「井桁」・「鼓」・「不明」・「1 △」・「N」・「1 A」の刻印が施される(図 16)。礎石列 4 の石 8 ・ 9 は北面以外が平坦に調整されている。さらに、縁辺部は部分的により丁寧に仕上げられており、この部分が露出部とみられる。現地で細部を加工仕上げしたとみられる。一方、背面及び下面は未調整で、石 2 ・ 9 には矢穴痕が確認できた(図 17)。石 2 には 3 箇

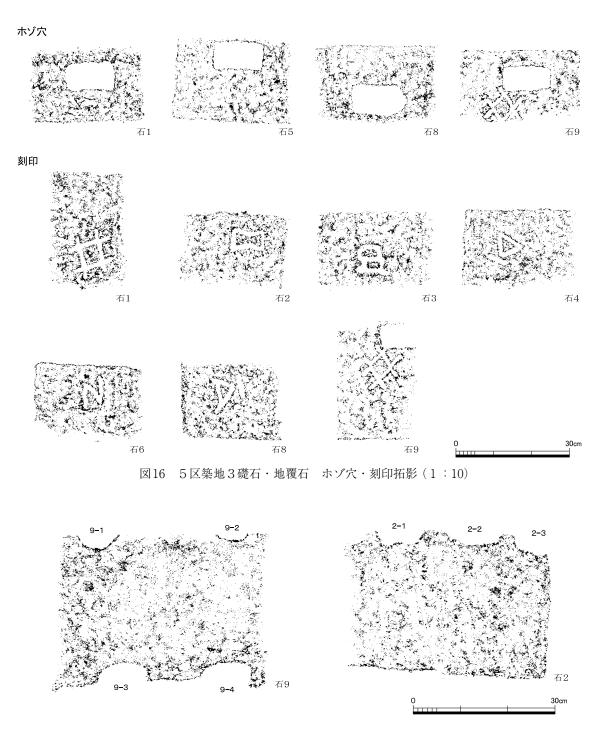


図17 5区築地3礎石・地覆石 矢穴痕拓影 (1:8)

所、石 9 には 4 箇所残る。矢穴の大きさは、石 2 -1 は矢口長辺の長さ 10.2 cm、深さ 3.2 cm、石 2 -2 は矢口長辺の長さ 12.2 cm、深さ 2.8 cm、石 2-3 は矢口長辺の長さ 7.2 cm以上、深さ 3.8 cm である。石 9-1 は矢口長辺の長さ 8.2 cm・深さ 3.2 cm、石 9-2 は矢口長辺の長さ 6.4 cm・深さ 1.4 cm、石 9-3 は矢口長辺の長さ 10.8 cm・深さ 4.2 cm、石 9-4 は矢口長辺の長さ 10.2 cm・深さ 4.2 cm ある。断面形状は船底型を呈する「古 A 9 -1 1 に分類される。

礎石・地覆石の石材種類はすべて黒雲母花崗岩である(付章参照)。遺構保護のため掘り下げは 行わずに平面と攪乱断面での観察とした。 柱列2(図版10) 北半の築地3の南で検出した。東西方向の柱列である。柱穴2・17・21・20の4基からなる。西側の柱穴2は径約0.3 m、深さ0.2 m以上、柱穴17は径0.3 m、深さ0.2 m。柱間は約1.6 mある。東側の柱穴20は径約0.75 m、深さ約0.15 m、柱穴21は径約0.6 m、深さ約0.3 m。柱間は約1.9 mある。柱穴17と柱穴21の距離は約3.3 m離れており、間に柱穴が1基存在した可能性もある。柱穴2以外は攪乱底などで検出しているため、地山上面から成立していたとすると本来の柱穴の深さは1 m前後となり、深い柱穴である。埋土は黄褐色粗砂やオリーブ褐色砂泥などである。性格は不明である。

柱列141 (図版11・47) 北西部で検出した。東西方向に並ぶ2基の礎石据付穴からなる。再建期整地層上面で検出した。礎石据付穴141は直径約1m、深さ0.3m以上。中には礎石の根固めとして石片や瓦片が多く入る。埋土は褐色砂泥を主体とする。根固め石の種類は、花崗閃緑岩・黒雲母花崗岩とチャートである(付章参照)。礎石据付穴142は東端部分のみを検出した。礎石据付穴142を礎石据付穴141と同様の直径約1mに復元すると心々での距離は約3.7mとなる。13次調査15区の柱列28の延長線上に位置する。大仏殿院南回廊の南柱筋礎石据付穴とみられる。遺構保護のため掘り下げを行わずに平面と攪乱断面での観察とした。

石組140 (図版11・47) 北東部で検出した。巨石3石からなり、南東方向に面を持つ石組である。検出幅約2.7 m、高さ約0.7 m、裏込めの幅0.6 m以上。石の長径は0.95~1.3 m。石材の種類は花崗閃緑岩・花崗斑岩・黒雲母花崗岩である。裏込めには、花崗閃緑岩・花崗斑岩・黒雲母花崗岩である。裏込めには、花崗閃緑岩・花崗斑岩・黒雲母花崗岩・チャート・砂岩・玢岩・ホルンフェルスなどがある(付章参照)。石組上面の状態からは、さらに上に1段石積みがあったと考えられる。後述する土坑6の北西部にあたり、一連の遺構とみられる。遺構保護のため掘り下げは行わずに平面と攪乱断面での観察とした。1999年調査4-1区と一部重複する部分があり、当時検出していた石組4-1と同一遺構である。

土坑6 (図版10・47) 北東部で検出した。東西約6 m、南北約6 mの隅丸方形の大型土坑で、深さは約0.7 mある。中・上層に多量の焼けた瓦や壁土を含む。埋土は暗オリーブ褐色砂泥や明黄褐色砂泥を主体とする。底部には黒褐色粘土や褐色砂泥が堆積する。前述した石組140 は土坑6 の北西部に構築されている。また、土坑南西部は、後述する溝7と接続する。底部の黒褐色粘土上面で17世紀後半の土師器皿が出土した。東側斜面から流れ込む雨水を一時的に溜める機能があるとみられる。

溝7(図版47) 中央部で検出した東西方向の溝である。西は調査区外に延び、東は土坑6と接続する。再建期整地層上面で検出した。幅1.4~1.6 m、深さ約0.6 mあり、東西約8.1 m分を検出した。溝の断面形状はU字形を呈する。埋土には多量の焼けた瓦・壁土、炭化材などを含む。瓦には大仏殿所用瓦片が多量に含まれる。中層には18世紀末の陶磁器類を含む。下層には遺物はみられない。溝底の標高は東端で41.1 m、西端で40.9 mであり、東から西へと低くなる。6~8区の溝7、13次調査15区の溝30と連続する同一遺構である。溝の規模・形状や瓦が多量に出土する状況も同様である。

明治時代の遺構

溝1 北半で検出した東西方向の溝である。東西ともに調査区外に延びる。旧本館整地層上面で成立する。幅0.7~1.0 m、深さ約1.1 m、東西約17 m分を検出した。溝の断面形状はV字形を呈する。埋土は暗褐色砂泥やオリーブ褐色砂泥を主体とする。煉瓦・凝灰岩・花崗岩・粘板岩など旧本館外装資材の破片を多量に含む。下層には遺物はみられない。当初は排水溝として掘削されたとみられる。

土坑88・89 南東部で検出した土坑である。土坑88は、直径約1.5 m、深さ約0.2 m。埋土は暗オリーブ褐色砂泥を主体とする。土坑89は、直径約2.1 m、深さ約0.2 m。埋土は褐色砂泥を主体とする。ともに樹木移植跡とみられる。

西拡張区(図版6・8) 礎石列4の西延長部に設定した調査区である。地表下約0.2mでコンクリート基礎に達したため、築地に関連する遺構の検出はできなかった。

(8) 6~13区の遺構(巻頭図版3・4、図版12~20・48~55、図18・19)

6~8区は旧本館床下、9~13区は旧本館の西と北に位置する調査区である。

6~8区の基本層序は、厚さ約0.1mの現代盛土の下が厚さ0.2~0.4mの旧本館整地層で、その下に厚さ約0.1mの近代整地層がある。その下が明褐色~黄褐色砂泥の地山となる。遺構は地山上面で検出した。

9~13区の基本層序は、厚さ0.1~0.3mの現代盛土の下が厚さ0.1~0.4mの旧本館整地層で、その下に時期不明の整地層があり、その下が黄褐色粘土の地山となる。11区では、旧本館整地層の下に厚さ0.1~0.2mの近世後半整地層があり、その下に一部では厚さ0.1~0.3mの再建期整地層がある。遺構は再建期整地層と地山上面で検出した。

遺構の時期は、平安時代後期、安土桃山時代から江戸時代中期、江戸時代後期、明治時代の遺構に分けられる。調査区の位置関係から5区と連続する遺構が多い。

平安時代後期の遺構

土坑60(図版17·54) 11区東側で検出した。北と西は埋設管のため確認できていない。規模は南北1.6m、東西2.3m以上ある。掘形の壁はほぼ垂直に下がる。深さ約2mまで掘り下げたが底部に達しなかった。中層から木製品が出土した。掘形の形状や深さから井戸の可能性がある。13次調査16区の土坑41と同一遺構とみられる。

安土桃山時代から江戸時代中期の遺構

方広寺大仏殿院の創建期と再建期とみられる2時期の遺構を検出した。

創建期の遺構には、溝24・40、柱列53・77・133などがある。

再建期の遺構には、溝7・102などがある。

満24 (図版48・49) 6~8区の南拡張区で検出した東西方向の溝である。東西ともに調査区外に延び、5区溝24の西延長部である。また、13次調査15区の溝31とも規模・形状が類似しており東延長部にあたるとみられる。幅0.8~1.1 m、深さ約0.4 m、検出長約30 m。溝の断面形状は0.4 U字

形を呈する。埋土は暗褐色砂泥や暗褐色粘土を主体とし、底部には粗砂が溜る。7区の西端では溝幅約0.6mとなり規模が縮小し、傾きを少し南側に変えながら西の8区へと延びる。16世紀末の土師器皿、瓦片が少量出土した。溝底の標高は東端で41.10m、西端で40.78mであり、東から西へと低くなる。排水溝として掘削されたとみられる。

溝40 10~13区で検出した東西方向の溝である。東西ともに調査区外に延びる。5区の溝40の西延長部にあたる。また、13次調査15区の溝29の東延長部にあたるとみられる。幅0.8~0.9 m、深さ約0.6 m、検出長10.8 m。溝の断面形状はU字形を呈する。16世紀末の土師器皿が出土した。大仏殿所用瓦を含む多量の瓦が出土した。溝底の標高は東端で約41.1 m、西端で39.8 mで、東から西へと低くなる。

柱列53(図版 $18\cdot54$) 11区で検出した東西方向に並ぶ柱穴8基からなる柱列である。柱穴の平面形は隅丸方形を呈する。一辺 $0.5\sim0.8\,\mathrm{m}$ 、深さ $0.4\sim0.6\,\mathrm{m}$ 。壁はほぼ垂直に下がる。柱間は西から $1.0\,\mathrm{m}\cdot1.2\,\mathrm{m}\cdot1.0\,\mathrm{m}\cdot1.1\,\mathrm{m}\cdot1.3\,\mathrm{m}\cdot1.8\,\mathrm{m}\cdot3.2\,\mathrm{m}$ 。柱穴59と柱穴75の間にもう1基柱穴が存在した可能性がある。後述する柱列133の西延長線上に位置するとみられる。また、8区の柱列77と南北方向に柱筋が通ることから、対になるとみられる。

柱列133(図版18) 10・13区で検出した東西方向の柱列である。10区柱穴133~136、13区柱穴31の5基からなる。柱穴の平面形は不整形で、長径0.5~0.9 m、深さ0.4~0.7 m。柱間は西から0.9 m・1.3 m・1.1 m・1.1 m。柱穴31は埋土に礫が多量に混じる。11区の柱列53の東延長線上に位置する。

柱列77(図版17・52) 8区の北側で検出した東西方向に並ぶ柱穴7基からなる柱列である。柱

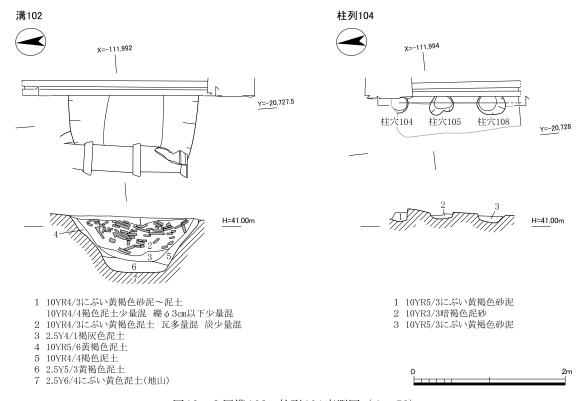


図18 9区溝102・柱列104実測図(1:50)

穴の平面形は隅丸方形を呈する。一辺 $0.5\sim0.7\,\mathrm{m}$ 、深さ $0.4\sim0.6\,\mathrm{m}$ 、東西に $7\,\mathrm{m}$ 以上。柱間は西から $1.3\,\mathrm{m}\cdot1.1\,\mathrm{m}\cdot1.0\,\mathrm{m}\cdot1.2\,\mathrm{m}\cdot1.0\,\mathrm{m}$ 。壁はほぼ垂直に下がる。埋土は褐色砂泥を主体とする。各柱穴は南肩を溝 $7\,\mathrm{r}$ によって失う。旧本館壁の北側に位置する $11\,\mathrm{r}$ 区の柱列 $53\,\mathrm{r}$ と南北方向に柱筋が通ることから、対になるとみられる。

溝7・102 (巻頭図版3・4、図版48~50・52、図18) 6~9区で検出した東西方向の溝である。東西ともに調査区外に延びる。5区溝7の西延長部となる。また、13次調査15区の溝30の東延長部とみられる。幅1.4~1.7 m、深さ約0.9 m、検出長約38.5 m。溝の断面形状はU字形を呈する。5区と同様に大仏殿所用瓦を含む多量の瓦や、焼けた壁土、炭化材などを含む。下層には遺物はみられない。溝底の標高は東端で約40.7 m、西端で約40.4 mであり、東から西へと低くなる。埋没時期は出土遺物から寛政年間とみられる。

江戸時代後期の遺構

柱列121 (図版19・49) 7区西半で検出した東西方向に並ぶ3基の柱穴からなる柱列である。 柱穴の平面形は楕円形で、長径0.5~0.6 m、深さ0.1~0.15 m。柱間は西から1.1 m・1.3 m。

土坑46 6区北端で検出した土坑である。北側と東側を攪乱により失う。東西0.7 m以上、南北0.7 m以上、深さ約0.2 m。埋土はオリーブ褐色粘土を主体とする。天目椀が出土。

土坑39 10・13区北側で検出した。北と東は調査区外に延びる。東西1.5 m以上、南北0.5 m以上、深さ約0.3 mである。埋土は黒褐色粗砂やオリーブ褐色粘土を主体とする。泥面子が出土。

明治時代の遺構

柱列104 (図18) 9区南半で検出した柱穴 104・105・108の3基からなる南北方向の柱列 である。柱穴の平面形は不整形で、長径0.3~0.35 m、深さ約0.1 m。柱間は1.2 m等間である。

溝49(図版20・51) 7区の東半で検出した。 南北方向の石組溝である。北南ともに調査区外 に延びる。掘形は幅2.5~3.0 m、深さ約0.9 m、検 出長約4.6 m。石組内幅は0.8~0.9 mで、東側2 段、西側1段の石積みが遺存する。石材は径0.5 ~0.8 mの大きさの花崗岩である。西側石組の基 底部には胴木を据える。胴木は丸材で、枝を大ま かに払ったものが使用される。裏込めには径5 ~10 cmの河原石を多量に詰める。瓦が多く出土 する。この溝の延長部は、2区(溝84)、13次調 査13・17区でも検出している。石組の形状や多 量の瓦が出土する状況も同様である。恭明宮敷 地東限の外郭溝である。



図19 12区旧本館煉瓦積み基礎(北東から)

土坑76 (図版19・51) 7区西半で検出した。内面に漆喰を施した土坑で、平面形は西側に若干丸みを帯びた隅丸方形を呈する。規模は東西約2.8 m、南北約2.3 m、深さ約0.7 mである。壁は斜めに立ち上がり、底面はやや丸みを帯びる。漆喰の厚さは0.05 m。恭明宮敷地内の施設である。

土坑119 7区中央で検出した。楕円形を呈するとみられるが、北半を旧本館基礎によって失っている。東西約2.3 m、南北1.0 m以上、深さ約0.8 m。埋土は褐色粘土やオリーブ褐色砂泥を主体とする。恭明宮敷地内の施設である。

旧本館建物基礎(図19) $6 \sim 9$ 区と11 区で旧本館建物基礎を検出した。厚さ約0.2 mのコンクリート基礎で、その上に煉瓦を13 段積み上げる。煉瓦の積み方は1 段ごとに長辺を主体にする段と短辺を主体にする段を交互に配する「イギリス積み」である。

註

1) 森岡秀人・藤川祐作「矢穴の型式学」『古代学研究 - 森浩一先生傘寿記念論文集 - 』第180号 2008 年

4. 遺 物

(1)遺物の概要

出土した遺物は、14次調査(2018年度)では整理コンテナに44箱、15次調査(2020年度)では311箱、16次調査(2021年度)では6箱、計361箱である。

出土遺物は、安土桃山時代から江戸時代のものが大半を占める。次いで明治時代のものが続き、 平安時代から室町時代のものはごく少量である。

大半が瓦類であり、軒瓦や丸瓦・平瓦のほか、道具瓦や鬼瓦などが含まれる。刻印入りのものも 多い。

土器・陶磁器類の出土量は少ない。平安時代の井戸からは、土師器・輸入白磁が出土した。安土 桃山時代から江戸時代の溝などから、土師器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器・染付磁器などが出土 した。明治時代以降の土坑・溝・近代整地層からは、焼締陶器・施釉陶器・染付磁器などが出土し た。

その他の遺物には、土製品・石製品・煉瓦・金属製品・木製品などがある。土製品には、匣鉢・ 窯道具類、泥面子や人形がある。石製品には、砥石・石仏・五輪塔(空・風輪、火輪)・蓮華座が あり、さらに旧本館の屋根材片や外壁材などがある。煉瓦は、多様な形状のものが多く出土した。 旧本館の建材である。金属製品には、銭貨・釘・鎹・銅板・鉄滓がある。木製品には、用途不明の ものがある。

遺物は種類ごとに分け、時代の古い順から記述する。個々の遺物の詳細については、遺物観察表に掲載した。

時 代	内 容	コンテナ 箱数	Aランク点数	Bランク 箱数	Cランク 箱数
平安時代	土師器、輸入陶磁器、木製 品		土師器3点、輸入白磁1点、木 製品1点		
室町時代	土師器		土師器1点		
安土桃山時代 ~江戸時代中期	土師器、瓦器、焼締陶器、 施釉陶器、染付磁器、土製 品、瓦類、石製品、金属製 品		土師器 6 点、焼締陶器 2 点、施 釉陶器 2 点、土製品 1 点、瓦類 147点、石製品 5 点、金属製品 3 点、銭貨 3 点		
江戸時代後期	土師器、燒締陶器、施釉陶器、染付磁器、土製品、瓦 類		焼締陶器1点、施釉陶器2点、 染付磁器5点、土製品3点、瓦 類17点		
明治時代以降	焼締陶器、施釉陶器、染付 磁器、瓦類、土製品、煉瓦、 石製品、金属製品		石製品15点、金属製品 1 点、煉 瓦10点		
合 計		394箱	229点(25箱)	8箱	361箱

表3 遺物概要表

[※] コンテナ箱数の合計は、整理後に遺物を抽出したため、出土時より33箱多くなっている。

(2) 土器類(図版21·56、付表1)

井戸65出土土器 $(1 \sim 3)$ 土師器・輸入陶磁器が出土した。 $1 \cdot 2$ は土師器皿Nである。ともに口縁部の小片で、復元口径は10cm弱とみられる。外面は二段ナデ。内・外面ともにナデ調整を施す。 $6\,^{1)}$ 段階に属する。3は輸入陶磁器の白磁椀である。高台部周辺のみが遺存する。

その他出土土器(4・5) 7区近代整地層に混入して平安時代と室町時代の遺物が出土した。 4 は土師器皿Aである。口縁部は外反して端部は上方に収める。口縁部はヨコナデし、底部外面に はユビオサエの痕跡がわずかに残る。 3A段階に属する。 5 は土師器皿Shである。底部中央を上 方に押し上げたいわゆるヘソ皿である。口縁部はヨコナデし、底部外面にはユビオサエの痕跡が残 る。 9C段階に属する。

講24出土土器(6~9) 土師器・焼締陶器が出土した。6~8は土師器である。6・7は皿Sbで、内面底部はナデ、口縁部内外面はヨコナデ、外面底部はオサエ調整する。7は口縁部に油煙が付着する。8は皿Sで、やや平坦な底部から体部が緩やかに外上方に立ち上がる。口縁部は丸く収め内側に僅かに面をもつ。底部内面にわずかな圏線状の盛り上がりが認められる。口縁部内外面はヨコナデ、内面はナデを施し、外面はオサエ調整する。11A段階に属する。9は焼締陶器の信楽擂鉢である。擂目は5条1単位である。擂目の下方2/3はすり減って消えている。焼成は軟質。

溝40出土土器(10~12) 土師器・焼締陶器が出土した。10・11は土師器皿Sで、やや平坦な底部から体部が緩やかに外上方に立ち上がる。口縁部は丸く収め内側に僅かに面をもつ。底部内面にわずかな圏線状の盛り上がりが認められる。口縁部内外面はヨコナデ、内面はナデを施し、外面はオサエ調整する。10は口縁部に油煙が付着する。11A段階に属する。12は焼締陶器の信楽擂鉢である。摺目は6条1単位である。焼成は硬質。

土坑6出土土器(13) 土師器が出土した。13は土師器皿Sである。わずかに丸みを帯びた底部から体部が緩やかに外上方に立ち上がる。口縁部は丸く収め内側に僅かに面をもつ。底部内面に圏線が認められる。口縁部内外面はヨコナデ、内面はナデを施し、外面はオサエ調整する。11C段階に属する。

土坑46出土土器 (14) 施釉陶器が出土した。14は施釉陶器の天目椀である。高台部を欠損する。腰部は丸みを持って立ち上がり、口縁部で内傾し端部はやや外反する。体部下端に平坦面があることから削り出し高台である。体部下半まで鉄釉を施す。瀬戸・美濃産。

溝7出土土器(15) 施釉陶器が出土した。15は施釉陶器椀である。高台部以外を欠損する。高台周辺以外を施釉する。内面底部には簡略化した山水文を描く。高台内に刻印「中村金」がある。京焼風肥前産陶器。

溝49出土土器 (16~18) 焼締陶器・施釉陶器・染付磁器が出土した。16は焼締陶器壷である。 平坦な底部から体部は上方に立ちあがり、緩やかに内湾する。頸部と口縁部を欠損する。底部には 糸切り痕が残る。外面はロクロナデのちナデ、内面にはロクロナデ、内面上部にはシボリジワが残 る。焼成は良好。沖縄壺屋焼。17は施釉陶器杯である。底部を欠損する。体部内面には厚く白化粧 を施す。体部外面には黒色の釉を施し、イッチン書きで装飾する。18は染付磁器鉢である。碁笥底の底部から体部は上方に立ち上がる。体部外面には型紙摺りで花文を施す。高台底部と口縁部内面を釉剥ぎする。瀬戸・美濃産。

土坑76出土土器(19~21) 染付磁器が出土した。19は染付磁器椀である。丸みを帯びた体部から口縁部は緩やかに外反する。体部外面と口縁部内面には呉須で植物文を描く。内面底部には帆掛け船を描く。瀬戸・美濃産。20は染付磁器輪花皿である。高台内以外に白化粧を施す。体部外面には手描きで装飾し、体部内面には型紙摺りで花文などを施す。幅広蛇ノ目高台。肥前産。21は金彩色絵鉢である。高台外面・体部下半・内面底部に呉須で花文などを描く。体部外面や口縁部内面には赤色・緑色で花文などを描き、金彩を施す。焼継ぎあり。

近代整地層出土土器(22・23) 施釉陶器・染付磁器が出土した。22は施釉陶器火入れである。 体部外面に明緑灰色の釉を施す。高台部に不明刻印あり。京信楽系。23は染付磁器広東椀である。 高台内に焼継ぎ文字「ハろ□」。瀬戸・美濃産。

(3) 土製品(図20、付表2)

泥面子(土1・2) 土1は、径2.2cm、厚さ1.0cm。表面は型押しで成型する。側面はヨコナデ、 裏面はナデ。文様は不明。13区土坑39から出土した。

土 2 は、径 3.0 cm、厚 さ 1.4 cm。表面は型押しで成型する。側面はヨコナデ、裏面はナデ。文様は不明。 5 区溝 7 から出土した。

土人形(土3・4) 土3は壷を持つ男性を象る。型成型の後にオリーブ黄色の釉を施す。底部から上方に向かって穿孔がある。6区近代整地層から出土した。

土4は狐を象る。口・鼻・背中・腰・尾部・台などを欠損する。型作りで中空、内面にはユビオ サエ痕が残る。表面には胡粉が付着する。7区溝49から出土した。

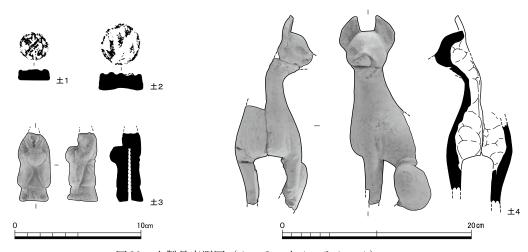


図20 土製品実測図(1:3、土4のみ1:4)

(4) 瓦類 (図版 $22 \sim 36 \cdot 57 \sim 61$ 、図21)

安土桃山時代から江戸時代中期

安土桃山時代から江戸時代中期の瓦類の大半は5~8区溝7から出土した。これらの軒瓦や丸 瓦・平瓦には、一般的な瓦の規格のものと、特大型・大型の瓦がある。特大型・大型の瓦は、これ まで大仏殿周辺でしか出土していないことから、方広寺大仏殿所用瓦とみられる。

軒丸瓦(図版22・23・57 瓦1~9) 軒丸瓦には、特大型・大型・一般規格の3種類がある。 特大型の瓦1~4は右巻き三巴文軒丸瓦である。いずれも7・8区溝7出土。瓦当面径は28.6cm に復元できる。巴の尾が互いに接しない。外区には19個の珠文が密に巡るとみられる。瓦当部成形 は瓦当部裏面の上端よりやや下に丸瓦を当て、粘土を付加して接合する。瓦当部の接合面に横方向 のカキヤブリを施す。周縁内外にヘラで面取りを施す。瓦当側面はヨコナデ、瓦当裏面下端に円周 状ナデを施す。胎土は砂粒を少量含む精良な粘土で、灰色から暗灰色を呈する。焼成は良好で、表 面は黄橙色から灰色を呈する。瓦1・2は瓦当面に離れ砂が付着する。瓦1・2は二次的被熱を受 け、全体的ににぶい黄橙色を呈する。

大型の瓦5~8は右巻き三巴文軒丸瓦である。瓦5~7は6区溝7、瓦8は9区溝102出土。瓦5は巴の尾が長く延び、互いに接しない。瓦6は巴の尾が互いに接する。瓦7・8は巴の尾が互いに接しない。珠文は瓦8が15個、瓦7は13個配する。瓦当部成形は瓦当部裏面の上端よりやや下に丸瓦を当て、粘土を付加して接合する。瓦当部の接合面に横方向のカキヤブリを施す。周縁内外にヘラで面取りを施す。瓦当側面はヨコナデ、瓦当裏面下端に円周状ナデを施す。瓦5には瓦当と丸瓦の接合部にカキヤブリが顕著にみられる。胎土は砂粒を少量含み、灰色を呈する。焼成は良好で、表面は黄橙色から灰色を呈する。瓦5~7は二次的被熱を受ける。瓦当面径は18.8~19.6cmである。

一般規格の瓦9は右巻き三巴文軒丸瓦である。7区溝7出土。巴の尾が長く延び、互いに接しない。外区には珠文を13個配する。瓦当部成形は瓦当部裏面の上端よりやや下に丸瓦を当て、粘土を付加して接合する。周縁内外に面取りを施さない。瓦当側面はヨコナデ、瓦当裏面下端に円周状ナデを施す。胎土は砂粒を少量含み、灰色を呈する。焼成は良好で、表面は灰色を呈する。瓦当面径は14.7cmである。

軒平瓦(図版23~25·57·58 瓦10~28) 軒平瓦には、特大型・大型・一般規格の3種類がある。

特大型の瓦10~18は外行唐草文軒平瓦である。瓦12は近代整地層出土、それ以外は6~8区溝7出土。中心飾りは上向き三葉で唐草が2回反転する。唐草の巻きは強い。周縁幅が広い。瓦当部は段顎で、平瓦広端部凸面に顎部を貼り付けて接合する。顎接合部平瓦接合部にヨコ方向カキヤブリを施す。周縁上外と顎後縁にヘラで面取りを施す。顎裏面はヨコナデを施す。瓦10の周縁左上には「○」刻印、瓦16の瓦当面には縦方向の「〓」刻印がある。瓦10~17は、胎土は砂粒を少量含む精良な粘土で、灰色から暗灰色を呈する。焼成は良好。瓦11・16以外は二次的被熱を受け、全

体的ににぶい黄橙色を呈する。瓦18は、胎土は砂粒を多く 含み、灰色を呈する。焼成は良好で、表面は暗灰色を呈す る。瓦当面縦幅は12.8~13.0cmである。

大型瓦には瓦19・20がある。瓦19は三三の桐文を3箇所に配し、外に唐草が1回反転する。11区溝40出土。桐文の花・葉は簡略化されて、単線で表した葉脈が認められる。葉の中央はくぼむ。瓦当部は段顎で、平瓦広端部凸面に顎部を貼り付けて接合する。周縁上外にヘラで面取りを施す。瓦当部凹面・凸面・側面・裏面は横方向のナデを施



図21 瓦11カキヤブリ

す。胎土は砂粒を多く含み、淡黄色を呈する。焼成はやや不良で、表面は灰色を呈する。瓦20は唐草文軒平瓦の左端部分である。5区攪乱出土。巻きの強い唐草を表す。瓦当部は段顎で、平瓦凸面に顎部を貼り付けて接合する。端部の周縁が広い。瓦当部凹面・裏面・顎部は横方向のナデを施す。胎土は砂粒を多く含み、淡黄色を呈する。焼成はやや軟質で、表面は暗灰色を呈する。瓦19に比べ瓦当部が薄い。瓦当面縦幅は8.2・9.6cmである。

一般規格の瓦には瓦21~28がある。いずれも6~8区溝7出土。瓦21は外行唐草文軒平瓦で、 中心飾りは上向き五葉文で唐草が2回反転する。瓦当部は段顎で、平瓦広端部凸面に顎部を貼り付 けて接合する。瓦当部凹面はヨコナデを施す。顎部凸面・裏面はヨコナデ、周縁上面はナデとミガ キを施す。瓦当上縁に面取りを施す。平瓦部は凹面・凸面にヨコナデを施す。胎土は砂粒を少量含 み、灰色を呈する。焼成は良好で、表面は暗灰色を呈する。瓦22~24は外行唐草文軒平瓦である。 中心飾りは七葉文で上部に点が付く。二重と一重の唐草が2回反転する。瓦当部は段顎で、平瓦広 端部凸面に顎部を貼り付けて接合する。瓦当部凹面はヨコナデを施す。顎部凸面・裏面はヨコナ デ、周縁上面はナデとミガキを施す。瓦当上縁と下縁にヘラで面取りを施す。平瓦部は凹面・凸面 にヨコナデを施す。胎土は砂粒を少量含み、灰色を呈する。焼成は良好で、表面は黄橙色を呈する。 瓦21は煤が多く付着する。瓦23は周縁右に「井桁」文の刻印がある。瓦25・26は外行唐草文軒平 瓦である。中心飾りは上向き四葉で支葉がある。唐草が2回反転する。瓦当部は段顎で、平瓦広端 部凸面に顎部を貼り付けて接合する。瓦当部凹面はヨコナデを施す。顎部凸面・裏面はヨコナデ、 周縁上面はナデとミガキを施す。瓦当上縁と下縁にヘラで面取りを施す。平瓦部は凹面・凸面にヨ コナデを施す。胎土は砂粒を少量含み、灰色を呈する。焼成は良好で、表面は灰色を呈する。とも に煤が多く付着する。瓦27は波状文軒平瓦である。瓦当部は段顎で、上部に平瓦を接合する際の横 方向のカキヤブリがみられる。胎土は砂粒を少量含み、灰色を呈する。焼成は良好で、表面は暗灰 色を呈する。瓦当面縦幅は5.2~6.0cmである。瓦28はやや小型の外行唐草文軒平瓦である。中心飾 りは三葉文である。巻きの強い唐草が2回反転する。両端周縁が広い。調整は顎端面と顎裏面にヨ コナデを施す。胎土は砂粒を少量含み、灰色を呈する。焼成は良好で、表面は暗灰色を呈する。瓦 当面には雲母が多量に付着する。

丸瓦・平瓦(図版26~29·60 瓦29~36) 特大型丸瓦には瓦29がある。8区溝7出土。幅25.8

cm・長さ41.2cm以上・高さ12.3cm・厚さ3.4cmある。成形は粘土板1枚作りで、凹面に糸切離し痕跡が付く。切り離し痕跡の上に布目が残り、布には抜き縄が付けられる。両側縁・広端縁の内側にヘラで面取りを施す。凸面は縦ナデでヘラミガキを施す。胎土は砂粒を含み、灰色を呈する。焼成は硬質で、表面は暗灰色を呈する。凸面頂部に「三角形の圏線に点」文の刻印がある。コビキB技法。

大型丸瓦には瓦30・31がある。いずれも6・7区溝7出土。瓦30は広端幅17.7cm・長さ28.8 cm・高さ9.3cm、玉縁幅13.6cm・長さ5.1cm。成形は粘土板1枚作りで、凹面に糸切り離し痕跡が付く。切り離し痕跡の上に布目が残る。両側縁・広端縁の内側にヘラで面取りを施す。凸面は縦ナデでヘラミガキを施す。胎土は砂粒を含み、灰色を呈する。焼成は硬質で、表面には二次的被熱を受けて部分的に黄橙色を呈する部分と煤が付着する部分がある。凸面中央部に「井桁」文の刻印がある。コビキB技法。瓦31は広端幅16.1cm・長さ24.9cm・高さ6.8cm、玉縁幅11.9cm・長さ4.3cmある。成形は粘土板1枚作りで、凹面に糸切離し痕跡が付く。切り離し痕跡の上に布目が残る。両側縁・広端縁の内側にヘラで面取りを施す。凸面は縦ナデでヘラミガキを施す。胎土は砂粒を含み、暗灰色を呈する。焼成は硬質で、表面は二次的被熱を受けて部分的に黄橙色を呈する。コビキB技法。

特大型平瓦には瓦32~35がある。瓦34は創建期整地層、それ以外は8区溝7出土。瓦32は長さ54.0cm・幅30.8cm以上・厚さ3.0cmある。成形は粘土板1枚作りである。凹面はヨコナデ、両側縁部と側面はタテナデを施す。凸面はタテナデ、凹面側縁・広端面の内面にヘラで面取りを施す。胎土は砂粒を含み、灰色を呈する。焼成は硬質で、表面は二次的被熱を受けて黄橙色を呈する。瓦33は長さ39.0cm以上・幅32.1cm以上・厚さ3.8cmある。成形は粘土板1枚作りである。凹面は布目のち不定方向のナデ、側縁部と凸面はタテナデを施す。胎土は砂粒を含み、灰色を呈する。焼成は硬質で、表面は暗灰色を呈する。瓦34は長さ20.4cm以上・幅20.3cm以上・厚さ3.3cmある。凸面に棒状工具による深さ約7mmの圧痕がみられる。焼成以前に補修した痕跡の可能性がある。胎土は砂粒を含み、灰色を呈する。焼成は硬質で、表面は暗灰色を呈する。焼成は硬質で、表面は暗灰色を呈する。焼成は硬質で、表面は暗灰色を呈する。焼成は硬質で、表面は暗灰色を呈する。焼成は硬質で、表面は暗灰色を呈する。

大型平瓦には瓦36がある。6区溝7出土。長さ33.3cm、幅27.2cm、厚さ1.8cmある。成形は粘土板1枚作りである。凹面は不定方向のナデ、両側縁部と側面は縦ナデを施す。凸面は不定方向のナデ、両側縁・広端面の内側にヘラで面取りを施す。胎土は砂粒を含み、灰色を呈する。焼成は硬質で、表面は部分的に煤が付着し、暗灰色を呈する。

図化したもの以外に、溝7からは二次的被熱を受けて瓦表面が赤変するものや溶解・溶着する ものが多く出土した(図版60-1)。

道具瓦(図版30・58 瓦37~39) 瓦37~39は道具瓦である。いずれも5・8区溝7出土。瓦37は、タテ27.8cm以上・ヨコ15.9cm以上・厚さ6.2cmある。板状を呈して表面には、ヘラで断面V字形に削り込んで円形と曲線で模様を描く。胎土は砂粒を少量含む精良な粘土で、灰白色を呈する。焼成は硬質で、表面には二次的被熱を受けて部分的に黄橙色を呈する部分と煤が付着する部分がある。鬼瓦の可能性もある。瓦38は桃の葉を象る。タテ10.7cm以上・ヨコ15.3cm以上ある。やや

ねじれた葉にはヘラで葉脈が表現される。胎土は砂粒を含み、灰色を呈する。焼成は硬質で、表面は暗灰色を呈する。留蓋である。瓦39は桃の実を象る。高さ13.2cm以上・幅10.3cm・厚さ8.7cmある。体部には桃実の縦方向のくぼみが表現される。体部は縦方向のケズリ後ミガキやナデを施す。胎土は砂粒を含み、灰色を呈する。焼成は硬質で、表面は暗灰色を呈する。留蓋である。

鬼瓦(図版30・31・58・60 瓦40~42) 瓦40~42は鬼瓦である。いずれも5・8区溝7出土。 瓦40は角部分である。長さ16.7 cm以上・幅8.4 cmある。断面形は、付け根付近では楕円形であるが、 先端に行くほど円形に近づく。付け根付近は空洞である。外面は縦方向のミガキを施す。胎土は砂粒を含み、灰白色を呈する。焼成は硬質で、表面は灰色を呈する。瓦41は鬼瓦右側下部の珠文帯部分である。タテ24.5 cm以上・ヨコ16.0 cm以上・厚さ9.3 cmある。縁部に型作りの珠文を貼り付ける。珠文は上面が平坦である。正面の平坦部と裏面は縦方向のナデ、側面は不定方向のナデを施す。胎土は砂粒を含み、灰白色を呈する。焼成は硬質で、表面は暗灰色を呈する。瓦42は鬼瓦の上半部である。タテ41.8 cm以上・ヨコ57.4 cm以上・厚さ30.0 cmある。鬼面部分をほとんど欠損するが、左右両側に耳と珠文帯が遺存する。基盤となる粘土板表面に鬼面部を接合する。基盤裏面には粘土板を貼り付けて補強する。縁部に型作りの珠文を貼り付ける。珠文は上面が丸味を帯び、頂点部には接合を確実にするために穴をあける。表面の調整は、縦方向のナデのちミガキを施す。縁部にはへラで面取りを施す。胎土は砂粒を含み、灰白色を呈する。焼成は硬質で、表面には二次的被熱を受けて部分的に黄橙色を呈する部分と煤が付着する部分がある。

図版60-2はその他の鬼瓦片の集合写真である。体部の厚さは21cm以上あるものもみられる。 成形後に何らかの工具で、径1.0~1.7cmの穴をあけている。粘土の乾燥効率化と焼成時の割れを防止するために施されたとみられる。

棟丸瓦(図版32 瓦43~45) 瓦43~45は棟丸瓦である。瓦43・45は7区溝7出土。瓦44は7 区溝49出土。内区は16弁菊文である。調整は、瓦当側面ヨコナデ、瓦当裏面下端は円周状にナデ を施す。胎土は砂粒を含み、灰色を呈する。焼成は硬質で、表面は暗灰色を呈する。瓦当面には雲 母が多量に付着する。

塼(図版32 瓦46) 瓦46は塼である。5区溝7出土。側面部の2辺が残る。タテ15.1 cm以上・ ヨコ8.2 cm以上・厚さ4.8 cmある。全体にナデ調整を施す。上面は他面より丁寧に仕上げる。胎土は 砂粒を含み、灰白色を呈する。焼成は硬質で、表面は暗灰色を呈する。

江戸時代後期から明治時代

江戸時代後期から明治時代の瓦類の大半は、2区溝84、7区溝49から出土した。恭明宮所用瓦と考えられる。

軒丸瓦(図版32·59 瓦47~49) 瓦47~49は軒丸瓦である。瓦47·48は7区溝49、瓦49は 1区井戸17出土。全て右巻き三巴文軒丸瓦である。巴の尾が互いに接しない。外区には珠文が密に 16個配される。調整は外区外縁に面取り、瓦当裏面は不定方向ナデ、下端は円周状にナデ。瓦当側 面はナデを施す。胎土は砂粒含み、灰色を呈する。焼成は硬質で、表面は暗灰色を呈する。

道具瓦(図版33・59 瓦50・51) 瓦50・51は道具瓦である。瓦50は7区溝49、瓦51は5区重

機掘削出土。瓦50は獅子口である。ヨコ47.9㎝以上・タテ21.8㎝以上・厚さ25.7㎝ある。巴文3個のうち右側の1個を失う。丁寧なヘラミガキを施す。右側上面に「平安城大仏御瓦師/西村彦右エ門尉」の刻印がある。胎土は砂粒を含み、灰色を呈する。焼成は硬質で、表面は暗灰色を呈する。瓦51は軒一文字桟瓦である。平瓦部分は平坦に横に延びる。違い鷹の羽文。胎土は砂粒を含み、灰色を呈する。焼成は硬質で、表面は暗灰色を呈する。

棟丸瓦(図版33・59 瓦52~58) 瓦52~58は棟丸瓦である。瓦52は1区井戸17、瓦53・54は7区溝49、瓦55は7区攪乱、瓦56~58は2区溝84出土。3種類の大きさがある。瓦52の内区は線表現の8弁菊文である。瓦53~58の内区は16弁菊文である。調整は、瓦当側面ヨコナデ、瓦当裏面下端は円周状にナデ、瓦58のみ外区外縁に面取りを施す。胎土は砂粒を含み、灰色を呈する。焼成は硬質で、表面は暗灰色を呈する。瓦当面には雲母が多量に付着する。

刻印瓦・線刻瓦(図版34~36·61、付表3)

出土した軒瓦・丸瓦・平瓦・道具瓦などには刻印を押捺したものがある(瓦10・16・23・29・30・59~149)。これらの刻印瓦は219点確認でき、刻印は多種多様で「大」、「太」、「大工」、「吉」、「上」、「山」、「極」の文字や記号など104種ある。ほとんどが5~8区溝7から出土した。刻印の位置は、軒瓦は文様区・周縁、丸瓦は凸面・連結面・玉縁凸面、平瓦は端面・凸面・凹面である。

また、「正徳元年卯八月/御瓦師寺嶋吉左エ門」、「山城國京大佛瓦師/五左衛門作」、「吉春藤□門」、「平安城大仏御瓦師/西村彦右エ門尉」、「御瓦製造所/垣内平兵衛」、「御瓦所/瓦屋徳三郎」、「八幡多賀/御瓦所/瓦屋平四郎」など瓦生産者の押印がある(瓦50・156~164)。

さらに、線刻には「慶長十七年五月□/御大□□□□与三郎□/住播州□西之郡/□□住人藤原朝臣□」、などがある(瓦150~155)。

時期は、瓦59~159は安土桃山時代から江戸時代中期、瓦160~164は江戸時代後期である。

(5) 煉瓦(図版37·62)

数種類の形状の煉瓦が出土した。煉瓦1は直方体で、箱形の型で成型し、表面はナデを施す。長さ23.8cm・幅11.5cm・厚さ6.4cmである。煉瓦2は直方体の右側をヘラで斜めにカットする。長さ22.6cm・幅10.0cm・厚さ6.3cmである。煉瓦3は、直方体の右側上部をヘラでL字形にカットする。長さ23.1cm・幅11.2cm・厚さ6.4cmである。煉瓦4は、直方体のものをヘラで切り取り、L字形に成型する。長さ23.4cm・幅11.1cm・厚さ6.4cmである。煉瓦1は7区近代整地層、煉瓦2は8区近代整地層、煉瓦3は5区溝1、煉瓦4は6区攪乱から出土した。

刻印が押印されるものもある。煉瓦5は「丸囲い」に「一」、煉瓦6は「丸囲い」に「二」、煉瓦7は「丸囲い」に「三」、煉瓦8は「丸囲い」に「四」、煉瓦9は「丸囲い」に「五」、煉瓦10は「丸囲い」に「2」である。刻印の押印される場所は、煉瓦10は平面であるが、他は小口部に施される。煉瓦5・9は5区攪乱、煉瓦6は5区溝1、煉瓦7・8は5区表土掘削中、煉瓦10は5区近代整地層から出土した。

(6) 石製品(図版38~40.62)

出土した石製品には、砥石、五輪塔(空・風輪、火輪)、蓮華座、旧本館の屋根材片や外壁材などがある。江戸時代以前と明治時代に分類できる。

江戸時代以前

砥石(石1) 使用痕のある砥石である。タテ14.0cm・ヨコ7.3cm・厚さ2.2cm。上下両面とも摩擦により滑らかになっている。上部の欠損している部分に加工痕があることから、温石に転用された可能性がある。7区溝7から出土した。

五輪塔(石2・3) 石2は五輪塔の空・風輪である。風輪部に刻んだ梵字は「 \mathbf{X} (キャ)」の可能性がある。空輪の梵字は「 \mathbf{X} (カ)」の可能性があるが判別できない。表面の風化が著しい。花崗岩。石3は五輪塔の火輪である。各面に梵字が施される。下面から時計回りに、「 \mathbf{X} (ラー)」、「 \mathbf{X} (ラー)」、「 \mathbf{X} (ラク)」である。表面の風化が進んでいる。花崗岩。石2は12区近世整地層、石3は5区溝9から出土した。

蓮華座(石4) 欠損部が多い。側面の2面と上下面の一部が残る。正面には枠の中に文様が配されるが不明である。上部には連続した蓮華文が施される。上面には方形の穴が施される。表面の風化が著しい。花崗岩。8区柱列77の柱穴80から出土した。

石仏(石 5) 仏像の胸部から頭部の一部が遺残する。高さ38.4 cm以上・幅27.7 cm以上・厚さ12.7 cm以上。仏像は2.1 cmの高さに浮き彫りされる。表面の風化が著しい。花崗岩。6 区表土掘削中に出土した。

明治時代

この時期の石製品には、旧本館の屋根材・外壁材などがある。屋根材は粘板岩である。外壁材の 材質は凝灰岩・花崗岩がある。旧本館建設時に、現地で成形加工する際に破損したものが廃棄され たとみられる。

屋根材(石 $6\sim10$) 黒色の板状で下部を弧状に成型する。厚さ0.6cm。旧本館の屋根に葺かれるスレートである。粘板岩である。葺き上がりはウロコ状となる。5区溝1から出土した。

外壁材(石11~20) 石11・12は上部を凸帯状に成形する。石11はタテ10.4cm以上・ヨコ9.7cm以上・厚さ6.9cm以上ある。凸帯部に横方向のケズリ、正面上部は横方向のケズリ、下部は縦方向のノミ痕跡がみられる。曲面は滑らかに加工される。石12はタテ8.5cm以上・ヨコ3.3cm以上・厚さ5.7cm以上ある。曲面はさらに滑らかに加工される。石13は正面と上面が平坦に加工されている。タテ7.9cm以上・ヨコ4.6cm以上・厚さ7.3cm以上ある。正面と上面は横方向のケズリで平坦に加工され、正面は滑らかに加工される。石14はタテ10.0cm以上・ヨコ15.3cm・厚さ5.8cm以上ある。正面は斜め方向のケズリが残り、モルタルが付着する。上面は横方向のケズリで平坦に加工される。石15は平坦な面に溝状の加工がある。タテ11.6cm以上・ヨコ7.3cm以上・厚さ7.4cm以上ある。曲面は滑らかに加工される。側面には縦方向に幅1.2cmのノミ痕が多く残る。石16は平坦面の下端が溝状に加工されている。タテ9.2cm以上・ヨコ6.1cm以上・厚さ11.0cm以上ある。正面平坦部と曲面は状に加工されている。タテ9.2cm以上・ヨコ6.1cm以上・厚さ11.0cm以上ある。正面平坦部と曲面は

横方向のケズリで滑らかに加工される。下面は横方向のケズリと縦方向の幅1cmのノミ痕が残る。側面は乱雑なノミ痕が残る。石17・18は下端が台状に突出し、上端部は面取り加工されている。石17はタテ13.6cm・ヨコ9.8cm以上・厚さ13.3cm以上ある。正面と上面は丁寧に仕上げられている。下面は横方向のケズリと縦方向のノミ痕が残る。側面は粗いノミ痕が残る。石18はタテ30.2cm・ヨコ63.2cm以上・厚さ56.2cm以上ある。正面は丁寧に仕上げられている。上下面は横方向のケズリと斜め方向の粗いノミ痕が残る。側面は斜め方向の粗いノミ痕が残る。石19は上部が弧状に加工されている。タテ13.1cm以上・ヨコ5.5cm以上・厚さ13.6cm以上ある。正面は丁寧に仕上げられているが、加工時に付けられたとみられる縦方向の線が残る。石20は上部が突出している。タテ5.0cm・ヨコ17.9cm以上・厚さ5.5cm以上ある。正面及び上面は丁寧に仕上げられている。下面及び奥面は粗く調整されている。にぶい橙色を呈する。

石12・13は花崗岩で、それ以外は凝灰岩(沢田石・伊豆青石)である。石11・12は5区溝1、石20は5区溝49、他は5区表土掘削及び攪乱から出土した。

(7) 金属製品

銭貨(図22) 銭 $1 \sim 3$ は寛永通寳である。銭 1 は古寛永、銭 $2 \cdot 3$ は新寛永である。銭 1 は 5 区溝 7、銭 2 は 10 区整地層、銭 3 は 5 区溝 1 から出土した。

金属製品(図23) 鉄製と銅製の ものがあり、釘・鎹や不明品があ る。

金1は厚さ0.05cmの板状を呈する。旧本館の雨樋の可能性がある。 銅製である。金2は厚さが2.2cmあり、緩やかな曲面を呈する。凸部に







図22 銭貨拓影(1:1)

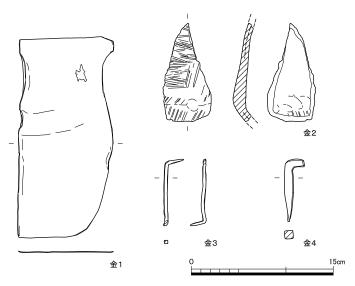


図23 金属製品実測図(1:4)

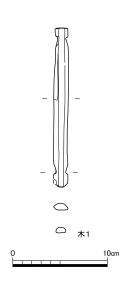


図24 木製品実測図(1:4)

は、細かいミガキ痕が残る。銅製である。製品は不明である。金3は鉄製鎹である。先端部分の方向が90度違う形状である。断面は四角形を呈する。金4は鉄製釘である。頭部を90度曲げる。断面は四角形を呈する。金1は7区表土掘削中、金2は7区溝7、金3は8区整地層、金4は5区溝1から出土した。

(8) 木製品 (図24)

木1は棒状の製品である。両端部付近に切込みを入れる。欠損部があるが断面形状が本来は円形を呈するとみられる。長さ16.9cm。用途は不明である。材質はヒノキ。11区土坑60から出土した。

註

1) 土師器皿の型式・年代については、平尾政幸「土師器再考」『洛史 研究紀要 第12号』 公益財団法 人京都市埋蔵文化財研究所 2019年に準拠する。

78	50年		84	10年		9	30年		10	20年		11	10年	11	70年		12	60年		13	50年	14	10年		15	00年		15	90年		16	80年	17	40年	18	00年	186	60年
		1			2			3			4		,	5		6			7			3		9			10			11			2		.3	1	4	
	Α	В	С	Α	В	С	Α	В	С	Α	В	С	Α	В	Α	В	С	Α	В	С	Α	В	Α	В	С	Α	В	С	Α	В	С	Α	В	А	В	Α	В	

5. まとめ

今回の京都国立博物館旧本館周辺における14~16次(2018~2021年度)に亘る一連の調査では、平安時代後期、安土桃山時代から江戸時代中期、江戸時代後期、明治時代の遺構を検出した。平安時代後期の遺構は、法住寺殿跡に関連するとみられる。安土桃山時代から江戸時代中期の遺構は、方広寺大仏殿院に関連するものである。明治時代の遺構は、恭明宮及び旧本館のものである。以下に、各時期ごとに遺構の変遷をまとめる。

(1) 平安時代後期

当地を含む周辺地には、後白河上皇によって法住寺殿が造営された。法住寺殿は南殿や北殿をは じめ多くの新造御所や蓮華王院、最勝光院などの御堂も建てられた広大な御所であった。現在の京 都国立博物館敷地は、法住寺殿北殿の東部及び新御所付近に相当すると考えられる。

1区では、法住寺殿跡に関連するとみられる12世紀末の縦板組の井戸65を検出した。11区においても、井戸とみられる土坑60を検出した。これまで旧本館西側では、溝・土坑・柱穴・路面などの遺構が多く検出されていたが、南東部での当該期の遺構の検出は初めてである。博物館敷地内東側では、方広寺造営や博物館建設時の大規模な土地改変により、深度の浅い遺構は削平されて消滅した可能性が高いが、この区域にも法住寺殿跡に関連する遺構が展開していたことが明らかとなった。

(2) 安土桃山時代から江戸時代中期(図25)

豊臣秀吉は、天正14年(1586)5月に方広寺大仏殿の造営予定地を現在位置に決め、天正16年(1588)5月に造営工事を開始した。造営中の文禄5年(1596)閏7月に「慶長伏見地震」が発生し、大仏や周囲の築地塀などに大被害を受けた。地震後、豊臣秀頼が方広寺の再建に着手した。しかし、慶長7年(1602)12月、鋳造中の大仏は大仏殿と共に焼亡する。火災後の慶長14年(1609)春には、秀頼が大仏殿復興に着手し、慶長17年(1612)5月に造営は完成した。のちの寛文2年(1662)に地震を受け、大仏は倒壊した。その後再度再建されるが、寛政10年(1798)7月に大仏殿は落雷を受け、これによる火災で大仏殿・楼門・回廊などが焼亡した。

調査では、方広寺大仏殿院に関連する溝・布掘り溝・柱穴・築地(礎石列4・石列139)・石組・ 土坑などの遺構を検出した。これらの遺構は、秀吉の創建期と秀頼の再建期以降の2時期に大別で きる。特に、今までは実体が不明であった創建期の遺構を検出したことは大きな成果である。

1) 方広寺創建期の遺構

5~8区で検出した東西方向の溝24は、大仏殿院造営に伴い最初に掘削された排水溝とみられる。溝内からは、16世紀末の土師器皿が出土した。この溝24は、13次調査の7区の溝3、15区の溝31と同一の溝と考えられ、溝底部に細砂や粗砂が堆積している状況も同様である。

5区で検出した築地3 (礎石列4・石列139) は、大仏殿院の南築地塀基底部にあたり、南側の

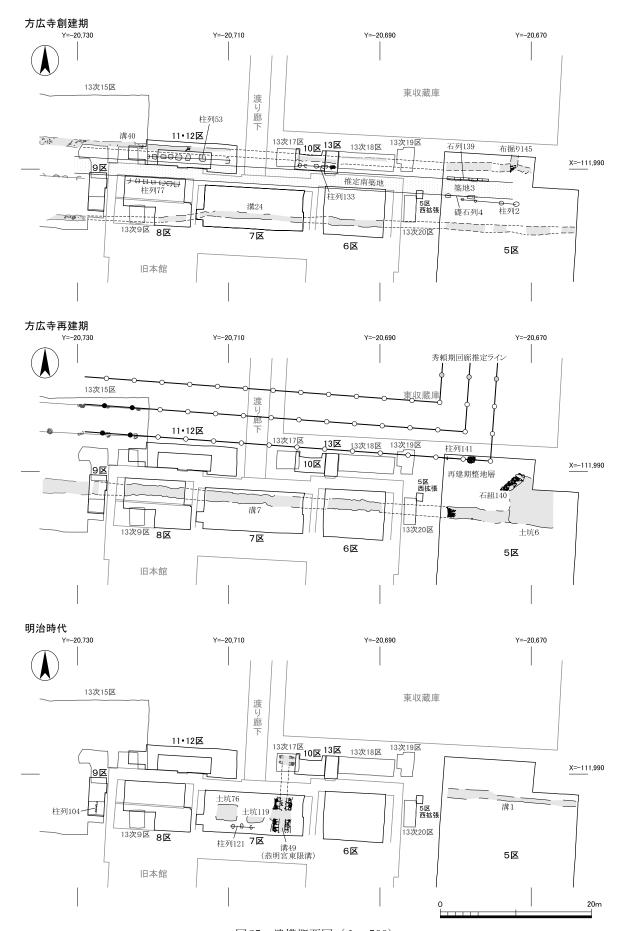


図25 遺構概要図(1:500)

礎石列4は寄柱の礎石、北側の石列139は地覆石とみられる。寄柱の柱間は3.3 mあり、築地塀の幅は南北石列のホゾ穴の距離から2.2 mと判明した。築地塀の内側(北側)と外側(南側)では、塀の外観仕様が異なることが注目される。

また、5区で検出した布掘り145は、素掘りの溝で東築地の想定位置付近に位置している。石組140・土坑6や攪乱により削平され不明瞭な部分があるが、南北方向の区画施設の地業の可能性も考えられる。

5・10~13区で検出した東西溝40は、13次調査15~18区の溝29の延長部にあたる。溝内からは、16世紀末の土師器皿が出土した。以前の調査では、再建期の南回廊南雨落ち溝と考えられていたが、今回は5区で再建期整地層の下で検出したこととから、創建期に遡る可能性が高く、成立時期や全てが同一の溝であるのかの再検討が必要である。

8区の柱列77と11区の柱列53は、約3.3mの距離を保ち東西方向に並行している。築地3を延長した塀の推定ラインの南北両外側に位置することから、築地塀に関連する遺構、もしくは築地塀に先行する区画施設の遺構の可能性がある。また、10・13区の柱列133は、柱列53の東延長線上に位置しており、同一遺構の可能性がある。

2) 方広寺再建期の遺構

5区の柱列141は、大仏殿院南回廊の礎石据付け穴とみられ、芯々での復元距離は約3.7mある。 13次調査15区調査成果の延長線上に位置する。13次調査での礎石据付け穴間の平均距離は3.72m という数値が示されており、今回の数値に極めて近い。

同じく5区で検出した南東方向に面をもつ石組140は、1999年調査4 – 1区で検出されていた石組4 – 1と同一遺構である。石組140は土坑6の北西部分に構築されており、一体の遺構とみられる。当地の東側斜面から流入する雨水を溜める機能を持っていたとみられる。 $5 \sim 9$ 区の東西方向の溝 $7 \cdot 102$ は、13次調査 $15 \cdot 21 \cdot 22$ 区の溝30の延長部にあたり、土坑6に溜まった雨水を西側に流す機能をもつとみられる。溝の埋土中から大型の大仏殿所用瓦が出土しているのは、これまでの調査成果と同様である。溝の上層には、瓦類が多量に廃棄されていた。熱により赤く変色し互いに溶着したものも多くみられる。さらに焼けた壁土や炭化材も含まれていた。これらは文献にみられる寛政10年(1798)の火災の記載を裏付ける遺物である。

(3) 江戸時代後期

1区の井戸8・17、3区の柱穴15~17・溝19・土坑18、6区の土坑46、7区の柱列121などがある。遺構数が少なく、遺物の出土量も少ないが、検出した層序から江戸時代後期の遺構とみられ、妙法院の子院である日厳院に関連すると想定される。3区の溝19は、大仏殿所用瓦を一定量含んでおり、その性格が注目される。東西両側を攪乱や明治時代の遺構により失っているが、さらに東側にも延びていた可能性もあり、境内の区画施設に関連することも想定される。3区土坑18は、井戸の可能性がある。南側に位置する1区の井戸8・17と近い位置にあり、相互の関連が窺われる。この近辺に日厳院の庫裏などが存在した可能性がある。

(4) 明治時代以降

恭明宮は、神仏分離令により、禁裏内の仏像や天皇・皇后位牌の安置、及び宮中女官の住居として造営された施設である。恭明宮は、方広寺跡地に明治4年(1871)に竣工したが、その後、次第に荒廃し、明治6年(1873)にその機能を停止した。

2・7・9・11区で恭明宮関連の遺構を検出した。2区の南北方向の石組溝84、7区の南北方向の石組溝49がある。これらは13次調査13・14区溝11の南延長にあたる。恭明宮の東区画溝と推定される。溝の埋土中から多量の瓦が出土し、これまでの調査と同様である。この石組溝より西側が恭明宮敷地内となり、恭明宮内の遺構には7区土坑76・119と柱列121、9区柱列104がある。

京都国立博物館の前身である帝国京都博物館は、明治25年(1892)3月から本館工事が始まり、明治28年(1895)10月に旧本館が竣工し、2年後に開館した。昭和44年(1969)には旧帝国京都博物館陳列館として国の重要文化財に指定された。

各調査区では旧本館に関連する遺構を検出した。 $4\cdot 6\sim 9\cdot 11\cdot 12$ 区では、旧本館に接して調査区を設定していることから、旧本館の外壁基礎部分を検出している。地山を深さ約 $2\,\mathrm{m}$ 掘り込んだ掘形底部に栗石を詰め、その上にコンクリート製の土台を作る。さらにその上に煉瓦を13段積み上げて基礎部分とする。底部では幅約 $2.3\,\mathrm{m}$ 、地上部では幅約 $1.4\,\mathrm{m}$ ある。煉瓦の積み方は1段ごとに長辺を主体にする段と短辺を主体にする段を交互に配する「イギリス積み」である。

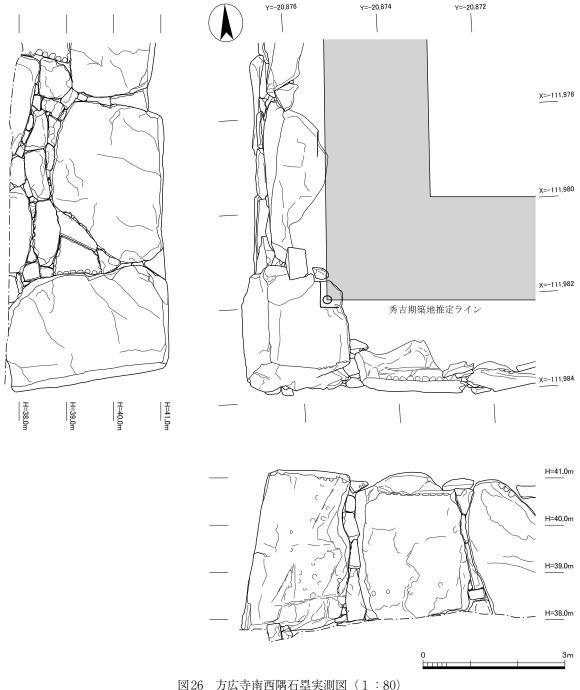
1区で検出した南北柱列42と東西柱列44は、ともに柱間は約1.9m等間であり、旧本館建物から 約2m離れた位置にあることから、旧本館建設時の足場を組んだ柱列とみられる。2区では、雨水 排水の土管と方形の煉瓦積み集水桝3がある。北側から土管が集水桝3に接続する。3区では、埋 設管1~7(土管・ヒューム管)、円形の煉瓦積み集水桝8がある。西・北東・南東方向から集水 桝8に接続する土管は当初からの施設として遺存している。埋設管1・3・4は土管を除去した のちにヒューム管を設置していることがわかった。埋設管6は南側に排水する機能を持っていた が、埋設管2のヒューム管が代替として新たに設置されたとみられる。埋設管4・5はそれぞれ2 本の雨樋からの雨水を流すことから、1本の雨樋の雨水を受ける埋設管7の土管よりも径が太い ものが設置されている。また埋設管6の土管も太い径のものを設置していた。これらの管の付け替 えは、集水桝8の底部付近の位置に土管が接続されているために、土管につまりが生じ、ヒューム 管に替えられたとみられる。土坑13・14は、避雷針銅板の設置土坑である。土坑14では土坑内に 銅板を垂直方向に設置し、その周りに炭を充填している構造が注目される。しかし、銅板は腐食が 著しく、溶接されていた銅線の束も剥がれていた。この銅板は建物北東屋根上の避雷針に接続して いたとみられる。また、土坑13は南東屋根上の避雷針と接続するものと考えられる。土坑14に近 い位置の土坑9は、前2基に比べて小規模かつ簡略化しており、土坑14の代替として設置された 最も新しい時期の避雷針土坑とみられる。

今回の調査により、旧本館は、雨水排水や落雷対策など様々な修理・修復作業を施されて維持されていたことがわかった。

(5) 発見した礎石と方広寺大仏殿院について(巻頭図版3、図26・27)

以前の方広寺跡の調査で検出した遺構は、その多くが豊臣秀吉の息子である秀頼の再建した南 回廊に関連する遺構などであったが、今回5区で検出した築地3 (礎石列4・石列139) は、豊臣 秀吉が天正16年(1588)に創建した大仏殿院の南築地塀の基底部と考えられる。

大和大路に面した現存する方広寺南西隅石塁の巨石(巻頭図版3、図26)の上面にホゾ穴(径18 cm、深さ18cm)が確認されており、今回検出した石9(礎石列4)のホゾ穴との位置関係から、両 者は一連の築地塀の基礎部分と考えられる(図27)。直線距離で197.961mあり、角度は東に対して



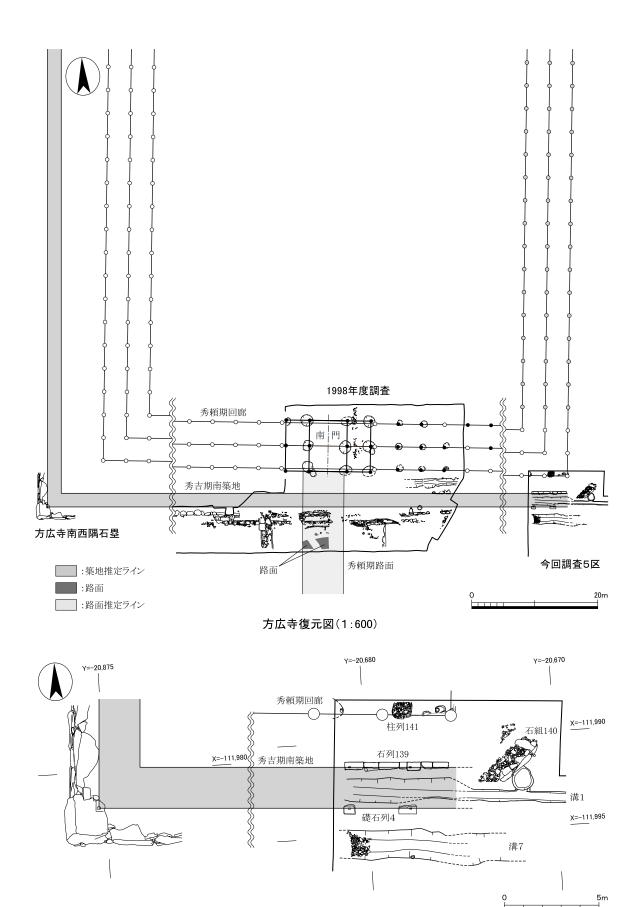


図27 方広寺南築地復元図(1:600、1:200)

今回調査5区(1:200)

方広寺南西隅石塁(1:200)

南へ3度24分の方位である。秀頼期の南面回廊は、北に対して東へ4度13分52秒の方位で造営されていることがわかっており、その差は約0度10分となり、造営方位は近いが異なっていることが判明した。巨石上面の標高は41.12 m、今回の石9上面の標高は41.62 mあり、高さ0.5 mの差があるが、約200 mの距離では傾きは0.25%の勾配となり、ほぼ水平とみなしてよい。

石2(石列139)と石9(礎石列4)の矢穴は、京都新城(慶長2年〔1597〕、豊臣秀吉築造)の石垣転落石と同タイプであることが判明した。矢穴の縦断面の形状がU字形となり、矢穴形態が丸底・船底状を呈する「古Aタイプ」に分類される。この矢穴は文禄元年(1592)から慶長5年(1600)までの時期が与えられることから、創建期の築地基礎であることを裏付けている。

今回の調査では、創建期南築地の東端部は、再建期の石組140・土坑6や攪乱により検出されていない。南築地東端から北方に延びると想定される東築地の位置は明らかにできなかった。しかし、南築地東端の想定位置付近に位置する南北方向の布掘り145は、築地3基礎とは構造が異なるが、大仏殿院東側の南北方向の区画施設の地業の可能性が考えられる。この東側区画施設は、掘立柱構造などの塀の可能性も想定できる。『義演准后日記』にある慶長伏見地震の際の記述にある「三方ノ築地悉崩、或倒壊」から、三方には築地塀が築造されているが、東面は別構造の区画施設であったと読み取ることも可能である。今後の調査により明らかになることが期待される。

秀吉の創建した大仏殿院を取り囲む築地塀は、文禄5年(1596)の慶長伏見地震によって倒壊し、後に秀頼が回廊(複廊)に造り直したことが文献からは知られていたが、秀吉期の築地塀は今回の発掘調査により初めて明らかになった。大仏殿院南築地塀の位置や傾きがわかったことにより、創建期の大仏殿院を復元するうえで貴重な資料となった。

なお、京都国立博物館による施設の設計変更によって、この礎石・地覆石及び築地塀基礎部分は、保護砂で養生して現状のまま保存されている。

註

- 1) 長宗繁一「方広寺大仏殿復元試案」『法住寺殿跡·六波羅政庁跡·方広寺跡』京都市埋蔵文化財研究 所発掘調査報告 2009 - 8 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2010年
- 2) 小檜山一良『平安京左京一条四坊十町跡·公家町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2019 -11 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2020年
- 3) 森岡秀人・藤川祐作「矢穴の型式学」『古代学研究 第180号 森浩一先生傘寿記念論文集 』 古代学研究会 2008年
 - 矢穴の型式については、現地で森岡氏より御教示を得た。
- 4) 『義演准后日記』 文禄 5年 (1596) 閏 7月 13日条

付章 方広寺の築地などに用いられた石材について

橋本清一(元京都府立山城郷土資料館) 関 晃史(公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所)

本報告では、今回の発掘調査で確認された豊臣秀吉と豊臣秀頼の所産と考えられる遺構に用いられた石材について、石材観察から得られた結果を述べる。また、調査に際して史跡となっている 方広寺石塁の南面(京都国立博物館正門横)に用いられている石材についても、併せて観察した様 相についても概要を報告する。報告は橋本が現地において石材を観察し、関が結果をまとめたものである。

観察は以下の通り実施した。

- ・寸法の測定は、長径、中径、短径を図28の通り計測し、土中などで全長が計測できない場合は、計測可能値に「+」を付した。
- ・円磨度は、図29に示す段階表を用いて、裏込めや根石にある無加工の石材を対象に評価した。
- ・風化度は、表4に示す区分で評価した。
- ・裏込めや根石に関しては、無作為に抽出した石材を観察対象とし、個別の図示はしない。 観察結果を表5に示し、以下に概要を述べる。

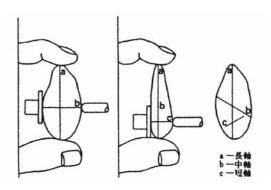


図28 礫の寸法測定法

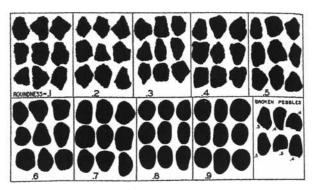
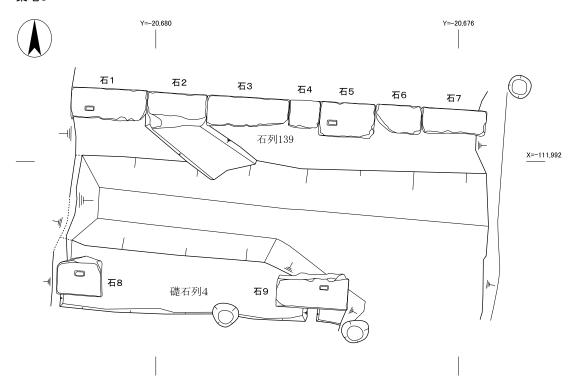


図29 礫の円磨度の段階表

表4 肉眼観察による岩石の風化度の区分表

風化度	特 徴
新鮮	岩石の表面および内部がほとんど風化していないもの。ただし、表面が少し変色している程度 のものは含める。顕微鏡等による観察では、ある種の鉱物は風化している場合がある。
弱風化	岩石の表面や節理、層理面などの各種の面・線構造に沿って、厚さ数mm程度かそれ以上の風化層を生じているもの。ハンマーなどで割ると、岩石の中央部に近づくと新鮮になっている。
中風化	岩石の風化が、表面から中心にまで達しているが、ハンマーなどを使わないと割れないもの。
強風化	岩石の風化が、表面から中心にまで達しており、そのため風化が激しいので、ナイフ等で容易 に削れたり、手で握りつぶせるほどにやわらかくなっているもの。

築地3



石組140

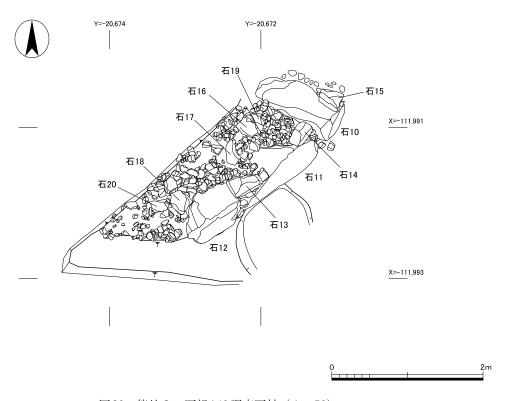


図30 築地3・石組140調査石材(1:50)

表 5 石材観察結果一覧表

遺構	No.	岩石名	加工		上法(cm		円磨度	風化度	備考
			あり、矢穴痕、	長径	中径			day talk	
	石1	黒雲母花崗岩	ホゾ穴	102	80	34	_	新鮮	刻印あり。
	石2	黒雲母花崗岩	あり	85	85	35	_	新鮮	刻印あり。
	石3	黒雲母花崗岩	あり	113	85	10+	_	新鮮	刻印あり。
	石4	黒雲母花崗岩	あり	53	52	?+	_	新鮮	刻印あり。
築地3	石5	黒雲母花崗岩	あり、ホゾ穴	83	80	?+	_	新鮮	
	石6	黒雲母花崗岩	あり	70	50	?+	_	新鮮	刻印あり。
	石7	黒雲母花崗岩	あり	85	55	25	_	新鮮	
	石8	黒雲母花崗岩	あり、ホゾ穴	68	68	26	_	新鮮	刻印あり。
	石9	黒雲母花崗岩	あり、矢穴痕、 ホゾ穴	100	95	33	_	新鮮	刻印あり。泥質のゼノリス捕獲岩7cm×10cmを含む。
	石10	花崗閃緑岩 (花崗斑岩)	部分的研り	100	70	48	_	弱風化	
	石11	花崗斑岩		130	65	45	_	弱風化	
石組140	石12	花崗斑岩	斫り	95	57	45	_	新鮮~弱風化	
	石13	黒雲母花崗岩	三面斫り	50	30	15	_	新鮮	
	石14	黒雲母花崗岩		35	20	20	_	新鮮	
	石15	花崗斑岩		37	26	18	_	新鮮	
	石16	花崗閃緑岩 (花崗斑岩)	人為的割れ	33	20	10	_	新鮮~弱風化	
	石17	花崗閃緑岩 (花崗斑岩)	人為的割れ	35	15	10	_	新鮮~弱風化	
	石18	花崗斑岩	人為的割れ	30	25	8	_	新鮮~弱風化	
	石19	黒雲母花崗岩	あり	20	13	10	_	新鮮	
	石20	花崗閃緑岩 (花崗斑岩)	人為的割れ	27	16	5	_	新鮮~弱風化	
		チャート		14	11	6	0.4~0.5	新鮮	
石組140		砂岩		8	5	3	0.5~0.6	新鮮	ややホルンフェルス化。
裏込め		玢岩		13	8	6	0.7	弱風化	
		黒雲母花崗岩		9	6	3+	0.6	新鮮	
		ホルンフェルス		8	6	4	0.6	新鮮~弱風化	泥質。
		チャート		12	10	6+	0.4~0.5	新鮮	
		砂岩		12	7	5	0.5	新鮮~弱風化	
		チャート		6	6	5	0.5	新鮮	
		砂岩		10	6	5	0.5	新鮮	
		黒雲母花崗岩	人為的割れ	13	11	7	_	新鮮	
		花崗斑岩	人為的割れ	20	12	7	_	弱風化	
		花崗閃緑岩	人為的割れ	22	20	13	_	新鮮	
		黒雲母花崗岩	人為的割れ	17	13	8	_	新鮮	
礎石据付穴141 根固め石		花崗閃緑岩 (花崗斑岩)	人為的割れ	16	11	8	_	新鮮	
		チャート		11	8	7	0.4~0.5	新鮮	
		チャート		9	5	4	0.6	新鮮	
方広寺石塁 博物館正門横		石英斑岩or 花崗斑岩など	矢穴痕	_	_	_	_	_	
南西角付近		チャート		_	_	_	_		熱変成なし。
方広寺石塁 南西角		花崗岩寄りの 石英斑岩	あり、矢穴痕 多、ホゾ穴	_	_	_	_	_	他の石塁使用材と異なる。

対象遺構のうち、秀吉期と考えられる築地塀の礎石・地覆石は、9点(石1~9)が検出されており、全点が石英、長石(カリ長石・斜長石)、黒雲母からなる黒雲母花崗岩であった。

秀頼期と考えられる遺構には、石組140と回廊の礎石据付穴141があり、石組及びその裏込めと回廊の礎石根固めに用いられる石材を観察対象とした。対象点数は石組6点(石10~15)、裏込め16点(石16~20ほか)、回廊の礎石根固め石5点である。石組に用いられる石材は、花崗閃緑岩(花崗斑岩)と花崗斑岩、黒雲母花崗岩であり、花崗岩類で構成されている。裏込め石には、多様な石材が用いられており、チャート・砂岩・玢岩・ホルンフェルスは、いずれも円磨度が0.4~0.7程度の河床礫で、鴨川から得られた石材が用いられたものと考えられる。一方で、黒雲母花崗岩や花崗斑岩は地覆石や基礎石の破片からなるものの可能性が高い。礎石根固め石には、裏込め石と同様に花崗岩類の破片と河床礫のチャートが見られ、瓦も少量混じる。

方広寺石塁南面に用いられている石材は、大津市の藤尾や三井寺西側においてみられる南北方向にのびる幅の広い岩脈の石英斑岩や花崗斑岩が大半であり、チャートは1点のみを確認した。また、南西角に配された石材は、周囲に積まれた石材とは異なり、花崗岩に似た石英斑岩が用いられ、見栄えを意識して配置されたものと考えられる。

方広寺石塁南面の今回の調査と、そこから東の京都国立博物館の旧館(現在の平成知新館)の階段の大きな石材については、以前の調査時に橋本が調査し、今回と同じ石英斑岩(一部花崗斑岩)が用いられていることを確認している。なお、この石英斑岩の岩脈は山科盆地の東の山中を南下すると何本かに分岐し、岩脈の幅が細くなり消失する。

以上の調査で確認した花崗岩類は、いずれも広島型(瀬戸内型)のものであり、領家帯の花崗岩類はみられない。また、裏込めや根石には鴨川から採取したと考えられる河床礫に加え、基礎石や石塁に用いられた花崗岩類の破片が用いられる。

註

- 1) Krumbain,W.C. Measurement and geological significance of shape and roundness of sedimentary 例 particles, Journal of Sedimentary petrology, Vol.11 No.2 1941
- 2) 橋本清一「今里車塚古墳の葺石の石材」『京都府埋蔵文化財発掘調査概報 第2分冊』 京都府教育委 員会 1980
- 3) 花崗閃緑岩(花崗斑岩)としたものは、花崗斑岩としたものより、粒の形成が不十分なものである。
- 4) 田中利律子ほか「六波羅政庁跡」『平成10年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文 化財研究所 2000

付表1 土器類観察表

番号	器種	器形	調査区	遺構	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	胎土色調	備考
1	土師器	∭N	1区	井戸65						6A段階
2	土師器	∭N	1区	井戸65						
3	輸入白磁	椀	1区	井戸65						
4	土師器	ШA	7区	近代整地層	11.8	2.1		30	7.5YR8/2灰白色	3A段階
5	土師器	∭Sh	7区	近代整地層	6.9	2.0		25	10YR8/1灰白色	9C段階
6	土師器	ШSb	6区	溝24	9.7	1.9		50	7.5YR7/4にぶい橙色	11A段階
7	土師器	ШSb	6区	溝24	9.7	2.0		65	7.5YR7/4にぶい橙色	11A段階 口縁部に油煙付着
8	土師器	∭S	5区	溝24	12.7	2.0		25	7.5YR7/4にぶい橙色	11A段階
9	焼締陶器	擂鉢	11区	溝24	30.8	14.1	12.0	50	5YR6/6橙色	信楽
10	土師器	∭S	11区	溝40	10.2	2.3		60	7.5YR7/4にぶい橙色	11A段階 口縁部に油煙付着
11	土師器	∭S	11区	溝40	10.5	2.3		25	7.5YR7/4にぶい橙色	11段階
12	焼締陶器	擂鉢	11区	溝40	20.7	(9.5)		25	5YR5/3にぶい赤褐色	信楽
13	土師器	∭S	5区	土坑6	12.5	2.1		70	10YR8/1灰白色	11C段階
14	施釉陶器	天目椀	6区	土坑46	11.8	(6.3)		20	釉:5YR4/4にぶい赤褐色 胎土:2.5Y7/1灰白色	
15	施釉陶器	椀	5区	溝7		(1.2)	4.4	20	釉:7.5Y3/1オリーブ黒色 胎土:2.5Y8/2灰白色	肥前京焼風 高台部に刻印
16	焼締陶器	壷	7区	溝49		(24.3)	6.2	80	2.5YR4/4にぶい赤褐色	沖縄壷屋焼
17	施釉陶器	杯	7区	溝49	4.7	(5.8)		80	釉:10Y2/1黒色 胎土:2.5Y6/2灰黄色	イッチン書き
18	染付磁器	鉢	7区	溝49	13.5	7.9	7.2	50		型紙摺り
19	染付磁器	椀	7区	土坑76	10.8	5.9	4.4	30		瀬戸·美濃
20	染付磁器	11.	7区	土坑76	13.2	3.7	7.6	50		輪花 型紙摺り
21	染付磁器	鉢	7区	土坑76	18.1	8.5	8.5	50		色絵 焼継ぎ
22	施釉陶器	火入れ	5区	近代整地層		(3.5)	5.6	30	釉:10GY8/1明緑灰色 胎土:7.5YR4/2灰褐色	刻印あり
23	染付磁器	椀	5区	近代整地層		(2.2)	5.8	30		広東椀 高台部に焼継ぎ文字

※()は残存数値

付表2 土製品観察表

番号	器種	器形	調査区	遺構	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	胎土色調	備考
土1	泥面子		13区	土坑39				100	7.5YR7·6橙色	文様は不明
土2	泥面子		5区	溝7				100	7.5YR8/4浅黄橙色	文様は不明
土3	土人形	男性	6区	近代整地層				80	釉:5Y6/3オリーブ黄色 胎土:7.5YR8/2灰白色	施釉
±4	土人形	狐	7区	溝49					10YR8/3浅黄橙色	眷属

付表3 刻印瓦·線刻瓦観察表

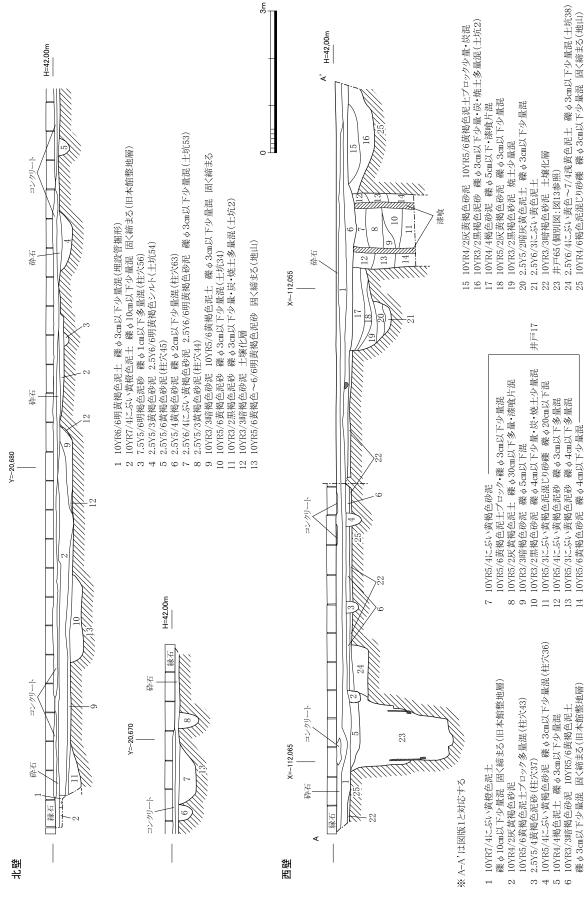
番号	種 類	刻印・線刻の箇所と内容	胎士•色調	焼 成	調査区	遺構
瓦10	大仏軒平瓦	周縁左上 ○	砂粒を少量含む精良な土 灰色から暗灰色	良好二次的被熱を受ける	7区	溝7
瓦16	大仏軒平瓦	瓦当面 縦方向の「=」	砂粒を少量含む精良な土灰色から暗灰色	良好	6区	溝7
瓦23	軒平瓦	周縁右 井桁文	砂粒を少量含む 灰色	良好	8区	溝7
瓦29	大仏丸瓦	凸面頂部 三角形の圏線に点	砂粒を含む 灰色	硬質	8区	溝7
瓦30	大仏丸瓦	凸面中央部 井桁文	砂粒を含む 灰色	硬質 二次的被熱を受ける	6区	溝7
瓦50	獅子口	右側上面「平安城大仏御瓦師/西村彦右エ門尉」	砂粒を含む 灰色	硬質	7区	溝49
瓦59	大仏平瓦	端面 刻印上部は鶏冠に似る、下部円内に「天」も しくは「夭」の文字か	砂粒・小礫多量含む 2.5Y3/1 黒褐色	硬質	8区	溝7
瓦60	大仏丸瓦	凸面 瓦59と似る、下部円内に文字なし	砂粒・小礫含む 5YR4/1 褐灰色	硬質	5区	溝9
瓦61	大仏丸瓦	凸面 宝文、下部に「六」の文字か	砂粒・小礫少量含む N4/0 灰色	硬質	8区	溝7
瓦62	大仏平瓦	端面 円形の圏線に宝	砂粒少量含む 7.5YR8/4 浅黄橙色	硬質 二次的被熱で変色	5区	攪乱
瓦63	大仏丸瓦	凸面「為」の文字に似る	砂粒・小礫少量含む N4/0 灰色	硬質	5区	創建期 整地層
瓦64	大仏丸瓦	凸面 円形内に鳥文	砂粒含む N4/0 灰色	硬質	5区	創建期 整地層
瓦65	丸瓦	凸面 円形内に鳥文	砂粒・礫少量含む N4/0 灰色	硬質	5区	攪乱
瓦66	大仏丸瓦	凸面 花弁5枚、中央近くに窪みあり、梅に似る	砂粒・小礫含む N4/0 灰色	硬質	8区	近代 整地層
瓦67	大仏平瓦	端面 円形内に花弁5枚の花文	砂粒・小礫含む 10YR8/6 黄橙色	硬質 二次的被熱で変色	8区	溝7
瓦68	大仏平瓦	端面 円形内に花弁8枚の花文	砂粒・小礫・礫少量含む N5/0 灰色	硬質 二次的被熱で変色	6区	溝7
瓦69	大仏丸瓦	凸面 花弁16枚の花文	砂粒・小礫少量含む N4/0 灰色	硬質	2区	溝84
瓦70	大仏平瓦	端面 菊文	砂粒少量含む 10YR7/4 にぶい黄橙色	硬質 二次的被熱で変色	8区	溝7
瓦71	大仏丸瓦	凸面 菊文4つ	砂粒・小礫多量含む N5/0 灰色	硬質	5区	創建期 整地層
瓦72	大仏丸瓦	連結面 葉に似る	砂粒含む 10YR3/1 黒褐色	硬質 二次的被熱で変色か	8区	溝7
瓦73	大仏平瓦	端面 桐文	砂粒・小礫少量含む N4/0 灰色	硬質 二次的被熱で変色	7区	溝7
瓦74	平瓦	端面 小型の円	砂粒・小礫少量含む 2.5Y3/1 黒褐色	硬質	7区	溝7
瓦75	大仏平瓦	端面 小型の円2つ	砂粒・小礫少量含む N3/0 暗灰色	硬質	8区	溝7
瓦76	大仏丸瓦	連結面 円形の圏線	砂粒少量含む N5/0 灰色	硬質	8区	溝7
瓦77	軒平瓦	周縁右 小型の円7つ	砂粒少量含む N4/0 灰色	硬質	7区	溝7
瓦78	大仏平瓦	端面 二重の円形の圏線	砂粒・小礫・礫含む 7.5YR7/6 橙色	硬質 二次的被熱で変色	5区	溝1
瓦79	大仏平瓦	端面 二重の円形の圏線	砂粒・小礫多量含む N4/0 灰色	硬質 二次的被熱で 部分的に変色か	7区	溝7
瓦80	大仏平瓦	凹面 輪違文	砂粒含む N4/0 灰色	硬質 二次的被熱で変色	5区	創建期 整地層
瓦81	平瓦	端面 円形内に「木」の文字か	砂粒・小礫少量含む N4/0 灰色	硬質	8区	表土掘削

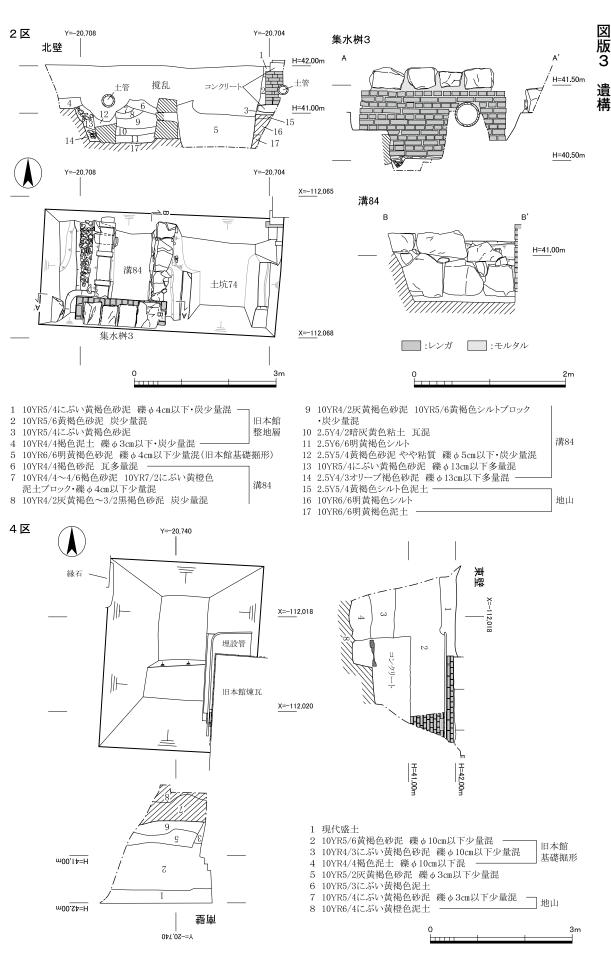
番号	種 類	刻印・線刻の箇所と内容	胎土·色調	焼成	調査区	遺構
瓦82	丸瓦	凸面 円形の圏線に点3つ	砂粒含む N3/0 暗灰色	硬質	8区	溝7
瓦83	大仏丸瓦	凸面 円形内に点5つ	砂粒・小礫少量含む N6/0 灰色	硬質	8区	溝7
瓦84	大仏平瓦	端面 九曜	砂粒・小礫含む N3/0 暗灰色	硬質	7区	溝7
瓦85	大仏平瓦	端面 大型の九曜	砂粒・小礫含む N3/0 暗灰色	硬質 二次的被熱で変色	6区	溝7
瓦86	丸瓦	連結面 円形内中心に凸線、片側に点	砂粒少量含む 10YR6/2 灰黄褐色	硬質 二次的被熱で変色	8区	溝7
瓦87	大仏平瓦	端面 円形内中心に点、片側に凸線	砂粒・小礫・礫多量含む N4/0 灰色	硬質	8区	溝7
瓦88	大仏平瓦	端面 円形内に不明、Kと左右反転したKに似る	砂粒多量含む 7.5YR5/1 褐灰色	硬質 二次的被熱で変色	7区	溝7
瓦89	大仏平瓦	端面 円形内に凸線で二本線	砂粒・小礫少量含む 10YR6/1 褐灰色	硬質 二次的被熱で変色	6区	溝7
瓦90	平瓦	端面 円形内に二本線	砂粒・小礫・礫多量含む N4/0 灰色	硬質	11区	溝40
瓦91	平瓦	端面 凹線で「三」の文字	砂粒・礫含む N2/0 黒色	硬質 二次的被熱で変色	8区	溝24
瓦92	大仏丸瓦	連結面 凹線で三本線	砂粒・小礫少量含む 10YR7/2 にぶい黄橙色	硬質 二次的被熱で変色	5区	溝7
瓦93	大仏丸瓦	凸面 円形内に凸線で「キ」に似た刻印	砂粒多量・礫含む 7.5YR8/6 浅黄橙色	硬質 二次的被熱で変色か	8区	溝7
瓦94	大仏丸瓦	玉縁凸面 円形内に格子、中心に点	砂粒含む 7.5YR6/4 にぶい橙色	硬質 二次的被熱で変色	6区	溝7
瓦95	大仏軒平瓦	周縁 円形内に斜め格子、中心に不明	砂粒・小礫含む 10YR7/3 にぶい黄橙色	硬質 二次的被熱で変色	8区	溝7
瓦96	大仏平瓦	凹面 円形内に「大工」の文字	砂粒・小礫多量含む N5/0 灰色	硬質	5区	創建期 整地層
瓦97	平瓦	端面 円形内に「大工」の文字	砂粒・小礫含む N3/0 暗灰色	硬質	5区	近代 整地層
瓦98	平瓦	端面 円形内に「大工」の文字	砂粒・小礫多量含む N4/0 灰色	硬質	11区	溝40
瓦99	大仏軒平瓦	凹面 円形の圏線に「太」の文字	砂粒含む 5YR5/2 灰褐色	硬質 二次的被熱で変色	7区	溝7
瓦100	丸瓦	連結面 円形内に「太」の文字	砂粒含む N4/0 灰色	硬質	11区	溝40
瓦101	平瓦	端面 円形内に「太」の文字	砂粒・小礫含む 7.5YR5/2 灰褐色	硬質 二次的被熱で変色	5区	溝7
瓦102	大仏平瓦	凹面 三角形内に「大」の文字	砂粒・礫少量含む N4/0 灰色	硬質	11区	溝40
瓦103	大仏丸瓦	凸面 円形内に「吉」の文字	砂粒・小礫多量含む N5/0 灰色	硬質	13区	攪乱
瓦104	平瓦	端面 円形の圏線内に「吉」の文字	砂粒・礫少量含む N4/0 灰色	硬質 二次的被熱で変色	6区	溝7
瓦105	大仏丸瓦	凸面 菱形内に凸線の縦長方形	砂粒少量含む 10YR8/2 灰白色	硬質	6区	溝7
瓦106	丸瓦	凸面 たわみのある五角形の圏線に丸	砂粒・小礫少量含む N4/0 灰色	硬質 二次的被熱で変色	5区	溝7
瓦107	大仏丸瓦	凸面 六角形の圏線に凸線で不明	砂粒・礫少量含む N4/0 灰色	硬質 二次的被熱で変色	7区	溝7
瓦108	大仏平瓦	端面 六角形の圏線に横二本線	砂粒・小礫少量含む 7.5YR7/6 橙色	硬質 二次的被熱で変色	6区	溝7
瓦109	大仏丸瓦	連結面 長方形内に凸線4本	砂粒含む N5/0 灰色	硬質 二次的被熱で変色	7区	溝7
瓦110	大仏平瓦	凸面 四角形の圏線に凸線の斜線3本か	砂粒含む 7.5YR7/6 橙色	硬質 二次的被熱で変色	7区	溝7

番号	種 類	刻印・線刻の箇所と内容	胎土·色調	焼成	調査区	遺構
瓦111	平瓦	端面 円形内に梵字か	砂粒含む精良な土 N3/0 暗灰色	硬質	7区	近代 整地層
瓦112	大仏丸瓦	玉縁凸面 三角形内に「十」の文字	砂粒少量含む N6/0 灰色	硬質 二次的被熱で変色	8区	溝7
瓦113	大仏丸瓦	凸面 分銅文	砂粒・小礫少量含む N4/0 灰色	硬質 二次的被熱で変色	8区	溝7
瓦114	平瓦	端面 分銅形の圏線に点2つ	砂粒・小礫・礫含む 10YR4/1 褐灰色	硬質 二次的被熱で変色	6区	溝7
瓦115	大仏平瓦	端面 円形内に一つ巴、頭部に点	砂粒含む N4/0 灰色	硬質 二次的被熱で変色	7区	溝7
瓦116	大仏平瓦	端面 三つ巴	砂粒少量含む N5/0 灰色	硬質 二次的被熱で変色	6区	溝7
瓦117	大仏平瓦	凹面 不明	砂粒含む N3/0 暗灰色	硬質	5区	創建期 整地層
瓦118	大仏平瓦	端面 円形内に「上」の文字	砂粒・小礫多量含む N4/0 灰色	硬質 二次的被熱で変色	8区	溝7
瓦119	大仏丸瓦	玉緑凸面 円形内に「上」の文字	砂粒・小礫多量含む N3/0 暗灰色	硬質 二次的被熱で変色	7区	溝7
瓦120	大仏丸瓦	凸面 円形内に「上」の文字、左部に点	砂粒・小礫多量含む N4/0 灰色	硬質 二次的被熱で変色	8区	溝7
瓦121	大仏丸瓦	玉緑凸面 円形内に「山」の文字	砂粒含む N3/0 暗灰色	硬質 二次的被熱で変色	6区	溝7
瓦122	丸瓦	凸面 縦長の楕円に「極」の文字	砂粒含む N4/0 灰色	硬質	7区	溝49
瓦123	平瓦	端面 円に「極」の文字	砂粒含む N4/0 灰色	硬質	8区	溝7
瓦124	平瓦	端面 円形に不明	砂粒含む N4/0 灰色	硬質	6区	溝7
瓦125	大仏平瓦	端面 円形の圏線に凸線で十字	砂粒含む精良な土 N3/0 暗灰色	硬質 二次的被熱で変色	8区	溝7
瓦126	大仏丸瓦	凸面 雲形の圏線、左部に途切れあり	砂粒・小礫含む 10YR8/4 浅黄橙色	硬質 二次的被熱で変色	6区	溝7
瓦127	平瓦	雲形の圏線端面	砂粒・小礫少量含む 5YR7/8 橙色	硬質 二次的被熱で変色	5区	土坑6
瓦128	大仏丸瓦	連結面と玉縁凸面の2箇所 雲形の圏線に「大」の 文字	砂粒含む 10YR8/2 灰白色	硬質 二次的被熱で変色	6区	溝7
瓦129	大仏丸瓦	凸面 ()に似た刻印	砂粒多量・礫含む N6/0 灰色	硬質 二次的被熱で変色	5区	溝7
瓦130	大仏平瓦	端面()に似るが内側は平行	砂粒・小礫多量含む 7.5YR6/6 橙色	硬質 二次的被熱で変色	5区	溝7
瓦131	平瓦	端面 ・)	砂粒含む N5/0 灰色	硬質	7区	溝7
瓦132	大仏平瓦	端面 円形内に凸線の菱形に点	砂粒多量含む 7.5YR8/6 浅黄橙色	硬質 二次的被熱で変色	5区	土坑6
瓦133	平瓦	端面 四角形の圏線に不明	砂粒・小礫含む N4/0 灰色	硬質 二次的被熱で変色	8区	溝7
瓦134	大仏丸瓦	凸面 円形内に三角形か	砂粒·礫少量含む 7.5YR8/6 浅黄橙色	硬質 二次的被熱で変色か	5区	溝7
瓦135	大仏丸瓦	連結面 三角形の凹	砂粒少量含む N5/0 灰色	硬質	7区	溝7
瓦136	大仏丸瓦	連結面 縦長の五角形に凸線で不明か	砂粒含む精良な土 N6/0 灰色	硬質 二次的被熱で変色	5区	溝7
瓦137	大仏平瓦	端面 縦長楕円形の圏線に不明	砂粒含む 2.5Y5/1 黄灰色	硬質 二次的被熱で変色	7区	溝7
瓦138	平瓦	端面 扇形内に「や」の文字	砂粒少量含む精良な土 N4/0 灰色	硬質 二次的被熱で変色	6区	溝7
瓦139	大仏平瓦	端面 三角形の圏線に不明	砂粒・小礫多量含む N4/0 灰色	硬質 二次的被熱で変色か	5区	創建期 整地層

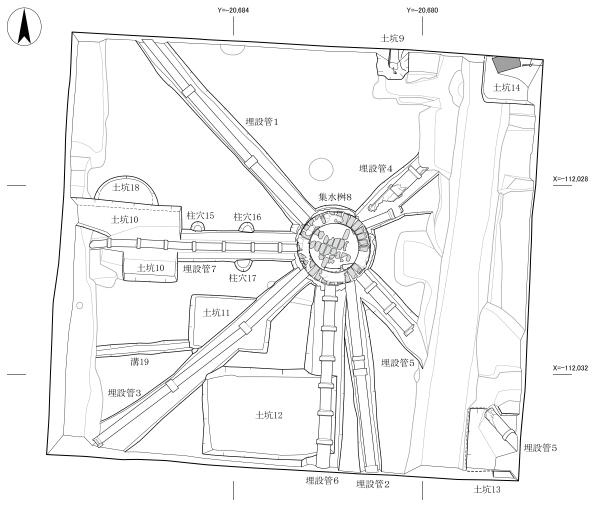
番号	種 類	刻印・線刻の箇所と内容	胎土·色調	焼 成	調査区	遺構
瓦140	丸瓦	凸面 円形の圏線に「一」の文字	砂粒含む N5/0 灰色	硬質	5区	溝9
瓦141	丸瓦	凸面 円形の圏線に「一」の文字	砂粒含む N5/0 灰色	硬質	5区	溝9
瓦142	大仏平瓦	端面 円形の圏線に「一」の文字	砂粒含む 10YR6/2 灰黄褐色	硬質	7区	溝7
瓦143	大仏平瓦	端面 円形の圏線に「一」の文字	砂粒多量含む 10YR5/1 褐灰色	硬質 二次的被熱で変色	8区	溝7
瓦144	平瓦	端面 円形の圏線に「一」の文字	砂粒含む N4/0 灰色	硬質	7区	溝7
瓦145	大仏平瓦	端面 円形の圏線に「一」の文字	砂粒多量含む N5/0 灰色	硬質	8区	溝7
瓦146	平瓦	端面 円形の圏線に「一」の文字	砂粒多量・礫含む N4/0 灰色	硬質 二次的被熱で変色	6区	溝7
瓦147	丸瓦	凸面 円形の圏線に「一」の文字、ズレあり	砂粒含む N6/0 灰色	硬質 二次的被熱で変色	6区	溝7
瓦148	丸瓦	凸面 円形の圏線に十字	砂粒・小礫多量含む N4/0 灰色	硬質	7区	溝7
瓦149	丸瓦	凸面 井桁文	砂粒含む N5/0 灰色	硬質 二次的被熱で変色	6区	溝7
瓦150	鳥衾	「慶長十七年五月□/御大□□□□与三郎□/住播州□西之郡/□□住人藤原朝臣□」線刻	砂粒多量・礫少量含む N4/0 灰色	硬質	5区	土坑6
瓦151	平瓦	凹面 □久?」線刻	砂粒含む・小礫少量含む 10YR7/4 にぶい黄橙色	硬質 二次的被熱で変色	8区	溝7
瓦152	平瓦	凸面 不明 線刻	砂粒少量含む精良な土 N4/0 灰色	硬質 二次的被熱で変色か	6区	溝7
瓦153	大仏平瓦	凸面「六」の文字 線刻	砂粒・小礫少量含む精良な土 10YR6/3 にぶい黄橙色	硬質 二次的被熱で変色	7区	溝7
瓦154	大仏平瓦	凸面 不明 線刻	砂粒・小礫少量含む精良な土 10YR7/4 にぶい黄橙色	硬質 二次的被熱で変色	5区	土坑6
瓦155	丸瓦	凸面と玉縁凸面の2箇所 三角形 線刻	砂粒多量含む N4/0 灰色	硬質 二次的被熱で変色	5区	溝7
瓦156	丸瓦	凸面 「正徳元年卯八月/御瓦師寺嶋吉左エ門」 印	砂粒含む N5/0 灰色	硬質	6区	溝7
瓦157	丸瓦	凸面「山城國京大佛瓦師/五左衛門作」印	砂粒多量・小礫含む N4/0 灰色	硬質 二次的被熱で変色	8区	溝7
瓦158	大仏平瓦	凸面 縦長長方形の圏線に「吉春藤□門」印	砂粒多量・小礫・礫少量含む N5/0 灰色	硬質	7区	溝7
瓦159	大仏平瓦	凸面 □清?」印	砂粒含む・小礫少量含む 10YR8/2 灰白色	硬質	7区	溝7
瓦160	平瓦	凹面「山に上州」「御瓦所/瓦屋徳三郎」印 端面「□瓦徳」印	砂粒含む N4/0 灰色	硬質	5区	溝1
瓦161	平瓦	凹面「四角内に一 江州」「八幡多賀/御瓦所/ 瓦屋平四郎」 印	砂粒含む N4/0 灰色	硬質	5区	攪乱
瓦162	平瓦	凹面 「三角 州」「御瓦製造所/垣内平兵衛」 印	砂粒含む N4/0 灰色	硬質	12区	攪乱
瓦163	道具瓦	「三角 州」「□□□□/垣内平兵衛」 印	砂粒多量含む N4/0 灰色	硬質	5区	溝1
瓦164	平瓦	凹面「□幡宮∕□」印	砂粒含む N4/0 灰色	硬質	5区	溝1

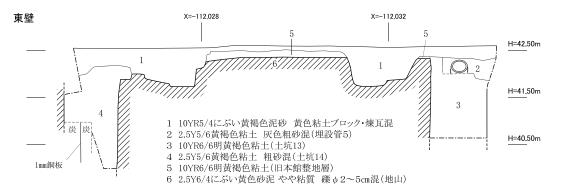
図 版

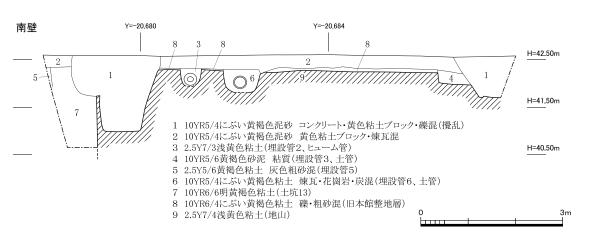


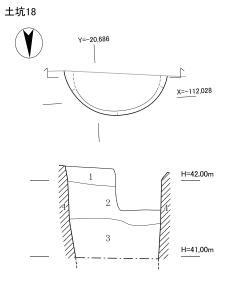


2 区実測図 (1:80)、集水桝3・溝84立面図 (1:50)、4 区実測図 (1:80)

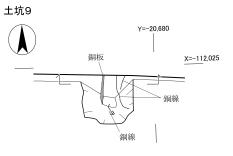


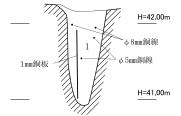




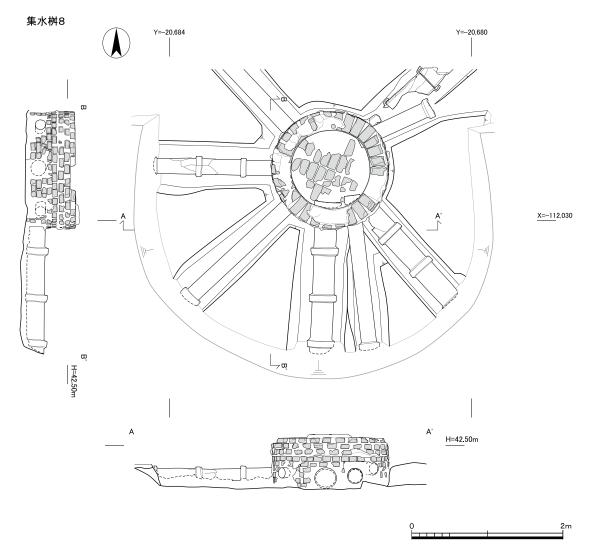


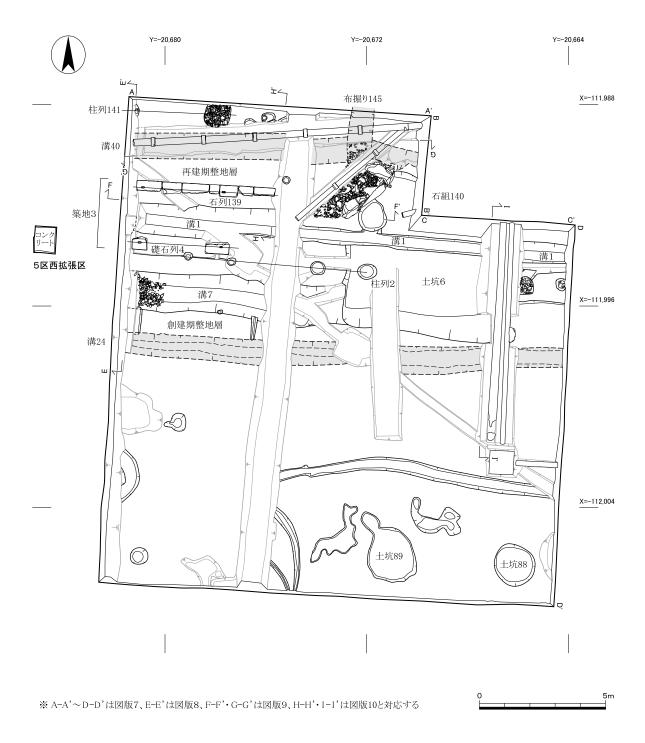
- 1 10YR5/8黄褐色シルト 粘土・砂混
- 2 2.5Y5/6黄褐色粘土 φ1~3cm礫混 3 10YR6/8明黄褐色粘土 粗砂・礫混 4 2.5Y7/4浅黄色粘土 砂混(地山)

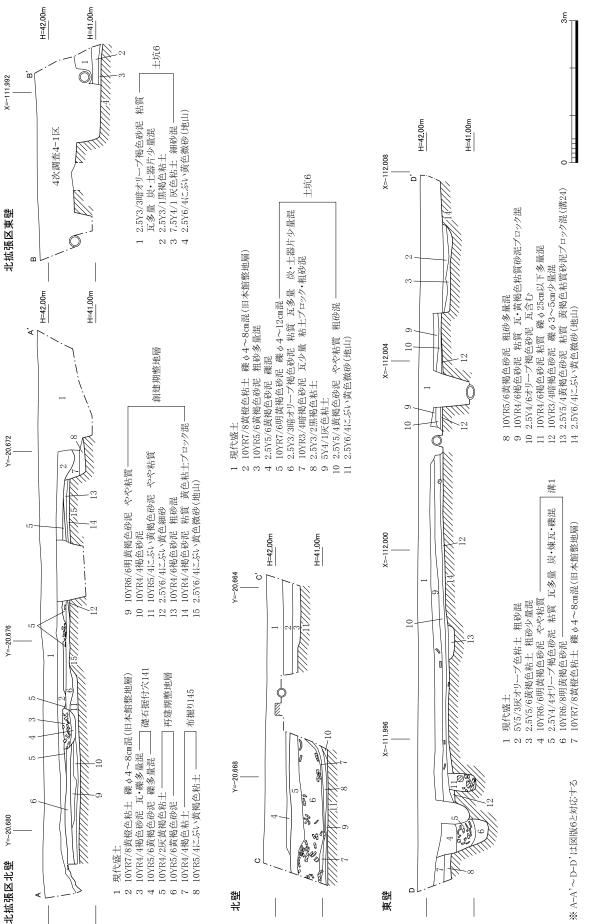




1 2.5Y6/8明黄褐色砂泥 レンガ・コンクリート・ 瓦・釘・ガラス・スレート・ビニール混



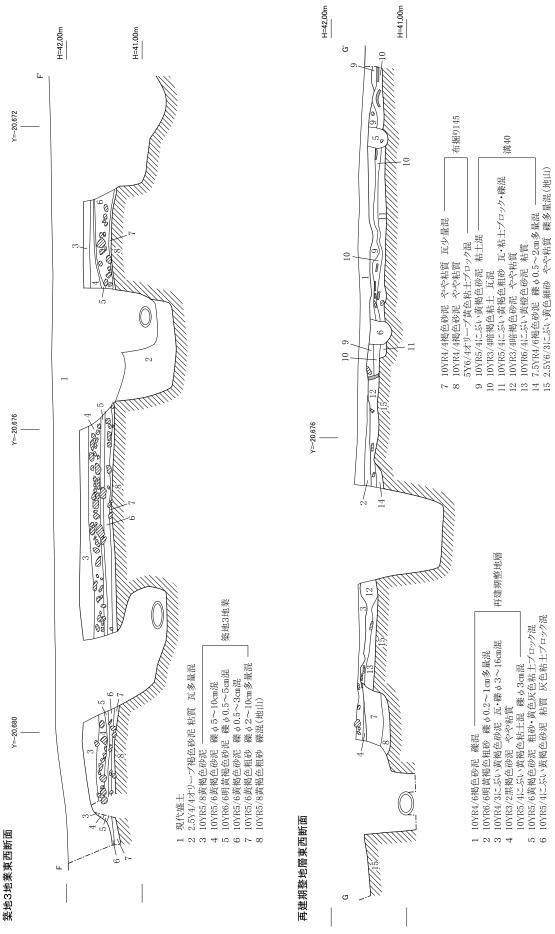




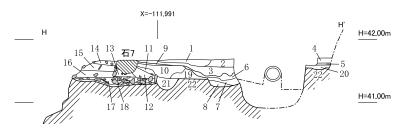
5区北壁・東壁断面図(1:80)

5区西端南北斯面

※ F-F'・G-G'は図版6と対応する



5 区築地 3 地業東西断面図、再建期整地層東西断面図(1:50)



- 1 10YR6/4にぶい黄褐色粗砂・
- 2 10YR7/6明黄褐色粗砂 礫混
- 3 10YR6/6明黄褐色粗砂 礫φ0.2~1cm多量混
- 4 10YR4/2灰黄褐色粘土
- 5 10YR5/6黄褐色砂泥 -
- 6 10YR3/4暗褐色砂泥 やや粘質 -
- 7 7.5YR4/6褐色砂泥 $ф 0.5 \sim 2 cm 多量混$
- 8 10YR5/4にぶい黄褐色細砂
- 9 10YR7/4にぶい黄橙色粗砂(創建期化粧土)
- 10 10YR5/6黄褐色粗砂 礫φ0.5~2.5cm多量混
- 11 10YR7/6明黄褐色砂泥 やや粘質

築地3地業

溝1

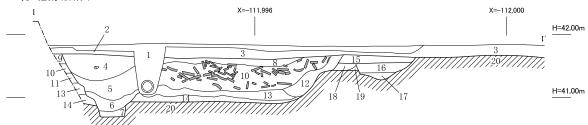
土坑6

溝40

再建期整地層

- 12 10YR6/4にぶい黄橙色砂泥 礫φ2~4cm混
- 13 10YR6/6明黄褐色粗砂 礫 ϕ 2~6cm混
- 14 10YR4/6褐色砂泥 瓦含む 礫φ0.5~5cm混 (築地塀構築土)
- 15 10YR6/4にぶい黄橙色砂泥 瓦・礫 φ 0.5~3cm混
- 16 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥 礫 ϕ 0.2 \sim 3cm混
- 17 10YR6/4褐色粗砂 瓦含む 礫 φ 5~10cm多量混
- 10YR4/3にぶい黄褐色粗砂 やや粘質
- 19 10YR4/6褐色砂泥 やや粘質 -
- 20 2.5Y6/4にぶい黄色細砂 21~2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥 やや粘質 礫 ϕ 0.5 \sim 3cm混(柱穴144)
- 22 2.5Y6/4にぶい黄色細砂 やや粘質(地山)

土坑6他南北断面



- 1 現代盛土
- 2 2.5Y5/6黄褐色砂泥 礫混
- 3 2.5Y5/6黄褐色砂泥 炭・礫・明黄褐色粘土ブロック混
- 4 2.5Y4/6オリーブ褐色砂泥
- 黄褐色粘土ブロック・篠 φ 2~6cm混 5 2.5Y3/3暗オリーブ40を20では、φ 2~5cm礫少量混
- 6 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 やや粘質 瓦少量・灰オリーブ色粘土ブロック混
- 7 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥 粘質
- 8 2.5Y4/6オリーブ褐色砂泥 瓦少量・礫混
- 9 10YR7/6明黄褐色砂泥 φ4~12cm礫混

- 10 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥 粘質 瓦多量・炭・土器片少量混
- 11 10YR3/4暗褐色砂泥 瓦少量・粘土ブロック・粗砂混
- 12 2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥 粗砂・礫少量混
- 13 2.5Y3/2黒褐色粘土
- 14 2.5Y5/4黄褐色砂泥 やや粘質 粗砂混
- 15 2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥 礫混
- 16 10YR4/4褐色粘土 瓦少量·粗砂混
- 17 2.5Y5/6黄褐色シルト やや粘質
- 18 10YR4/6褐色砂泥 -
- 19 2.5Y5/6黄褐色砂泥 粘質-20 10Y6/2オリーブ灰色粘土 黄褐色砂泥混(地山)

| 創建期整地層

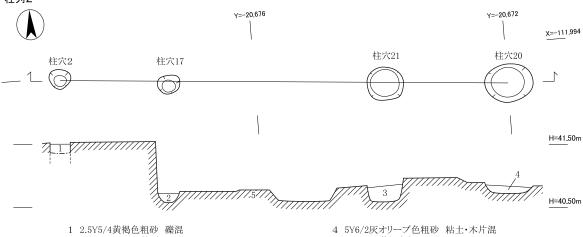
土坑6

溝24

築地3地業

創建期整地層

柱列2

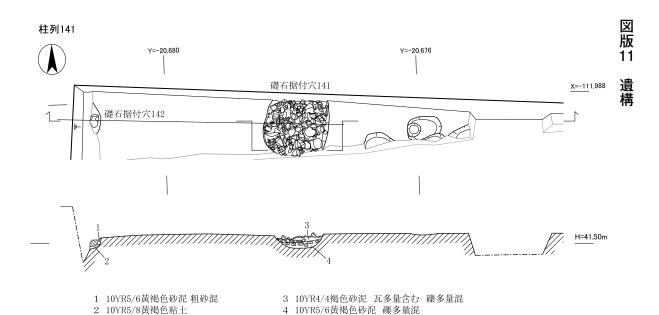


- 2 2.5Y4/6オリーブ褐色砂泥
- 3 10YR5/8黄褐色砂泥 礫φ4~8cm·木片混
- 5 10YR5/8黄褐色粗砂 礫混(地山)

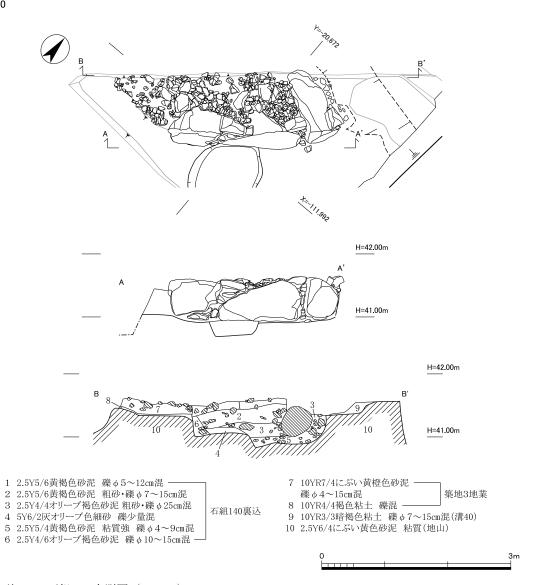
※ H-H'、I-I'は図版6と対応する

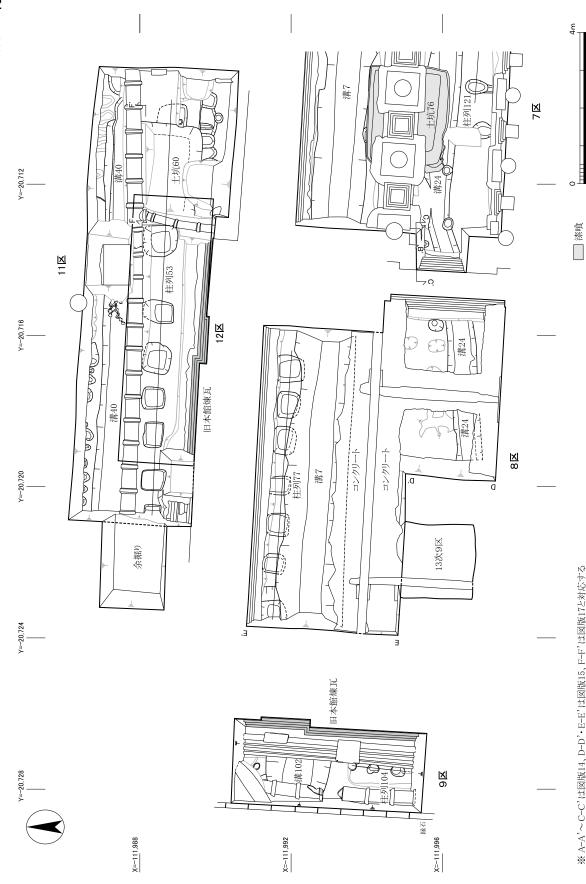


5区築地3地業南北断面図、土坑6他南北断面図、柱列2実測図(1:60)



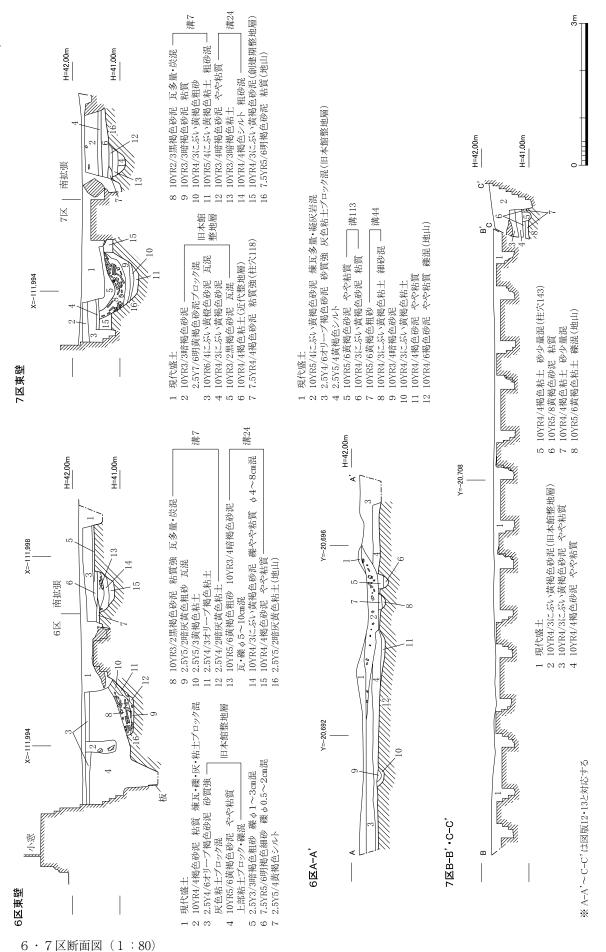
石組140





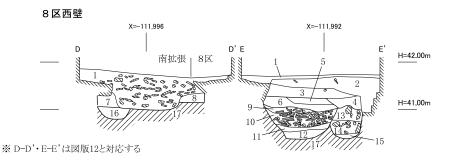
※ A-A'~C-C'は図版14、D-D'・E-E'は図版15、F-F'は図版17と対応する

6~13区平面図1 (1:100)



澅7

柱穴77



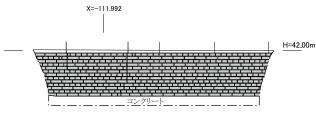
旧本館整地層

近代整地層

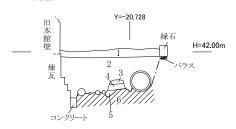
- 1 攪乱・現代盛土
- 2 2.5Y4/6オリーブ褐色砂泥 瓦·煉瓦少量・礫混 3 2.5Y4/6オリーブ褐色砂泥 やや粘質
- 礫φ5cm少量混
- 4 10YR4/4褐色砂泥 -
- 5 10YR5/8黄褐色砂泥 やや粘質 -
- 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥 やや粘質 瓦•炭少量混
- 7 2.5Y5/4黄褐色砂泥 粘質
- 8 2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥 粘質

- 9 2.5Y3/3暗オリーブ褐色細砂 瓦多量含む -10 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥 粘質
- 瓦·煉瓦多量混
- 11 2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘土
- 12 2.5Y4/3暗オリーブ褐色砂泥 粘質・砂質強-13 2.5Y4/4暗オリーブ褐色砂泥 礫 φ 5~15cm混
- 14 2.5Y6/4にぶい黄色砂泥 粘質 礫φ3~18cm混
- 15 2.5Y6/6明黄褐色 細砂 やや粘質
- 16 10YR4/4褐色砂泥 粘質 礫φ2~4cm混(溝24)
- 17 10YR5/8黄褐色砂泥 やや粘質(地山)

9区東壁

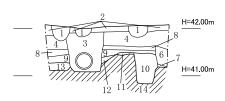


9区南壁

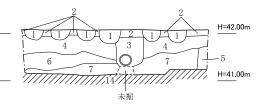


- 1 現代盛土
- 2 10YR3/3暗褐色砂泥(旧本館整地層)
- 3 10YR5/2灰黄褐色砂泥
- 4 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥
- 5 10YR5/6黄褐色砂泥 礫 φ 5cm以下少量混 6 10YR5/6黄褐色砂泥~シルト(地山)

10区東壁

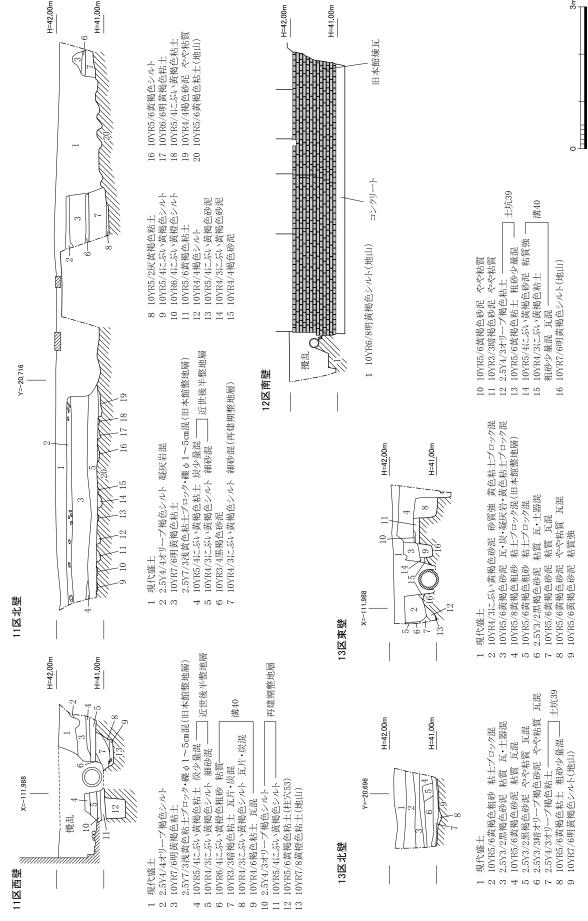


10区南壁

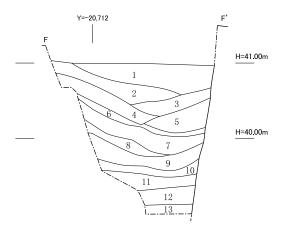


- 10YR3/1黒褐色粘質砂泥(植栽跡)
- 2 10YR3/3暗褐色砂泥 部分的に砕石等混(旧本館整地層)
- 3 10YR4/4褐色砂泥(土管掘形)
- 4 10YR5/6~10YR4/4褐色砂泥 礫φ3cm以下少量混
- 5 10YR6/4にぶい黄褐色砂泥 10YR4/2灰黄褐色粘土ブロック混
- 6 10YR6/6明黄褐色砂泥 礫φ8cm以下少量混
- 7 10YR6/4にぶい黄褐色砂泥 礫φ25cm以下·瓦片少量混
- 8 10YR3/2黒褐色粘質砂泥 礫φ2cm以下少量·炭極少量混
- 9 7.5YR4/4褐色砂泥 礫φ1cm以下·粗砂混
- 10 柱穴136(個別図参照)
- 11 2.5Y5/3黄褐色砂泥 礫φ1cm以下·粗砂混
- 12 10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルト(溝40)
- 13 10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルト 礫 φ 5cm混(土坑39)
- 14 10YR7/6明黄褐色シルト(地山)





11区土坑60



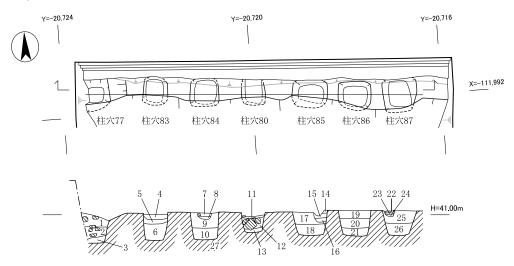
※ F-F'は図版12と対応する

- 1 10YR3/2黒褐色砂泥 粘質 黄色粘土ブロック混 2 7.5YR5/6明褐色砂泥 粘質 黄色粘土ブロック混
- 3 7.5YR3/1黒褐色粘土 黄色粘土ブロック混 4 10YR3/2黒褐色粘土 黄色粘土ブロック混
- 5 7.5YR5/6明褐色砂泥 粘質
- 6 7.5YR3/2黒褐色粘土 黄色粘土ブロック混
- 7 10YR5/6黄褐色粘土

- 8 2.5Y4/2暗灰黄色粘土 黄色粘土ブロック混
- 9 7.5YR5/6明褐色砂泥 粘質強
- 10 2.5Y5/2暗灰黄色粘土
- 11 2.5Y5/4黄褐色粘土 粗砂混
- 12 2.5Y5/4黄褐色粘土
- 13 2.5Y5/3黄褐色粘土



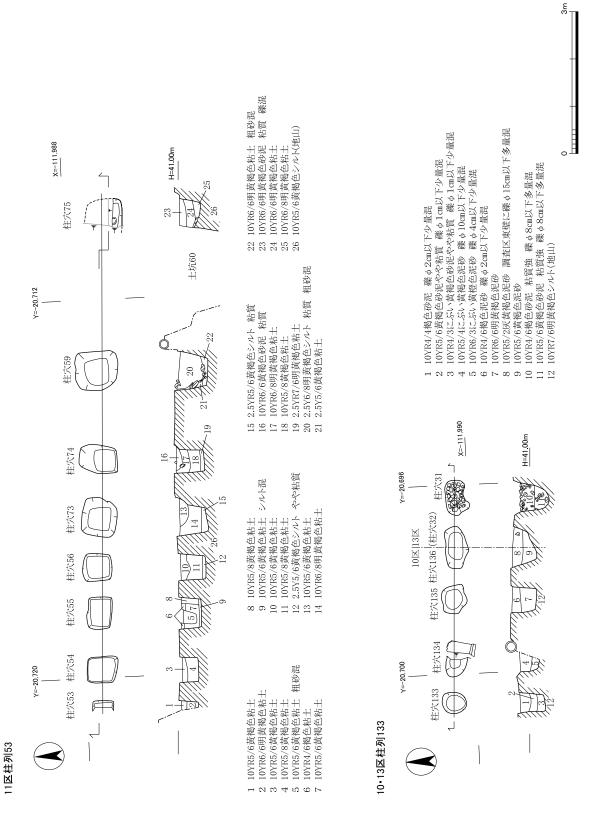
8区柱列77



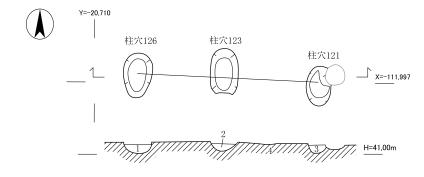
- 1~2.5Y4/4暗オリーブ褐色砂泥 礫 ϕ $5 \sim 15$ cm混 9~10YR6/6明黄褐色砂泥 粘質強
- 2 2.5Y6/4にぶい黄色砂泥 粘質 礫φ3~18cm混
- 3 2.5Y6/6明黄褐色 細砂 やや粘質 4 10YR4/4褐色砂泥 やや粘質 礫 φ 10cm混
- 5 10YR5/4にぶい黄褐色粘土
- 10YR5/8黄褐色粘土
- 10YR6/4にぶい黄橙色砂泥 粘質
- 炭・礫 φ 5~15cm混 8 10YR5/4にぶい黄褐色粘土
- 10 10YR5/8黄褐色砂泥 粘質
- 11 10YR5/4にぶい黄褐色粗砂 礫φ2~5cm混 20 10YR6/6明黄褐色砂泥
- 12 10YR4/4褐色砂泥 やや粘質 礫φ8~18cm混
- 13 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥
- 14 10YR4/6褐色砂泥 やや粘質 15 10YR4/4褐色砂泥 粘質 細砂混
- 16 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 粘質強
- 17 10YR5/4にぶい黄褐色粘土
- 18 10YR5/8黄褐色砂泥 粘質
- 19 10YR4/4褐色砂泥 やや粘質

- 21 10YR5/8黄褐色砂泥 粘質 22 10YR5/6黄褐色砂泥 礫φ8~13cm混
- 23 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥 粗砂混 24 2.5Y4/6オリーブ褐色砂泥 やや粘質
- 25 10YR4/6褐色砂泥 やや粘質 26 10YR5/8黄褐色砂泥 粘質
- 27 10YR4/6褐色粘土(地山)



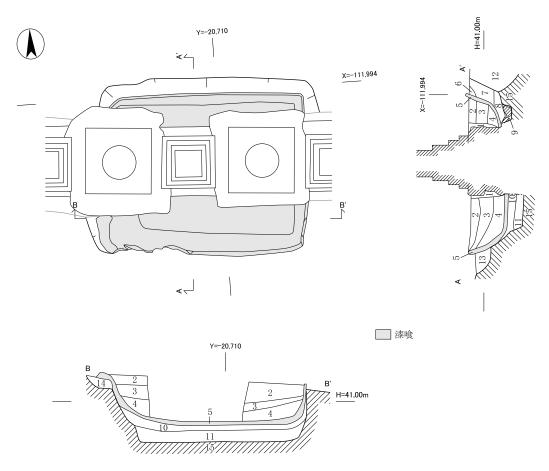


7区柱列121



- 1 10YR3/3暗褐色砂泥
- 2 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 粘質強 3 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 粘質強 炭混
- 4 7.5YR5/6明褐色粘土 粗砂混(地山)

7区土坑76

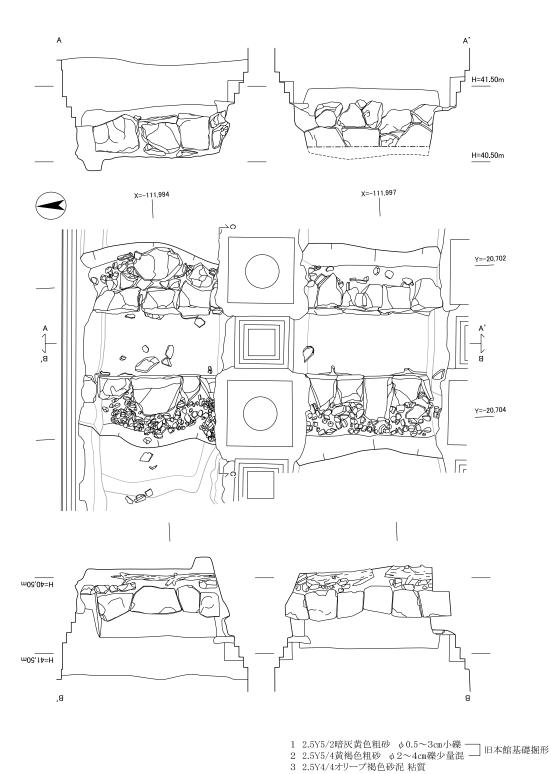


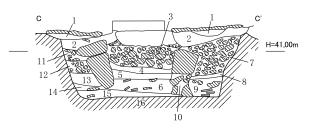
- 1 攪乱
- 2 10YR3/3暗褐色砂泥
- 3 10YR3/4暗褐色砂泥 粗砂混 4 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 下部粘質強
- 5 漆喰
- 6 2.5Y4/6オリーブ褐色粘土 粗砂混 7 10YR4/6褐色粘土 礫少量混 8 10YR4/4褐色粘土 瓦・粗砂混

- 9 10YR4/3にぶい黄褐色粘土 石・粗砂少量混 10 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 粘質強
- 11 10YR5/6黄褐色砂泥 粘質
- 12 10YR2/3黒褐色砂泥 瓦多量・炭混(溝7) 13 10YR3/4暗褐色砂泥 やや粘質(溝24) 14 10YR3/4暗褐色砂泥 やや粘質

- 15 10YR7/6明黄褐色粘土(地山)







φ6~14cm礫多量混(旧本館基礎栗石) 4 10YR4/6褐色砂泥 やや粘質

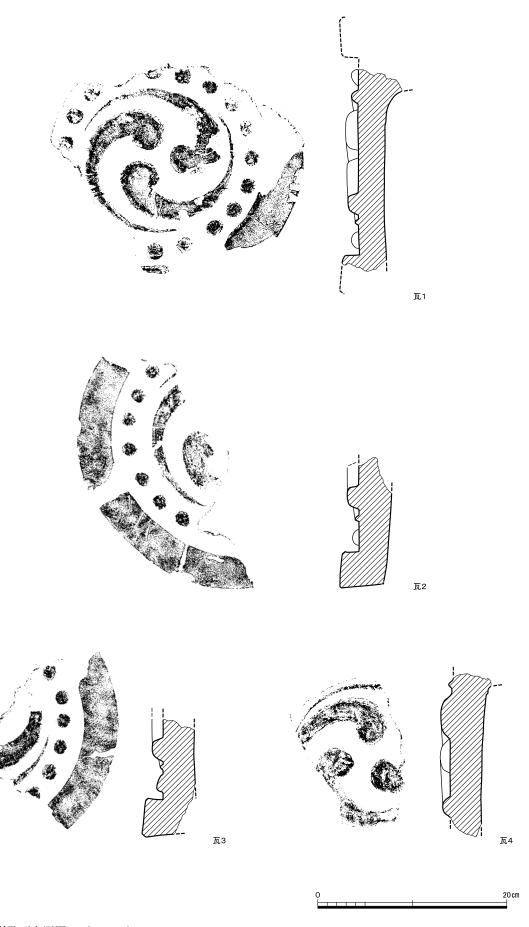
- 4 10YR4/6褐色砂泥 やや粘質
 5 2.5Y4/2昨灰黄色細砂
 6 2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥 やや粘質 瓦少量混
 7 10YR3/3暗褐色砂泥 粘土・礫 φ 5~12cm多量混
 8 10YR4/6褐色粘土
 9 10YR3/3暗褐色砂泥 粘質 瓦・礫 φ 19cm混
 10 10YR4/4褐色粗砂 胴木含む 礫 φ 10~20cm混
 11 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 砂質強 礫 φ 5~9cm混
 12 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥 やや粘質 礫 φ 7~10cm混
 13 10YR3/3暗褐色粗砂 瓦少量・黄色粘土ブロック混
 14 10YR4/4褐色粗砂 瓦少量・黄色粘土ブロック混
 15 10YR3/4暗褐色細砂
 16 10YR4/6褐色砂泥 粗砂混(地山)

溝49

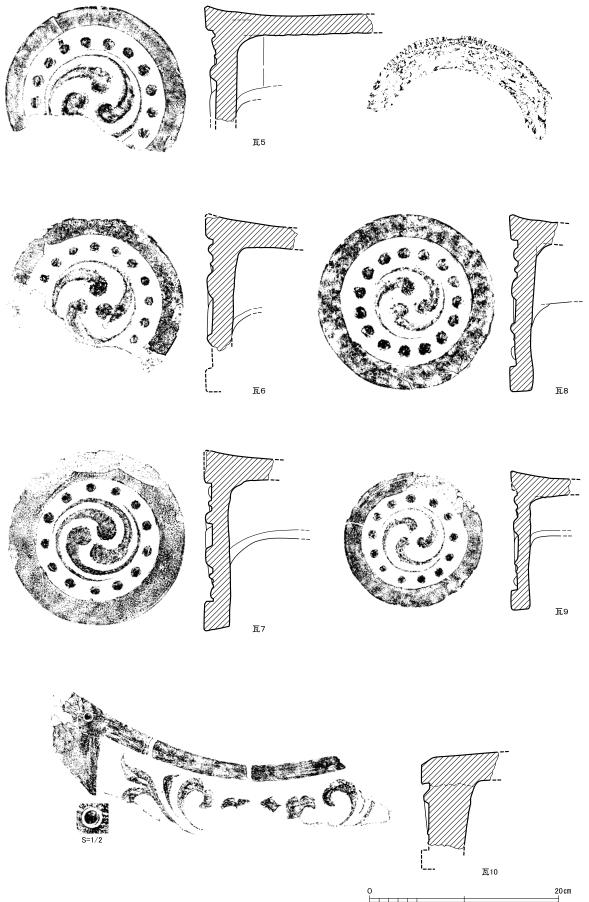
- 16 10YR4/6褐色砂泥 粗砂混(地山)

7 区溝49 実測図 (1:50)

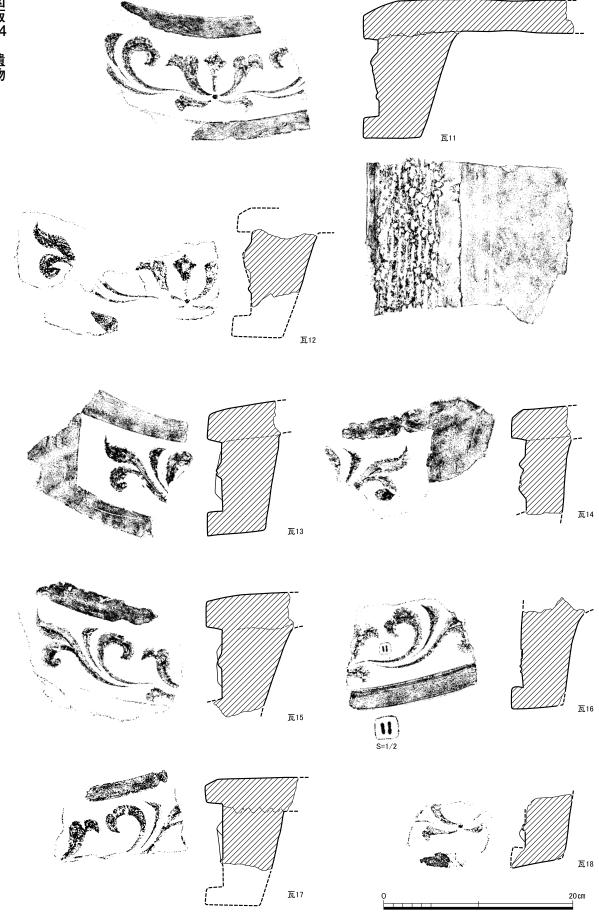
土器類実測図(1:4)



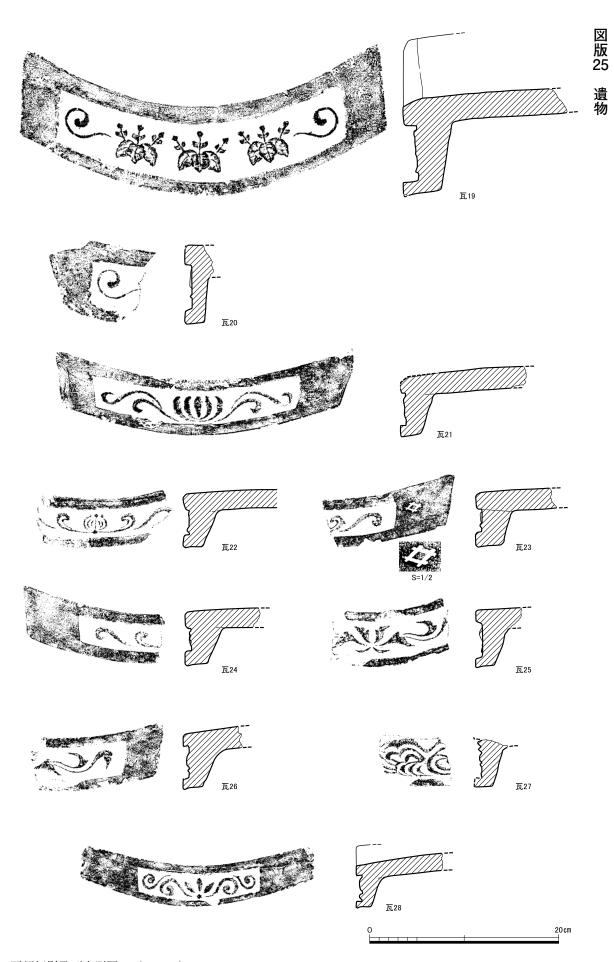
瓦類拓影及び実測図1 (1:4)



瓦類拓影及び実測図2(1:4)

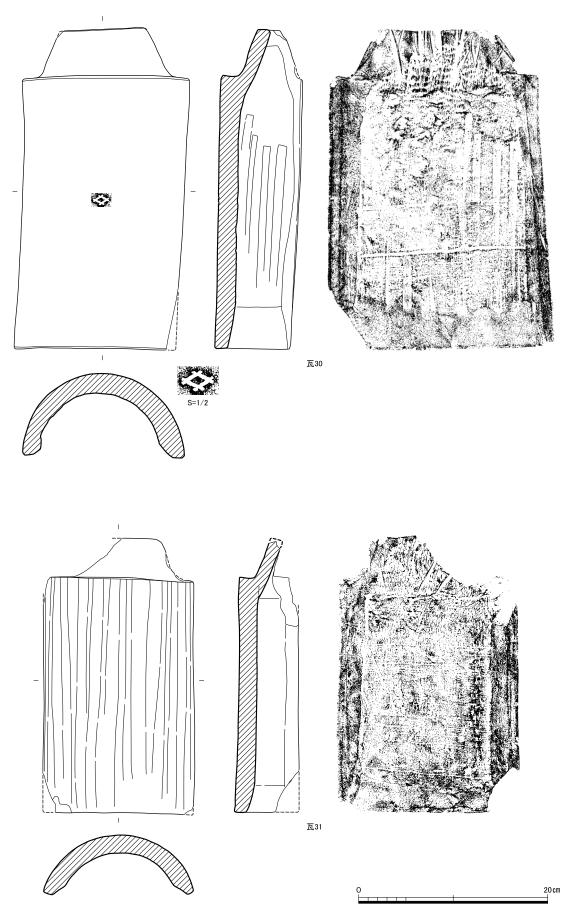


瓦類拓影及び実測図3 (1:4)

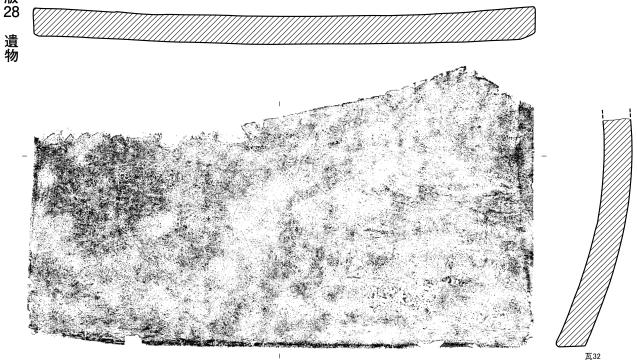


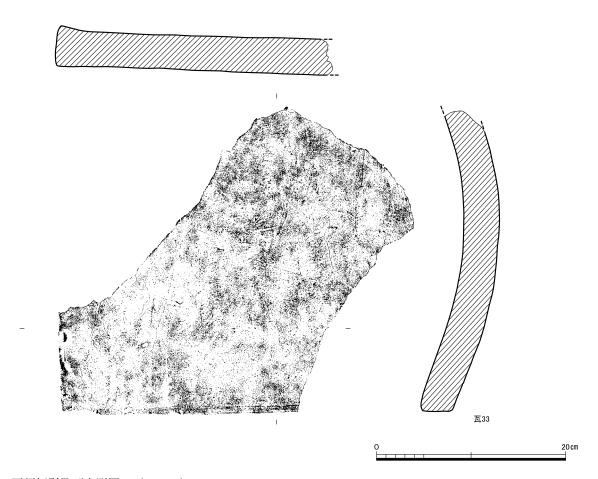
瓦類拓影及び実測図4(1:4)





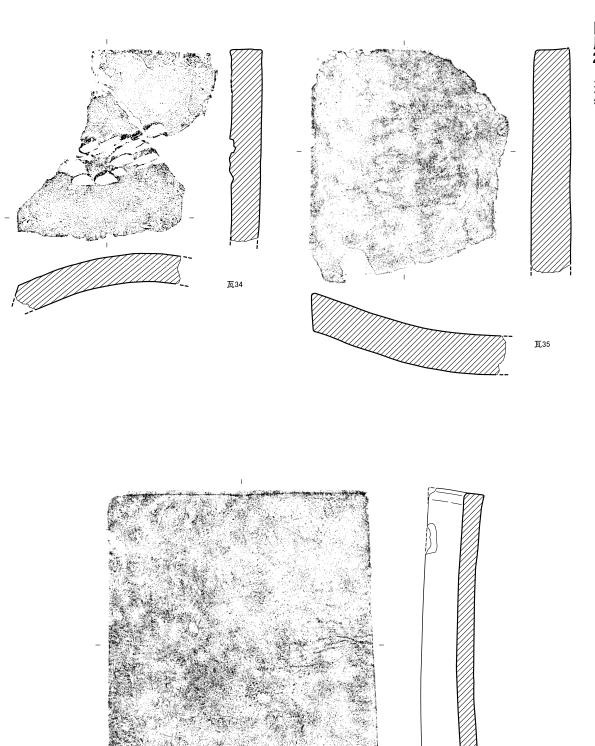
瓦類拓影及び実測図6 (1:4)

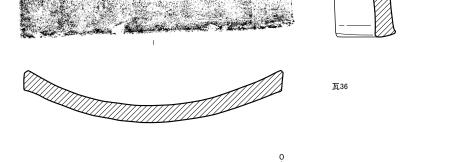


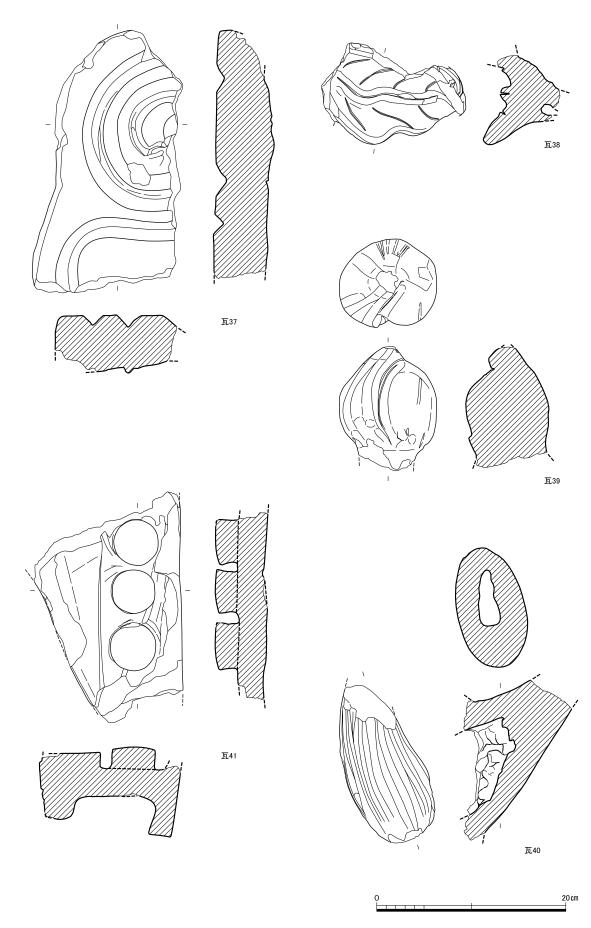


瓦類拓影及び実測図7 (1:4)

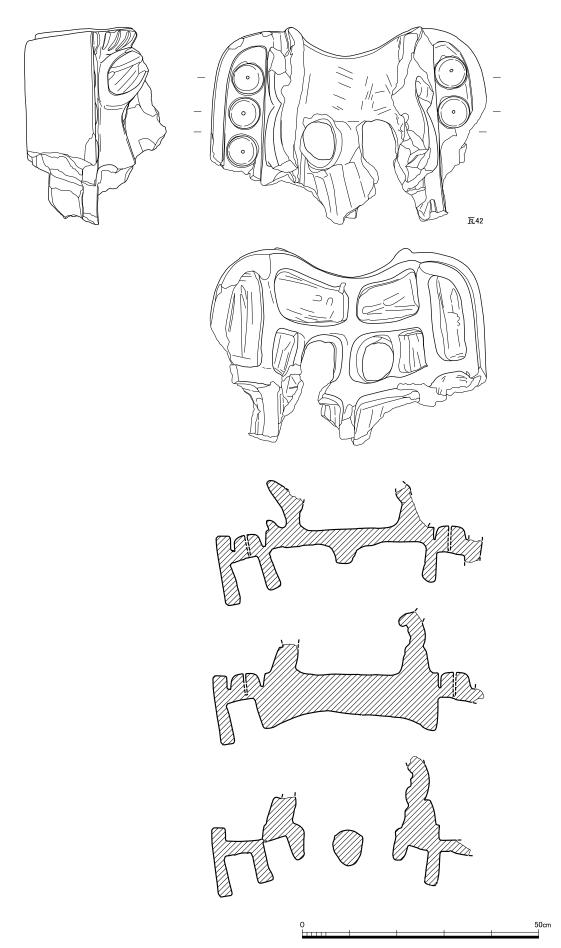
20 cm

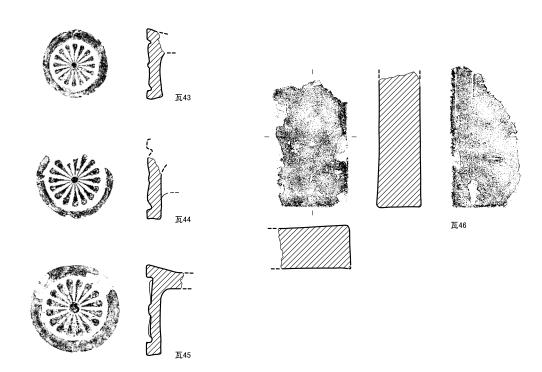


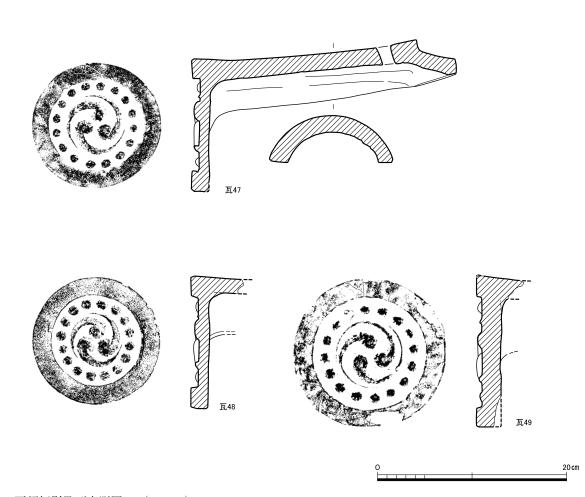


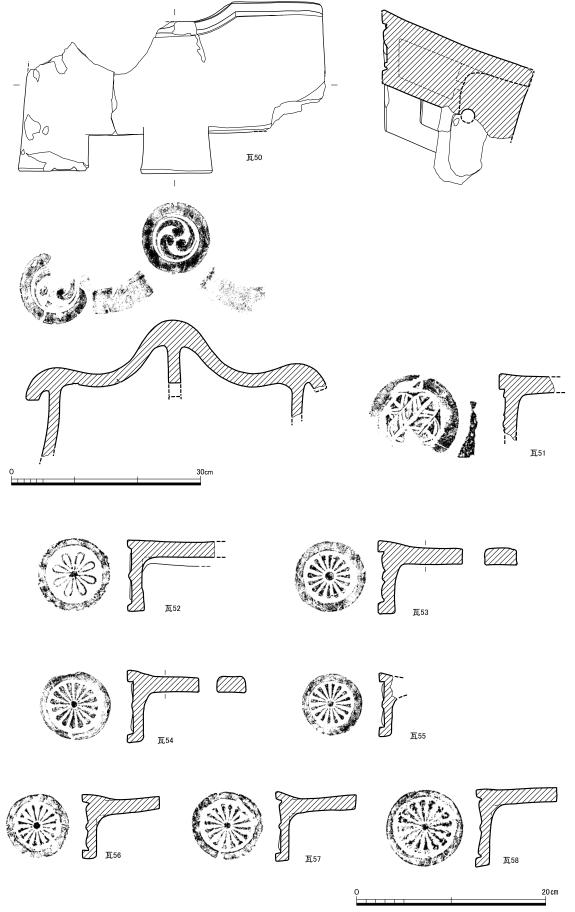


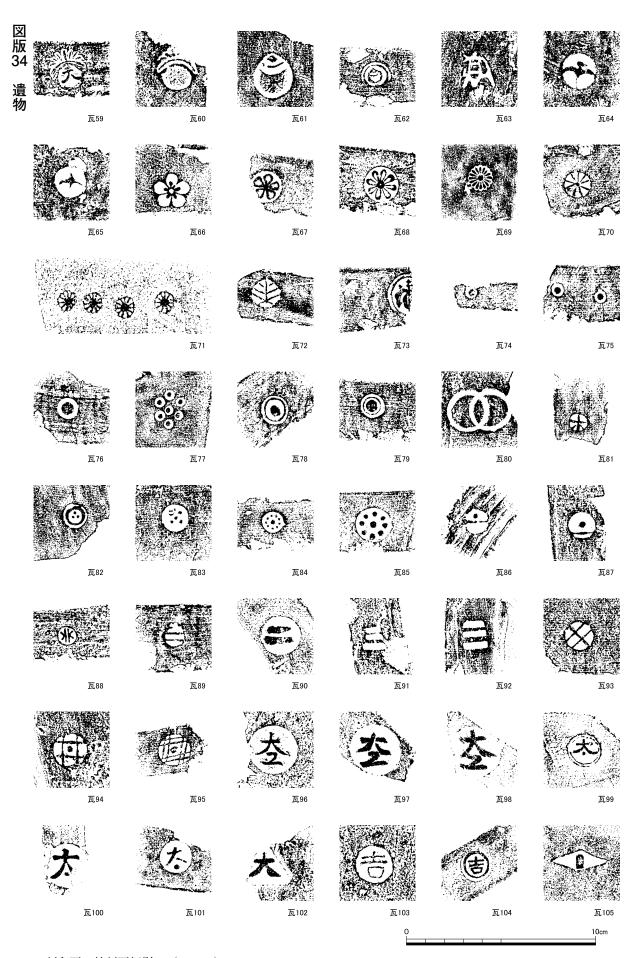
瓦類実測図9 (1:4)



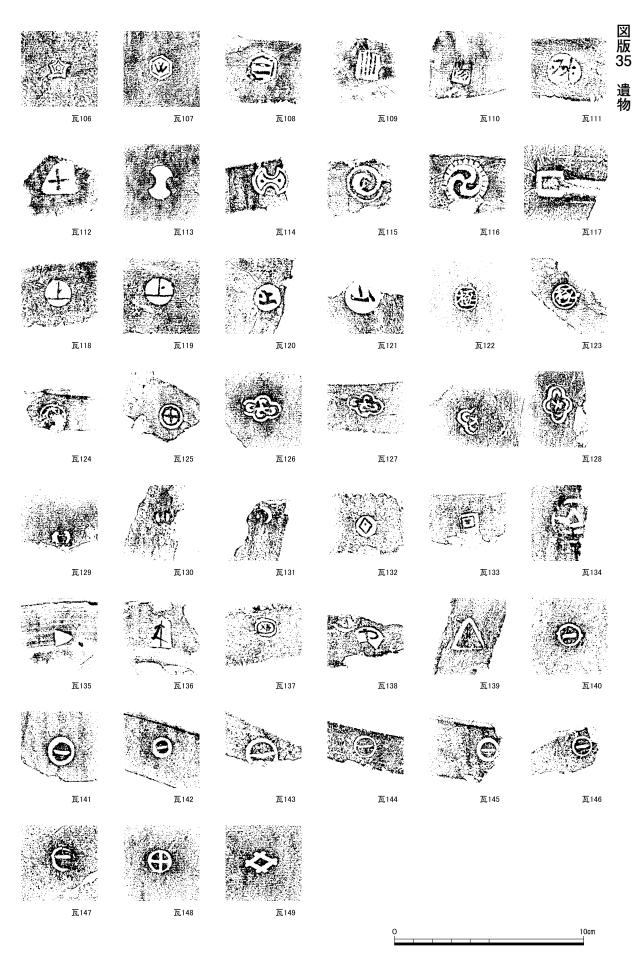




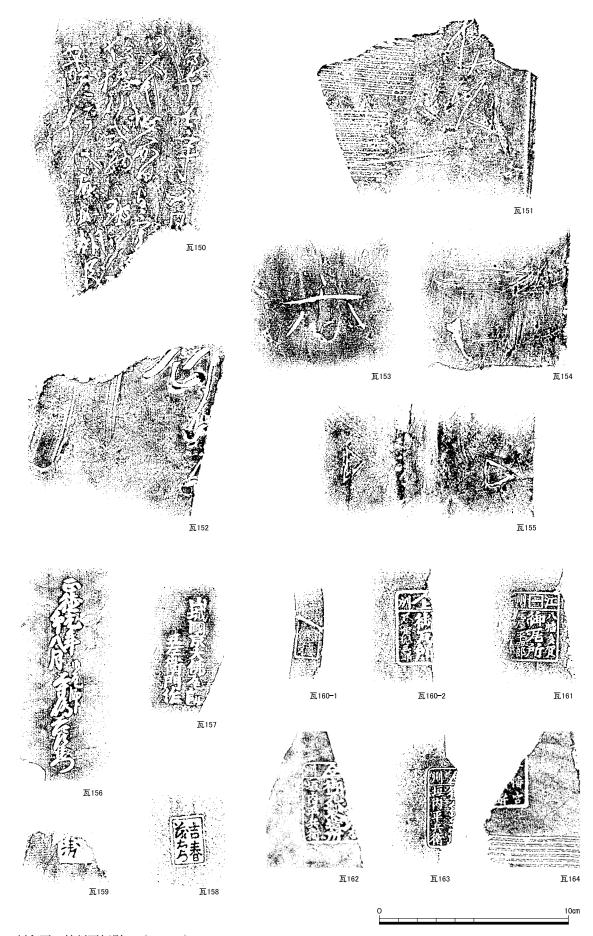




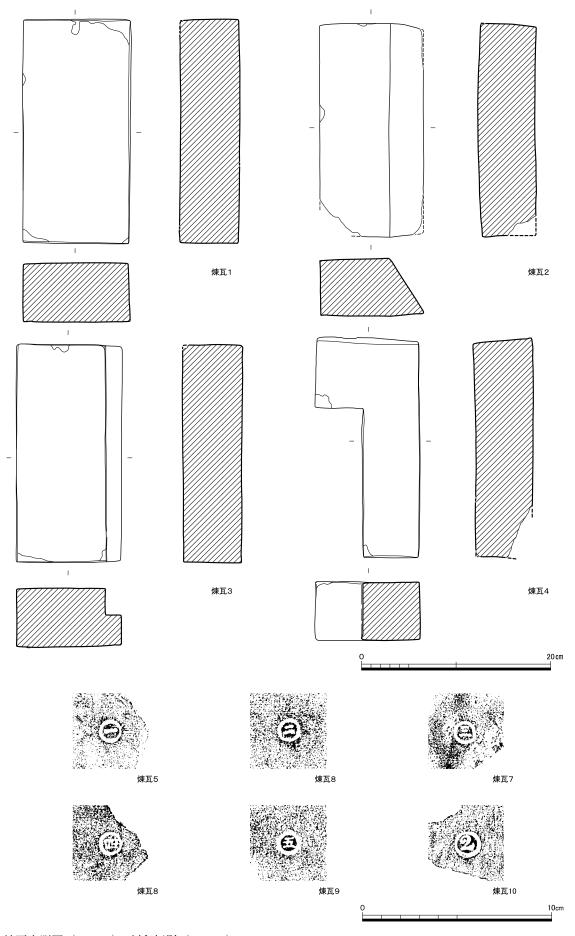
刻印瓦・線刻瓦拓影1 (1:2)



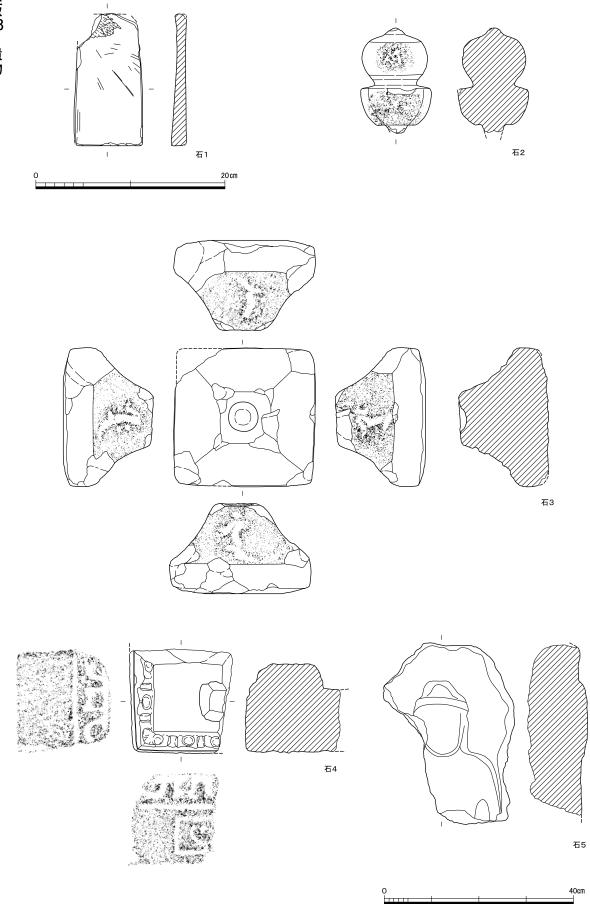
刻印瓦・線刻瓦拓影2 (1:2)



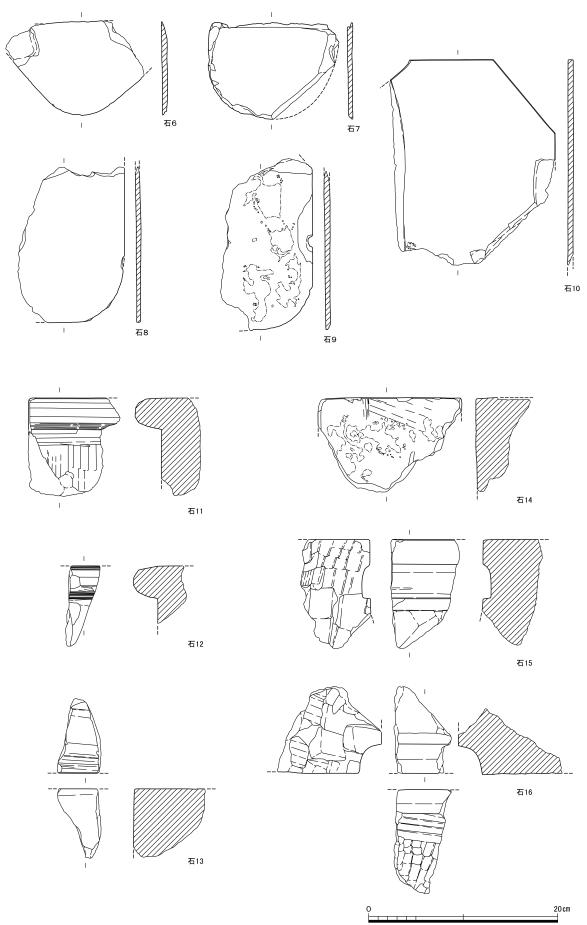
刻印瓦・線刻瓦拓影3 (1:2)



煉瓦実測図(1:4)、刻印拓影(1:2)



石製品実測図1 (1:8、石1のみ1:4)



石製品実測図2 (1:4)

石製品実測図3 (1:4、石18のみ1:6)



1 1区西半全景(北東から)

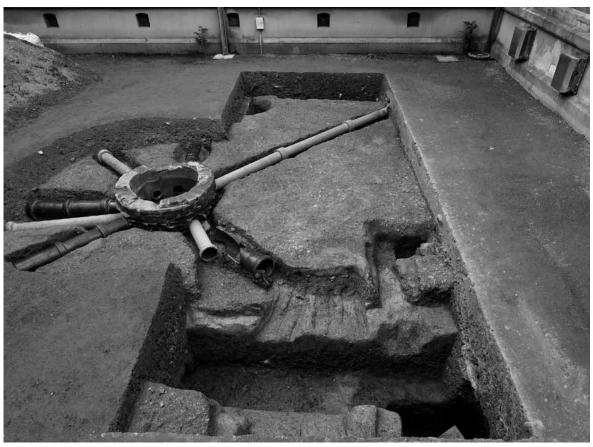


2 1区東半全景 (東から)

3 1区井戸65 (北から)



1 2区全景 (西から)



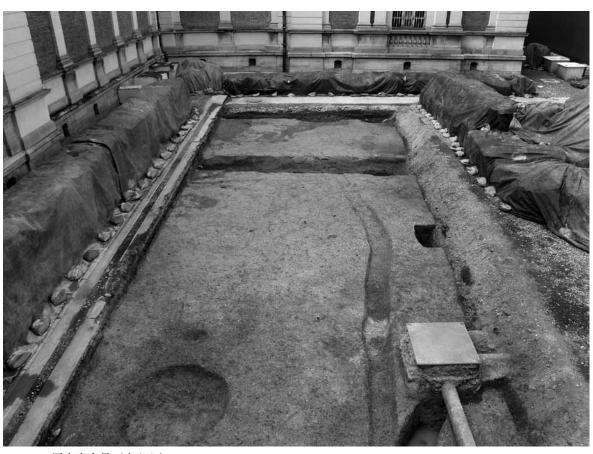
2 3区北半全景 (東から)





1 3区南半全景(北東から)

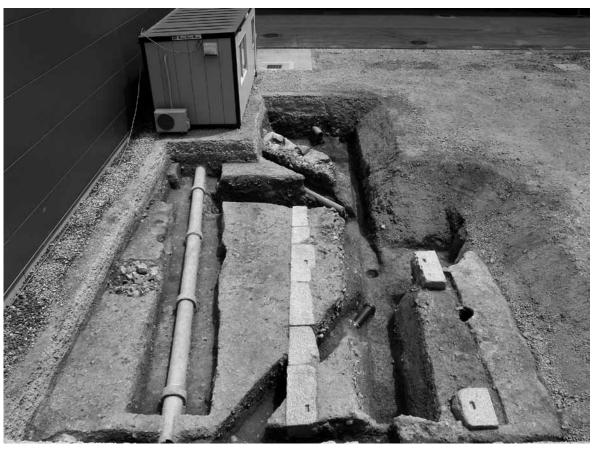
2 4区全景(北から)



3 5区南半全景(東から)



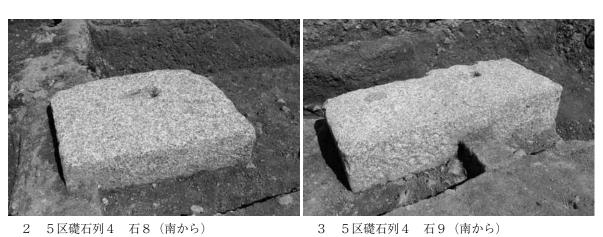
1 5区北拡張部全景(東南東から)



2 5区築地3 礎石列4・石列139 (西から)



5区築地3地業断面(東から)



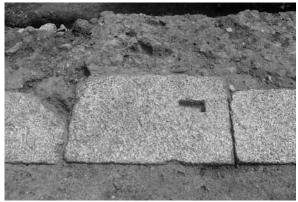
5区礎石列4 石8 (南から)

5区礎石列4 石8ホゾ穴(北から)

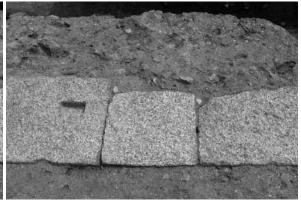
5 5区礎石列4 石9ホゾ穴(北から)



2 5区石列139 石6(北から)



3 5区石列139 石5 (北から)



4 5区石列139 石4(北から)



5 5区石列139 石3 (北から)



6 5区石列139 石2 (北から)



7 5区石列139 石1 (北から)



8 5区礎石列4 石9矢穴痕(北から)



1 5区石組140(北東から)

2 5区礎石据付穴141 (南東から)



3 5区溝7断面(東から)

5 5区土坑6土師器皿出土状況(西から)



1 6区北半溝7検出状況 (東から)



6区北半溝7完掘状況(東から) 2

3 6区南半溝24 (西から)





7区南東部溝24(西から)

7区南西部溝24・柱列121(東から)



7区北東部溝7検出状況(東から)





7区北西部溝7検出状況(東から)

7区溝7瓦出土状況(西から)



3 7区北東部溝7完掘状況(西から)



7区北西部溝7完掘状況(東から)





1 7区溝49 (南東から)

2 7区土坑76 (東から)



8区南半全景(北から)





1 8区溝7検出状況(東から)

2 8区溝7瓦出土状況 (西から)



3 8区溝7完掘状況 (東から)

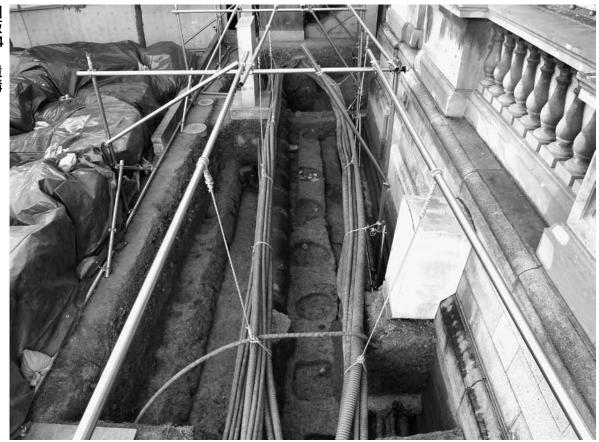
4 8区柱列77 (南東から)



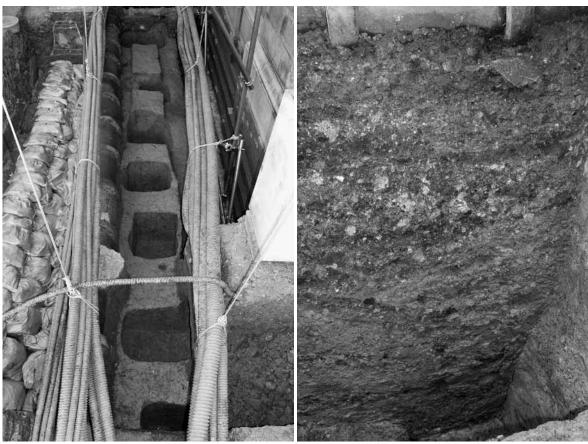
1 9区全景(北西から)



2 10区全景(東から)



1 11区全景(西から)



2 11区柱列53 (西から)

3 11区土坑60断面(南から)



1 12区全景(西から)



2 13区全景 (東から)



土器類



瓦類1



瓦類2



瓦類3



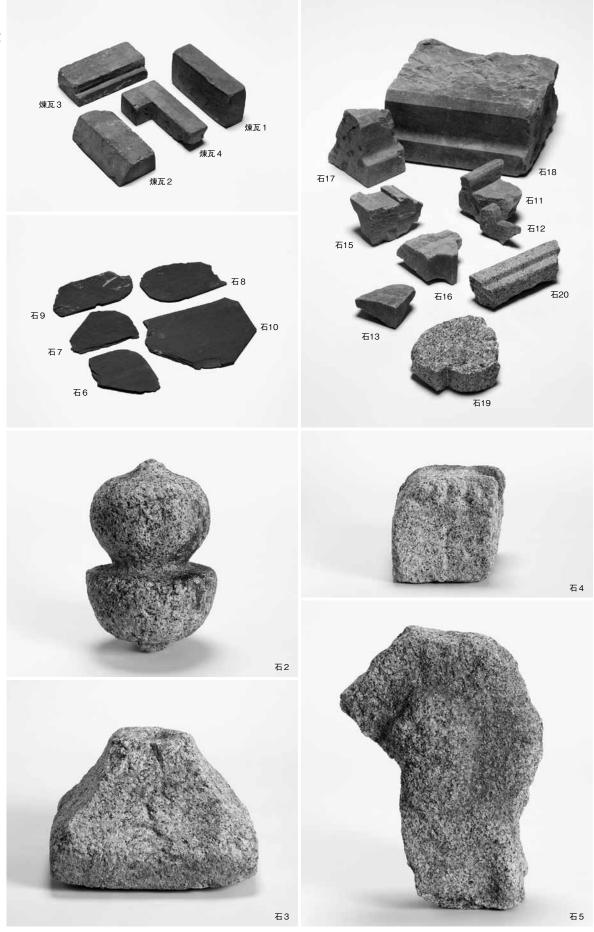
1 焼け瓦



図 版 61

遺 物

瓦類刻印



煉瓦・石製品

報告書抄録

ふりがな	ほうじゅうじどのあと・ろくはらせいちょうあと・ほうこうじあと								
書名	法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡								
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告								
シリーズ番号	2021-13								
編著者名	小檜山一良								
編集機関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所								
所 在 地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1								
発 行 所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所								
発行年月日	西暦2022年8月31日								
* り が な 所収遺跡名	。りがな 所 在 地		コ 市町村	ード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
はうじゅうじどのあと 法住寺殿跡 ろくはらせいちょうあと 六波羅政庁跡 ほうこうじあと 方広寺跡	きょうとしのがしやまく 京都市東山区 ちゃやちょう 茶屋町527番地		26100	546 540 541	34度 59分 25秒	135度 46分 25秒	2018年10月 22日~2019 年3月22日、 2020年9月 28日~2021 年5月27日、 2022年1月 14日~2022 年2月28日	848 m²	建物免震改修工事
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項	
法住寺殿跡	寺院跡離宮跡	平安時代		井戸、土坑		土師器、輸入陶磁器、 木製品		井戸を検出した。	
六波羅政庁跡 方広寺跡	都城跡 邸宅跡 寺院跡	安土桃」	山時代 寺代中期	築地、柱 布掘、石	組、土坑	器、施釉	瓦器、焼締陶 陶器、染付磁 品、瓦類、石 属製品	築地、再建期の南	
	江戸時代		代後期 井戸、 溝、土		列、柱穴、	土師器、焼締陶器、施 釉陶器、染付磁器、土 製品、瓦類			
		明治時代以降		柱列、土坑、溝、 埋設管、集水桝、 旧本館建物基礎		焼締陶器、施釉陶器、 染付磁器、瓦類、土製 品、煉瓦、石製品、金 属製品		恭明宮に関係する 溝が明らかになっ た。 旧本館に関連する 排水施設などが明 らかになった。	

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2021-13 法住寺殿跡·六波羅政庁跡·方広寺跡

発行日 2022年8月31日

編 集 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住 所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1

 \mp 602 - 8435 Tel 075 - 415 - 0521 http://www.kyoto-arc.or.jp/

印 刷 三星商事印刷株式会社

住 所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地

 $\mp 604 - 0093$ Tel 075 - 256 - 0961